

The background features a collage of historical figures and documents. In the top left, there is a portrait of an elderly man with a beard, likely a Western scholar. In the top right, a man in traditional Japanese attire stands next to a table. In the bottom left, a man in traditional Japanese clothing is seated. In the bottom right, a man in a Western-style suit is shown. A faint document with handwritten text is visible in the middle left. A dark horizontal bar is positioned across the middle of the page, containing the main title.

# 好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 I

2018

近代博物館形成史研究会

# 好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 I

ライデン国立民族学博物館収蔵 Philipp Franz Balthasar von Siebold 蒐集資料調査報告



2018

近代博物館形成史研究会



## 例 言

- 1 本報告は平成 29 (2017) 年度科学研究費基盤研究 (B) 「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」(代表 内川隆志) の平成 29 (2017) 年度研究成果報告である。
- 2 本報告書で成果として公表した P. F. v. シーボルト蒐集の日本考古資料についてライデン国立民族学博物館、シーボルトハウスにおける調査は、平成 28 (2016) 年度國學院大學特別推進研究助成金(国特推助第 89 号) を受け、平成 29 (2017) 年 1 月 28 日から 2 月 2 日にかけて実施した。調査者は、内川隆志、深澤太郎(國學院大學研究開発推進機構准教授)、バウシュ・イローナ、徳田誠志で行い、マティエール・フォラー氏、ダン・コック氏の全面的な協力を受けた。
- 3 研究組織(近代博物館形成史研究会)は以下のとおりである。  
研究代表者 内川隆志(國學院大學研究開発推進機構教授)  
分担研究者 長谷洋一(関西大学文学部教授)  
三浦泰之(北海道博物館学芸主査)  
連携研究者 川村佳男(九州国立博物館主任研究員)  
宮崎克則(西南学院大学国際文化学部教授)  
研究協力者 バウシュ・イローナ(元東京大学大学院客員教授)  
ダン・コック(ライデン国立民族学博物館主任研究員)  
マティエール・フォラー(元ライデン民族学博物館主任研究員)  
伊藤大祐(國學院大學学術資料センター PD 研究員)  
堅田智子(上智大学文学部特別研究員)  
鎌形慎太郎(國學院大學大学院文学研究科史学専攻博士課程前期修了)  
阪本是丸(國學院大學神道文化学部特任教授)  
徳田誠志(宮内庁書陵部陵墓調査官)  
成澤麻子(公益財団法人静嘉堂文庫司書)  
山本命(松浦武四郎記念館学芸員)  
山本哲也(新潟県立歴史博物館研究員)
- 4 本書の編集は内川隆志が行い、伊藤大祐が補佐した。
- 5 本書の執筆は各論文、報告の末尾に明記したとおりである。
- 6 「VI ライデン国立民族学博物館収蔵 P. F. v. シーボルト蒐集の石器」の事実記載、所見に関しては縄文時代の石器研究を専門とする大工原豊氏(國學院大學共同研究員)に委託した。
- 7 本書を編集するにあたり下記の諸氏、機関よりご協力を賜った。記して謝する次第である。  
(敬称略) 朝倉一貴(國學院大學文学部助手)・大工原豊(國學院大學研究開発推進機構共同研究員)・鳥越多工摩(國學院大學研究開発推進機構客員研究員)・佐々木英夫(上智大学文学部教授)  
富山悠加(國學院大學大学院文学研究科博士課程前期)・高橋桃子(國學院大學卒業生)・サイモン・ケーナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長)



## 目 次

I	研究の目的	1
II	P. F. v. シーボルト蒐集考古資料調査に至る経緯	3
III	P. F. v. シーボルト『NIPPON』の出版と図版の作成	5
IV	P. F. v. シーボルトによる石器蒐集の背景	9
V	P. F. v. シーボルトによる日本考古遺物の蒐集について	13
VI	国立ライデン民族博物館収蔵 P. F. v. シーボルト蒐集の石器・玉類	18
VII	P. F. v. シーボルトが持ち帰った『子持勾玉』について	36
VIII	ライデン国立民族学博物館所蔵『古山陵之図』の検討	43



## I 研究の目的

平成 22 (2010) 年に採択された科学研究費基盤研究 (C)「博物館における人文資料形成史の研究 静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵料の研究と公開」(代表 内川隆志)によって公益財団法人静嘉堂文庫に収蔵されている松浦武四郎旧蔵古物資料約 900 点の整理が完了し、あわせて武四郎をとりまく好古家達との交流の一端も明らかにすることが出来た(内川 2013)。今回採択された平成 29 年度科学研究費基盤研究 (B)「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」(代表 内川隆志)は、近代博物館揺籃期において博物館創設、初期文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした維新期から続く好古家とその活動およびネットワークに関して考究することを目的とし、近代博物館制度、文化財保護制度が近代以前の学問体系に裏打ちされた数多の好古家の協力と実践なくしては成し得えなかったことに焦点を当て、維新前後に彼らに影響を与えた外国人について、新たな観点から研究するものである。従来の日本博物館史研究で顧みられなかったこの視点は、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期における人文科学そのものの成り立ちを考える上で重要な課題でもある。近代以降の「博物館」の前身として、「モノ」を展覧する場として近世後期の「物産会」「薬品会」などがあった事は良く知られているが、「物産会」には、どのようなものが出品されていたのか、主催者以外に出品者としてどのような人物が関わっていたのか、出品者間にどのようなネットワークが築かれていたのかなど、具体的な研究は、ほとんど深められていない。

近代博物館の成立に関する先行研究では、『東京国立博物館百年史』同資料編を底本として多くの著作、論考が知られるものの、中央行政を支えた市井の好古家達についての具体的な研究は少数である。そこで市井に紛れて全国に散らばる好古家の存在を確認し、「モノ」と人を繋ぐ新たな視点で課題として捉え直すことは重要である。この点については、研究分担者の三浦泰之による『松浦武四郎研究序説 - 幕末維新期における知識人ネットワークの諸相』(笹木・三浦 2011)によって松浦武四郎をとりまく具体的なネットワークの内容が明らかにされており、本研究の推進によってさらなる新知見の蓄積につながることに期待したい。このような先行研究から、おぼろげながらも全国各地で活動する好古家の姿が浮かび上がってきたのであるが、これらの業績をもってしても、維新期から続く好古家同志のネットワーク形成に関するより詳細な研究は充分とは言えないのである。

また、江戸後期から続くシーボルト父子など外国人との交流が、近代博物館、近代文化財保護制度に影響を与えた事を具体的に説く先行研究は皆無といえる。例えば明治 4 (1871) 年の「古器旧物保存方」の保護すべき品目に農具や民具などが加えられたのは、従来の日本の好古家になかった彼らの視点による新たな価値観が影響していることが考えられる。特に博覧会をはじめとした文化財行政、博物館揺籃期に関わりのあった外国人のキイパーソンである H. v. シーボルトに注目したい。H. v. シーボルトは、明治初期にあつて日本の好古家との交流の中で「古物会」を主催し、自ら多くの古物を蒐集し、1888 年にはオーストリア帝室博物館に 5,200 点もの日本関係コレクションを寄贈し、今もそれらはオーストリア国立工芸美術館などに保存、管理されている。また、ドイツのブランデンシュタイン城のシーボルト・アーカイブには、兄 A. v. シーボルトと共に伝えた日本関連コレクションが存在し、国立歴史民俗博物館(総括責任者日高薫氏)が「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクト「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19 世紀)日本で収集された資料についての基本的調査研究」により規準資料の復元的調査研究および共有作業が進められている。大英博物館にも H. v. シーボルトの日本関係資料が確認できる。P. F. v. シーボルト、H. v. シーボルト父子関係資料は、周知のとおり考古、民俗(民族)、宗教など多岐にわたり、かつ膨大であるため、先の基本的調査研究と並行して、個々の分野に精通した研究者が「モノ」そのものの入手経路や海外への流出経緯について、詳細に分析する必要がある。シーボルト父子に関しては、平成 28 (2016) 年 12 月に國學院大學博物館で開催した国際

シンポジウム「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」において本研究が目指す日本の好古家との接点という内容で、ライデン国立民族学博物館、オーストリア応用美術館、ギメ東洋美術館、ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館（クンストカメラ）の研究者を招いてシンポジウムを行い、かかる課題に関して共通認識を有する海外の人的ネットワークを既に有していることも当該研究課題の推進に弾みをつけることとなった。

統括すると本研究の柱は、以下に示した通りである。

- ① 近世後期の「物産会」から、近代博物館制度・文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探る事を目的として、特に京都で山本亡羊・榕室が主催して近世後期に毎年のように開催された「読書室物産会」や名古屋で天保期に開催された「尾張名古屋博覧会」など、日本全国の主要な都市で開催された「物産会」の詳細について、国立国会図書館や三重県津市石水博物館、名古屋市東山植物園、岩瀬文庫などが所蔵する出品目録から、その全体像を明らかにし、近代初期の博覧会との関係性を具体的に見出す。
- ② 好古家蒐集古物資料の調査研究と国内における好古家ネットワークの研究を実施する。明治前期の好古家の内、静嘉堂蔵松浦武四郎蒐集古物資料の未整理資料並びに松浦武四郎記念館所蔵古物資料に関する整理作業の推進並びに『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』等に記録される古物の具体的な研究と付随する書簡、箱書き等を中心として幅広く幕末維新期における好古家同志のネットワークの詳細を明らかにする。
- ③ 特に考古学的な観点からシーボルト父子がヨーロッパ各地に遺存させた日本の好古家との関連を示すコレクションに関して具体的な調査研究を実施する。ヨーロッパとりわけドイツ、オーストリアにおける日本学（Japanologie, Japanology）の観点から、日本研究者としてP. F. v. シーボルト、H. v. シーボルト父子をとらえる。日本学は、文献学からスタートした学問であるため、「モノ」そのものの分析は不十分であることから考古学、民俗（族）学の観点でヨーロッパに伝存する好古家との関わりを伝える具体的な「モノ」の分析を目指すものである。

（内川隆志）

## II P.F.v. シーボルト蒐集考古資料調査に至る経緯

明治初期の好古家達に多大なる影響を与えた H.v. シーボルト (1852-1908) は、P.F.v. シーボルト (1796-1866) の次男で、明治 2 (1869) 年、兄 A.v. シーボルト (1846-1911) と共に来日し、明治政府の連絡要員として起用されたウイーン万国博覧会前後、数多の好古家との交流を結んだ。彼は、東京で同好の輩を集め明治 8 (1875) 年 12 月に「古物会」を主催するなど、好古家達との直接的なネットワークを築いて自らも多くの古物を蒐集したのである。と同時に欧州の先進的な文化財や博物館の考え方を紹介するなど初期の文化財行政を担った好古家達に大きな影響を与えたことも重要である。彼が蒐集した日本コレクションは、明治 21 (1888) 年に、オーストリア帝室博物館に 5,200 点が寄贈されるなど、その後分散されたコレクションは今もヨーロッパのいくつかの博物館に保存されている。明治 12 (1879) 年に著した『JAPANESE ARCHAEOLOGY』には、好古家達との交流で蒐集した考古資料が掲載され、そのいくつかは現在日本で確認されている。殖産興業政策の下、明治政府によって導入された博物館という文化装置は西洋から輸入されたものであるが、実際の運営は幕末から明治を生き、数多の好古家達によって支えられていた。先におこなった研究において松浦武四郎は、町田久成、蜷川式胤、E.S. モースをはじめとした文化人と交流をもって当時の文化財保護行政に直接的に関与すると共に、自らも積極的に廃仏毀釈に疲弊する社寺の保護に奔走していた事実も確認することができたのである。本研究は、H.v. シーボルトの影響下、これまでになかった新たな価値観をもって保護すべき文化財を拡大していった可能性を立証することを課題の一つとしている。例えば、柏木貨一郎 (1841-1898) が記した明治 4 (1871) 年大学南校物産会の記録である『明治辛未物産会目録』には、農具、民具などの詳細な図解が残されていることなども、日本にはなかった新たな価値観の現れと考えることもできる。このように、既存資料、追加資料の研究によって、資料そのものの価値と付随する情報によって新たな好古家ネットワークが解明されることは必至であり、先の研究以降深めた好古家ネットワークのキイパーソンである幾人かの好古家についてもその詳細を明らかにすると共に、彼らに「古物会」を通じて欧州の学問的基盤を教授し、その後の展開に多大なる影響を与えた H.v. シーボルトの日本での活動と新たな観点で彼が欧州にもたらした日本の古物の実態を追う意義は大きいものとする。既存研究は、海外に

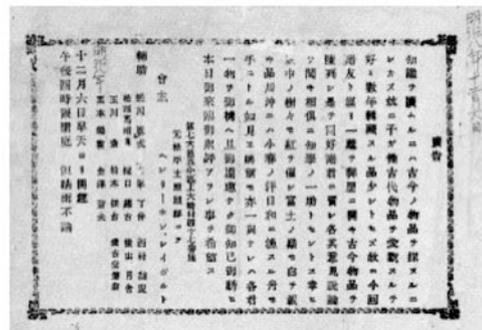
### 廣告

知識を廣むるには古今の物品を探るに  
 しかず茲に予が性古代物品を愛玩するを  
 好み数年輯蔵する品少しとせず故に今回  
 諸友と謀り一筵を弊屋に開き古今物品を  
 陳列し是を同好諸君に質し各其意見説論  
 を聞き相俱に知學の一助せんとす幸ひ  
 庭中の樹々も紅を催し富士の嶺も白を戴  
 き品川沖には小春の浮日和に漁する舟も  
 手にとる如見え眺望も亦一興なれば各君  
 一物を御携へ且御遠慮なく御知己御誘ひ  
 本日御來臨御衆評あらん事を希望す

第七/大區五小區上大崎四十七番地  
 元松平主殿頭邸にて

會主	ヘンリー	ホン	シイボルト
補助	蜷川 胤式 (ママ)	古筆	了仲
	松浦馬雨齋	樋口	趨古
	玉川 齊	柏木	探古
	栗本 鋤雲	金澤	蒼夫

十二月六日早天より開筵  
 午後四時閉筵 但晴雨不論



明治 8 (1875) 年「古物会」引札

所在する膨大なコレクションの紹介に留まっていたが、個々の資料について日本の好古家との関連性からみた評価を与え、「どうしてこれが誰との関わりで此処にあるのか？」ということをも具体的に明らかにし、新たな布石たる研究成果を目指すものである。

本報告では、彼の考古学のバックグラウンドとなった父 P. F. v. シーボルトが、オランダ・ライデンに遺した日本を含む考古資料に関する調査成果を明らかにするものである。コレクションはライデン国立民族学博物館とシーボルトハウスに分散して収蔵されており、両館に赴いて調査を敢行した。現地での研究支援は元ライデン民族学博物館のマティーフォラー博士並びにライデン国立民族学博物館研究員であるダン・コック博士に全面的に協力して頂いた。具体的な作業としては資料の熟覧・撮影・実測図の製作等を行い、対象資料の一つは高野長英（1804-1850）が書写したとされる『古山陵之図』で、元は「元禄の山陵取調」に伴って作成されたものであり、ライデン国立民族学博物館の収蔵品はその写しであると思われる点について熟覧し内容を確認した。さらに P. F. v. シーボルトの大著『NIPPON』に所載されている縄文時代の石器類、勾玉をはじめとした古墳時代の遺物について調査を実施した成果をここに明らかにするものである。

藤原貞幹『集古図』	松平定信『集古十種』	P.F.vシーボルトの蒐集品	明治4(1871)年「古器旧物保存方」
刀剣	兵器	武器	武器
古画	古書画・肖像	絵画・浮世絵	古書画・古仏像並びに仏具
銅鐸		考古遺物	石弩雷斧
鉄器			
瓦器			
矛			
鍬			
古鈴			
玉器			古鏡古鈴
碑銘	碑銘・鐘名		鐘鈺碑銘墨
銅器	銅器		銅器・諸金屬造器
扁額	扁額		扁額
文房器	文房		文房諸具
銅印	印章		印章
	楽器		楽器
		貨幣	貨幣
			化石
服飾・襦袢		衣類	衣服装飾・布帛
磁器			陶磁器
輿			車輿
度量			度量権衡
天文		書籍	古書籍並びに古経文
地理		家具	屋内諸具
食器		玩具	遊戯具・雛織等偶人並びに児玩
殿舎門屏(建築)		農機具	農具
鳥魚		動植物・木材で作られた工芸	皮革
草木			漆器
餅(神饌)		宗教関係	祭器
		科学的道具	工匠器械
		漁具	
		機材と道具の模型	
		建物	
		模型	
		アイヌ文化民族資料	
		朝鮮半島民族資料	
		アラスカ民族資料	

江戸時代後期から明治時代初期における「古物」の分類

(内川隆志)

### Ⅲ P.F.v. シーボルト『NIPPON』の出版と図版の作成

#### 1 『NIPPON』出版年の混乱

『NIPPON』の出版年については少し混乱がある。原因は、在庫を買い取ったクオリッチが独自に1852年と明記した内表紙をつけて販売したからである。P.F.v. シーボルトは1866年10月にミュンヘンで死去し、『NIPPON』などの在庫は夫人によって処分された。それをロンドンで古書店を営むクオリッチが購入し販売した。在庫であるから、本文・図版ともに初版本と同じであり、同じ透かし模様が確認できるが、初版本と異なる特徴も備えており、ここではクオリッチ版と呼ぶ。

現存する欧米屈指の古書店、クオリッチ社のホームページ (<http://www.quaritch.com/>) によると、創業者のバーナード・クオリッチは、ドイツのゲッチンゲン近くのヴォルビス生まれ。15歳で書店に勤め、ベルリンで修行を重ねた後1842年にロンドンへ移る。彼は『グーテンベルグ聖書』などの稀観書をはじめ上質の写本類、祈祷書、地図などを扱い、独立後わずか10年余のうちに急速に発展した。彼は新刊書の在庫を買い取って販売することを行っており、ドイツ語で書かれた『NIPPON』もその一つとして販売された。

ただし、『NIPPON』は完結しておらず、未完成であり、しかも分冊で通しのページ番号や全体の目次もなく、図版・本文ともに1枚1枚バラバラの状態だった。クオリッチはこれを整理し、内表紙を新たに付けて販売した。内表紙に記された「1852」年は、クオリッチが付したものであり、実際の『NIPPON』刊期とは関係ない。このため、クオリッチ版を所蔵する機関の目録などでは、1852年に『NIPPON』が刊行されたことになっている。

分冊で出た『NIPPON』は、第1回配本が1832年、13回配本が1851年であり、その後の1858～59年頃に「琉球諸島」等に関する本文などが出た。このことは、文中に「1857年5月17日」の年月日があることから判明する。「琉球諸島」の本文を含むのはクオリッチ版であり、初版本には見あたらない。この他に「京都の全景」・「江戸の全景」の図版もクオリッチ版にのみ含まれている。まだ断定はできないが、「琉球諸島」等に関する本文や京・江戸の全景図は印刷されていたものの、配本されずにP.F.v. シーボルトの手許に残され、在庫を買い取ったクオリッチによって初めて売り出された可能性がある。

配本	「INHALT」番号	『NIPPON』章節	図版数	内 色つき 図版数	備考
第1回	第1目録	第1・3章	16枚+口絵	2枚	1832年(内表紙)
第2回	第2目録	第6・7章	17枚	2枚	
第3回	第3目録	第2・5章	17枚	0枚	
第4回	第4目録	第1・4章	11枚	4枚	
第5回	第5目録	第2章	17枚	0枚	
第6回	第6目録	第2章	21枚	0枚	
第7回	第7.8目録	第7章	41枚	6枚	1839年10月(シーボルト報告)
第8回	第9.10目録	第2・7章	40枚	15枚	8回・9回配本は同時配本
第9回	第11.12目録	第3章	35枚+付図	4枚	
第10回	第13.14目録	第3章	40枚	8枚	
第11回	第15目録	第2章	20枚	0枚	
第12回	第16目録	第6章	20枚	2枚	
第13回	第17.18.19.20目録	第1・5・6・7章	66枚	4枚	1851年9月(シーボルト報告)
(不明図版)			4枚	0枚	

## 2 『NIPPON』の出版と値段

1828（文政11）年の秋、P.F.v. シーボルトは帰国の予定であった。この年の8月、猛烈な台風が北部九州を襲う。台風の襲来は事実であり、北部九州の諸藩には多くの被害記録が残っている。この台風によって、P.F.v. シーボルトが乗る予定であったハウトマン号が座礁し、積荷から日本地図などが見つかり、「シーボルト事件」が発覚したと語られてきた。オランダ船の座礁と日本地図の没収は、もともと別々の事件であったが、当時から2つの事件は結びつけて語られてきた。P.F.v. シーボルトは、長崎奉行による取り調べに対し、一貫して協力者の名をあげることを拒んだが、結局、門人やオランダ通詞などが処罰され、シーボルトは国外追放となり、1829（文政12）年12月に日本を離れる。日本地図などは没収されたが、その他の民俗資料、動物・植物標本を持ち帰ることができた。P.F.v. シーボルトは、1832（天保3）年から『NIPPON』、33年から『日本動物誌 (Fauna Japonica)』、35年から『日本植物誌 (Flora Japonica)』を分冊で刊行。多くのカラフルな図版を用い日本の文化や自然を詳しく紹介した。

オランダに帰り着いたP.F.v. シーボルトは、1832年5月からライデンのラーペンブルフ19番地に落ち着く。その借家において、P.F.v. シーボルトは日本で収集した資料を展示するとともに、石版印刷機2台を設置し、画工を雇って図版を作成させた。『NIPPON』の販売は、10%から25%の手数料で取次店と契約を結ぶとともに、自宅からも発送した。つまり、印刷所と書店を自ら経営するシーボルトの自費出版によって、『NIPPON』は刊行されたのである。本文は活版印刷であり、P.F.v. シーボルトの自宅でなく、ライデンのヨアネス・ヘラルト・ララウに任された。本文の内表紙下部に、1832年、ララウ（LALAU）が印刷したことが明記され、取次店としてアムステルダムのミュラー（J. MULLER）とライデンのファン・デ・フック（C.C. VAN DER HOEK）社が記されている。

分冊で出た『NIPPON』に全体の目次はなかったし、通しのページ番号もなかったので、製本の過程でさまざまな異同が起り、現存する初版『NIPPON』の一つとして同じものはないといわれる。九州大学附属図書館医学分館にある『NIPPON』（1926年購入、3000円）は製本されていない初版本である。これには1832年の第1回配本の内容目次である「INHALT」から、1851年の13回配本の「INHALT」がすべて残っている。「INHALT」は全体の目次でないから、製本するときに捨てられることも多い。13点の「INHALT」によって、どのように『NIPPON』が配本されたのかわかる。表に明らかなように、『NIPPON』20分冊は、P.F.v. シーボルトが整理できた章節から出され、当初は本文に関連する図版を添えて、順調なペースで出されていたが、7回配本から遅れだす。1839年10月の日付のある報告が「INHALT」にあり、P.F.v. シーボルトは出版を急ぐことを記している。しかし、その後も合併号が登場し、しかも8・9回配本は同時配本であった。そして、ますます本文と図版の対応は崩れていった。

結果的に、1～7章の本文と367枚の図版がある『NIPPON』となったが、文章が途中で途切れたままの箇所もあり、「未完の大著」といわれる。第1章の本文がどのように配られたのか見てみると、AとBの前半は1回配本で出されたが、Bの後半は4回配本、Cは13回配本であった。つまり、1851年の13回配本まで待たなければ、1章の本文は完成しなかったのである。このように、章節の順序がバラバラに近い状態で配本された『NIPPON』を購入した人々の苦労は大変だったと思われる。購入者たちは、完結後に、或いは完結と思われたときに、本文・図版を並べ替えて製本したのである。

『NIPPON』の値段について、大英図書館が所蔵する初版『NIPPON』は、本文が3冊、図版が7冊に製本されている。製本された本文の最後に『NIPPON』・『日本動物誌』・『日本植物誌』の広告がある。広告に年代の記載はないが、1852年頃といわれる。『NIPPON』の値段は、

価格：白黒、4折判の本文と図版 . . . . . 187ターラー  
4折判の本文、服装などが彩色されている2折判の図版 . . . 308ターラー

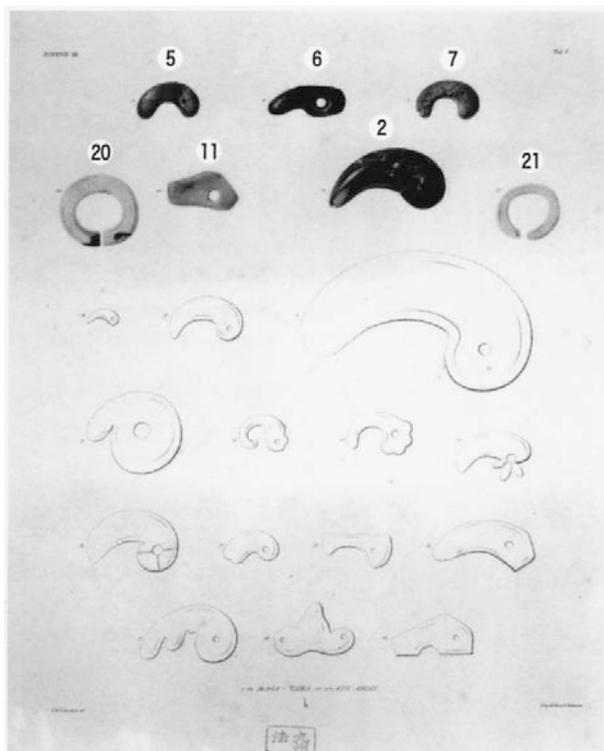
とある。豪華版『NIPPON』（4折判の本文と2折判の図版、図版367枚のうち47枚は手彩色）の値段は308ターラー、廉価版（4折判本文+4折判図版、白黒）は187ターラーであった。当時の平均的な労働者の年収は120～160ターラー、ケルン市の教頭の年収は500～700ターラーだったので、かなり高価な本であった。

### 3 『NIPPON』図版の作成

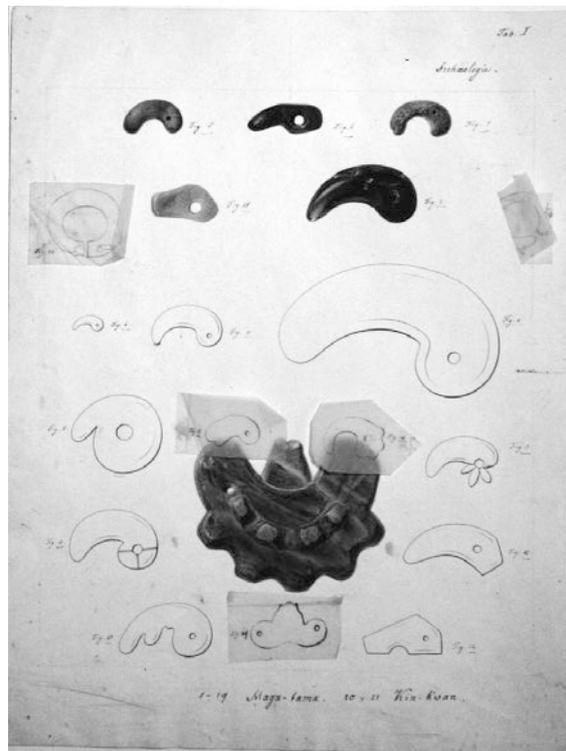
図版はどのように作られたのか。第1回配本で勾玉の図1が配られ、それには手彩色が施されている。1回配本では、本文の1章と3章の一部が配られた。1章は日本の地理情報やヨーロッパ人による日本発見史、3章は日本の歴史である。配られた図版は本文に対応する17枚が配られ、そのうち考古遺物を描いた2枚に手彩色がある。

図版「勾玉・金環」の解説は、P.F.v. シーボルト門人の伊藤圭介（名古屋の植物学者・医師）が提出したオランダ語論文（『勾玉考』）をもとに、P.F.v. シーボルトの識見を加えて記述している。彼は、勾玉の種類・使用・分布或いは系統論を述べており、より高い文化をもつ民族が日本へやってきて中心部に王朝を創建したため、かつての民族はその宝石をもって北・南に逃れた。今日（江戸時代）でも蝦夷・千島では勾玉が「シトギ」という貴重な装飾品として用いられ、琉球では勾玉によく似た石を身につけて宗教行事の装飾品にしている、という。図版の彩色されていない勾玉・金環・管玉類は、多くが伊藤論文からの転写である。もともと伊藤の図は簡単で彩色もなかった（伊藤は木内石亭『曲玉問答』をネタ本としている）。彩色された勾玉類は、P.F.v. シーボルトが収集したコレクション或いは友人のコレクションの模写であり、P.F.v. シーボルトは『NIPPON』注記で、

私は勾玉を手に入れようといろいろ努力してみたが、Ⅲ第1図（b）の2.5.6.7.11にみられるようなものを得たにすぎなかった



『NIPPON』図版「勾玉・金環」  
（九州大学附属図書館医学分館蔵）



「勾玉・金環」の下絵  
（ブランデンシュタイン城博物館蔵）

という。したがって、図版で彩色されている勾玉類は、実物が P.F.v. シーボルトの手許にあったことになり、それをもとに色が塗られた。そのいくつかを 2010 年にライデンのシーボルトハウスで見ることができた。この図版はどのように作成されたのか、そのことを窺わせる下絵がブランデンシュタイン城博物館にある。P.F.v. シーボルトの子孫が居住するドイツのブランデンシュタイン城博物館には、図版を作るための下絵が残されている。図 2 は勾玉の下絵であり、『NIPPON』図版とは異なっている。その変化の背景にはシーボルトの「意図」がある。P.F.v. シーボルトは何を「意図」して図版を作成したのか、こうしたことを考えさせる下絵がブランデンシュタイン城博物館に多く残っている。

#### 参考文献

宮崎克則『シーボルト「NIPPON」の書誌学研究』（花乱社、2017 年）

（宮崎克則）

#### IV P.F.v. シーボルトによる石器蒐集の背景

18世紀にはじまる博物学の本格的な流行は、全国規模のネットワーク形成によってさらなる盛り上がりを見せる。特に宝暦12(1762)年の第5回東都薬品会における九州・近畿・信州・越中など多くの地方からの物産の出品は、それらの地域における博物学の学問的基盤を反映しているものと推定される。博物学が流行した当時の市井の碩学として近江国の木内石亭(1724-1808)と大坂の木村兼葎堂(1736-1802)、升屋平右衛門(1764-1836)等があげられる。特に彼らは、当時流行していた天産物を網羅的に集めた諸大名のそれとは異なった独自のコレクションを形成したのである(内川 1996)。

「奇石」というものに生涯執着して蒐集と研究を継続した好古家として名を馳せたのが「石の長者」と称された木内石亭(1724-1808)である。生涯を通じ安永2(1773)年『雲根志』前編、安永8(1779)年『雲根志』後編、天明3(1783)年『曲玉問答』、天明8(1788)年『百石図巻』、寛政3(1791)年『社中奇石之図』(著述目録にのみ記載有り)、寛政4(1792)年『化石の四説』『舍利弁』、寛政6(1794)年以前『奇石産誌』『神代石之図』『石亭石譜』『石亭千腸録』(著述目録にのみ記載有り)『大石之図巻』(著述目録にのみ記載有り)、寛政6(1788)『竜骨記』『石鏃伝記』『天狗爪石奇談』など石に関する多数の著述を残した。その人物像は、先学の著作(斉藤 1962他)に委ねることとし、ここでは、彼がどのような信念をもって奇石を集めたのかという点に絞ってまとめておく。石亭の石への興味は、安永2(1773)年『雲根志』前編の「二十一種珍蔵」の項に「予十一歳にして初めて奇石を愛し、今に三十年來董夜を翫でて他事なし此のために諸国へ通行する事凡三十余国、今求め集る庭の石風二千余品の中に二十一種の珍種あり、同志の人たづね来らは足を見すべし」と記しているように奇石への興味は11歳の頃からということになる。博物学隆盛の只中に生まれた石亭は、28歳にして、京の博物学者津島恒之進(如蘭)(1701-1754)が主催した物産会を見学に行き、これを契機に恒之進に師事した。門弟には、ひとまわり年下の木村兼葎堂がいた。大坂在住の博物学に明るい医家、戸田旭山(1696-1769)との知己を得たのもこの頃である。宝暦4(1754)年、師が没して後、宝暦6(1756)年、江戸博物学の大家田村藍水(1718-1776)に入門した。そこには6歳年長の平賀源内(1728-1780)が兄弟子としており、当時の博物学のエリート達との研鑽のなかで彼の感性は研ぎ澄まされ、後の学問形成に大きく影響することとなる。この間も奇石への興味は尽きず、宝暦13(1763)年には戸田旭山(1696-1769)の物産会に明和2(1765)年、同3年の京都東山、安永2(1775)年の浪華物産会などに自らの蒐集品を出品するなどしているが現状に飽き足らず同好の士を集めて「弄石会」を組織した。弄石会は、奇石を好む同人たちの集まりである。天明年間の『石亭石譜』には「海内同好の知己三百余人、国所姓名悉く知己帳に詳なり中にも親友二百余人の書翰の端を剪りて毎巻となし、席上に尊入によることも時と敬す」とあるように、石亭と交友を結んだのは300人にも及んでいることが明らかである。『雲根志』『天狗爪石奇談』の中にも弄石会同人の名が多く記され、その交友範囲も学者、公卿、大名、神官、僧侶、商人と幅広い。石亭の住した近江山田村の近在に住した西遊寺住職鳳嶺や、安永、天明の頃から交流のあった飛騨高山の酒造業二木長嘯などとは、親しい付き合いをしていたことが互いに交わした書翰によって明らかである。長嘯は、縄文遺跡の多い飛騨という土地柄、石鏃や石斧といった石器をよく集め、石亭はしばしこれを見守った。また、彼の交友は、鋏石亭と号するほど夥しい数の石鏃を集めた美濃市橋村の谷理九郎、九藤次親子や末石亭と称した近江甲賀の服部鶴甫、勾玉をはじめとした玉類、石剣などの古墳出土物を多数保持した大和柳本の普賢院住職泰然などであり変わり種揃いである。

石亭の蒐集品に関して寛政12(1800)年、飛騨高山の大坂治助がその蔵品を見せられ『江州木内石亭翁蔵奇石記』と題した記録を残している。それによると石亭の収蔵品は1番から11番までの箱に種類を違えて整理分類したものと、堆朱の五重の特別の箱に納めた21種の秘蔵の奇石を有していた。奇石蒐集の流行は寛政6(1794)年『鏃石伝記』に「寛保延享以来、わづかに五十年、四方に奇石を弄ぶ

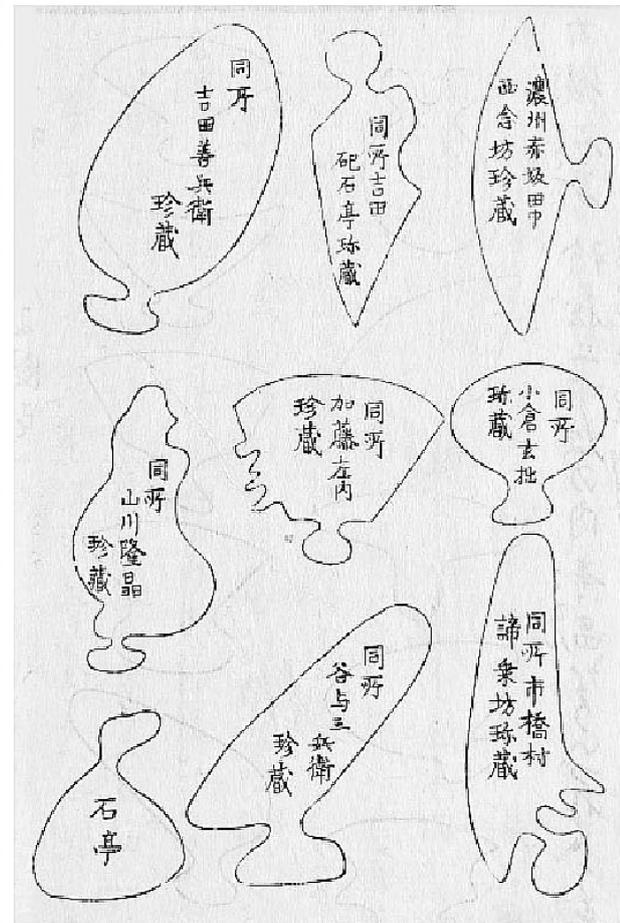
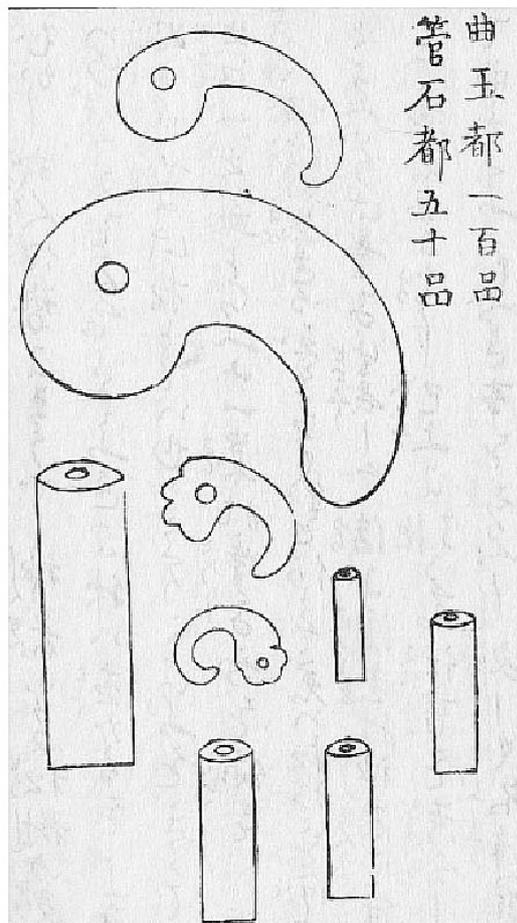
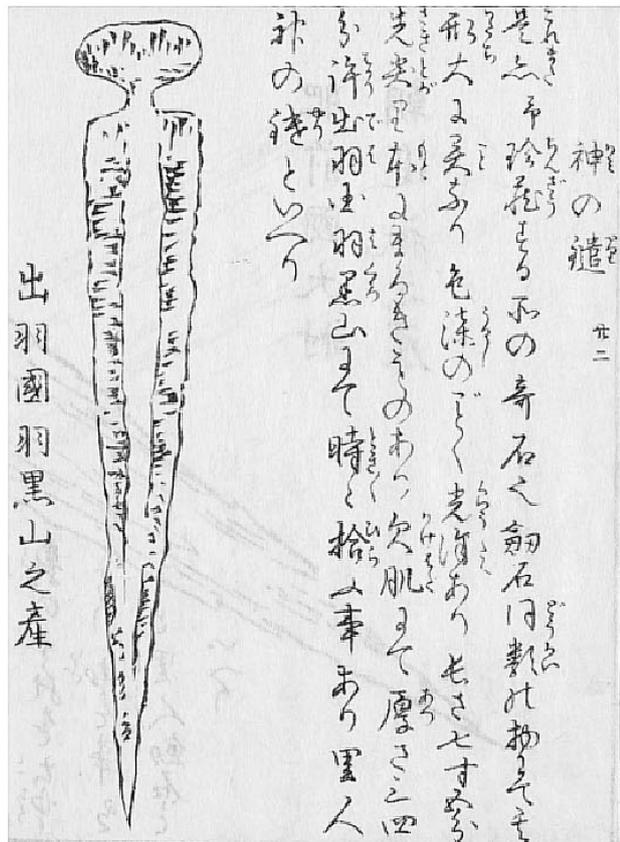
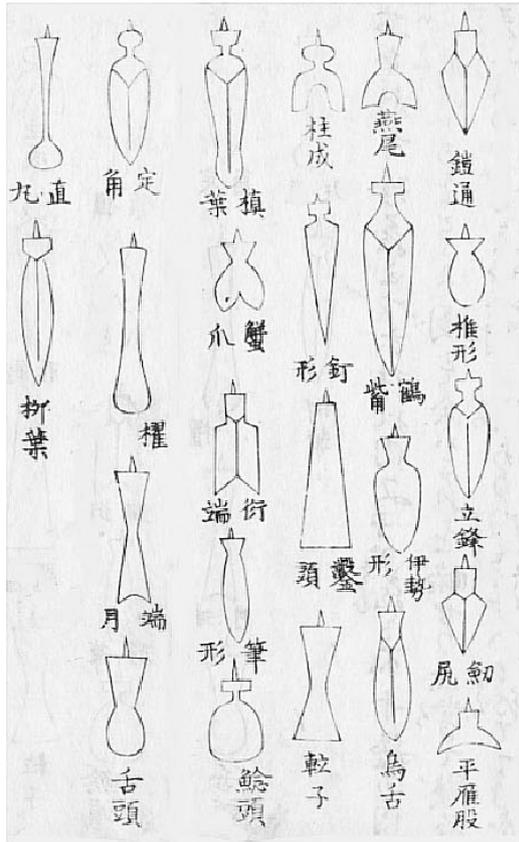


図1 『雲根志』後編四（鐵石・神の鑑・曲玉・天狗飯匙の図）



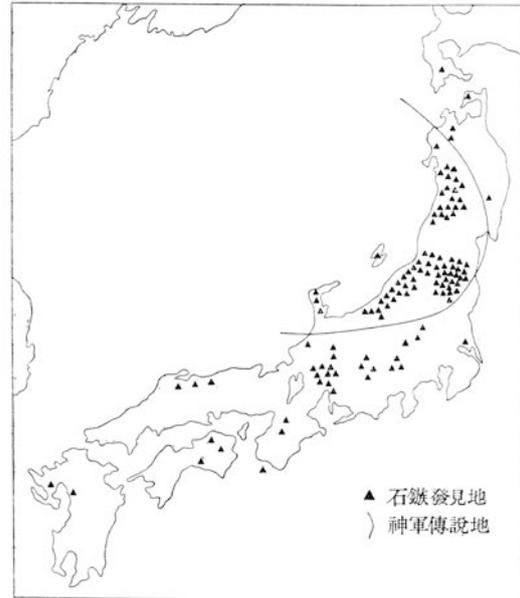
図1 『雲根志』後編五（石剣頭）

ことを流行して、国々に鑠石を出すこと少なからず」と記されているように、寛政の頃にはピークを迎えていたようである。この頃、珍奇な石を求めて全国を旅するものや、「石の修業」と称して自慢の石を携えて弄石家を訪ね歩く者などがいた。石亭の蒐集は自らが旅をして入手する方法を基本とし、現地でどうしても入手困難な場合は、地元の所有者を訪ね懇願し手に入れた。二木長嘯から幾度となく無心したように人から譲り受け、あるいは交換というかたちで蒐集品を増やした。購入によることも時としてあった。当時奇石を売り歩く者もいたと見え、寛政元（1789）年9月7日の二木長嘯宛の書状に「此間紀州、湯浅と申処の者之由にて、奇石を商に参り申候。雑石共に候へ共中に十五、六種は珍敷物も御座候。拙老も石剣頭と曲玉壺つと、雷角と申す物と三種求め申候。三種共紀州日前宮と申大社の山にて穿得候由申候。三種共上品物にて慶申候」などの記述が認められる。

P.F.v. シーボルトコレクションに多数認められる石鑠や石匙、曲玉は、石亭の『雲根志』後編4に鑠石（やじりいし）、天狗飯匙、曲玉として図解とともに記される。鑠石は、天上の神々の戦によって矢が降ってきたという神軍使用説、石器降天説などと共に古くから人々の興味を惹いた石器の一つである。『雲根志』にも記されているように『続日本後記』巻八、仁明天皇承和6（839）年の条や『三代実録』巻四十六陽成天皇元慶8（884）年9月29日の条などに出羽国に、雷雨の後に鑠に似た石が降るといふ異変を伝え、朝廷が諸神を恭祀するよう命じた等の記述が散見される。これらの記録は蝦夷の南下にともなう政情不安という政治的背景とも重なる出来事であった。このことについて江戸時代に出羽能代出身の寺島尚順（良安）（1654-没年不詳）が正徳2（1712）年『和漢三才図会』第1冊3ノ8に引用して神軍の鑠に関する東北地方の民譚を紹介するなどしたため「出羽の石鑠」や「雷斧」が弄石家たちの蒐集アイテムとして注目されていたことが推察される。神軍伝説は東北、越後、信州、関東などに広く伝えられ、弄石家の下には関東以北の各地からの件の石器が数多く集められることとなったのであろう。中谷治字次郎は、『日本先史學序史』（中谷1935）の中で、明治以前の諸文献から松前・陸奥・出羽・羽前・羽後・陸中・岩代・磐城・越後・佐渡・能登・越前・上野・下野・常陸・甲斐・信濃・飛騨・美濃・尾張・近江・大和・紀州・伯耆・因幡・出雲・讃岐・阿波・土佐・肥前・肥後からの石鑠117件の石鑠発見地名表と分布図を示しており特に多いのが出羽・羽前・後地方で20件となっている。本報告で分析した石器類の多くは東北、北陸地方のものである可能性が高いことからP.F.v. シーボルトがこれらの石器類を入手したと考えられる江戸参府時の文政9（1826）年頃においてもその約四半世紀前に蒐集熱を帯びていた東北、北陸地方からの石器類が市中にあった事を物語っていたことが推定

できる。

勾玉類は、『雲根志』後編4「曲玉」に所載される勾玉、管玉や5「神代石六の条」に「石儉頭」として子持勾玉の図が所載されている。特に子持勾玉に関しては、「其形鐵鎚の頭のごとくにて石なり、もつとも上古の神物神作なり、大き長四寸或は三寸、幅大さともに一寸或は一寸餘、少しゆがみ上に三筋高く彫、上下に一穴有、和州所々神社の古地より稀に掘出せり、他國より出ることいまだ聞ず、しかれどもなきにしもあらざるべし、和州普賢院、同く藤門周齋、勢州谷川氏、浪華兼葭堂これを藏す、共に和州の産なりといふ。予が藏す所も和州三輪山の産なり。勢州谷川氏の考にいはいはく、是神代太刀の頭にして石劍頭といふものなり」と述べ、伊勢国の国学者谷川士清（1709-1776）の『石劍頭考』を引いて太刀の柄頭としての用途を説明している。このように勾玉や子持勾玉といった玉類もまた江戸時代の弄石家の蒐集アイテムであったことが理解出来る。



第二五圖 明治以前石鐵發見地分布（著者原圖）

図2 中谷治宇次郎 1935より

#### 参考文献

- 内川隆志 1996 「博物館学史の一視点－蒐集・鑑識を中心として－」『國學院大學博物館学紀要』第21輯 樋口清之博士米寿記念 國學院大學博物館学研究室  
中谷治宇次郎 1935 『日本先史學序史』 岩波書店  
齊藤忠 1962 『木内石亭』 吉川弘文館 [人物叢書]  
清野謙次 1944 『日本人種變遷史』 小山書店

(内川隆志)

## V P.F.v. シーボルトによる日本考古遺物の蒐集について

### 好古家としてのアイデンティティと研究方法の背景

ヨーロッパにおける好古家の研究は19世紀の後半まで大きな変化がなかったが、P.F.v. シーボルトが出島の滞在から、『日本』の出版の間に考古学や人類学、民族学研究の世界観や方法論に変化が起こった。Bruce Trigger (Trigger, Bruce, 1989) の研究が示したように、19世紀前半までヨーロッパでは有史以前より過去に遡る方法として遺物や遺構を解釈するために、聖書・Classical Antiquity (古典世界) の記録や地域の伝説のような資料を用いることが多かった。教会の影響が強く、James Ussher 大司教の聖書分析によれば、世界は紀元前4004年に形成された事に由来する。特に18世紀から、好古家研究は貴族だけではなく、Bourgeoisie も大変興味をもって、地域の自然環境と文化を楽しむといった、ロマンと愛国心の満ちたものであるとともに地域や国のアイデンティティを代表する民族やヒーローに関する作話的解釈の影響も強くなったからである。例えば、ストーン・ヘンジは、アーサー王の首都、あるいは、ブリトン民族系のキリスト教に近いドルイドの聖地だったという解釈も知られている。野原で出土した先史時代の磨製石斧などは、「雷石」として、「あの世からのもの」と考えられたが好古家は啓蒙時代の教育を受け科学的な立場から「化石」と解釈したのである。P.F.v. シーボルトが使ったドイツ語の“Donnerkeile”は、「雷斧」の直訳で、Pfalzdorfの19世紀のドイツでも、そのような考古遺物について、「雷に対しての守り」などの伝説があったと報告している。ヨーロッパ人が世界を探索し植民地化した17世紀頃に、初めて狩猟採集民に出会い、石器の使用法を観察した以前には人間が作ったものとして認められていなかったが、その後には、民族誌の観点から「石器」として分類するのが可能になったのである。P.H.v. シーボルトも、そのような比較研究を先史時代研究に応用したのである。

しかし、19世紀の後半から生物学と地質学における新発見とともに、科学的な考古学の進歩が著しく、1830年代、デンマークのC.J. トムゼン(1788-1865)が遺物の材料や形から石器時代、青銅器時代、鉄器時代の3時代区分方を提唱し博物館展示の中で紹介した。1859年にチャールズ・ダーウィン(1809-1882)は、進化論を発表し、地質学では、旧人の人骨や石器が「旧石器時代」の層序から出土し、地球(または、人類)の年齢は確かに6000年を超えていると明らかにした。1865年、ジョン・ラボックが先史時代のコンセプトを普及し、時期区分を紹介した。残念ながら、植民地時代や「進化論研究」の結果として、EBテイラー(1832-1917)やルイス・モーガン(1818-1881)のような人類学研究者は、啓蒙時代の人間平等性な哲学に反対し、現代的な視点からすると、非常に人種差別的な考え方を発達した傾向もあった。

啓蒙時代の考え方を大事にしたP.F.v. シーボルトは、日本文化に対して、全くそのようなネガティブな考え方を示さず、逆に日本文化の伝統溢れる江戸時代における社会的価値観を深く賞賛したのである。さて、1869年、John Lubbock氏が会長となったInternational Congress of Prehistoric Archaeologyで、AW Franks氏が日本の石器に関する研究を評価し、日本考古学研究と蒐集について、P.F.v. シーボルトを「先駆者」として認め、研究内容と方法を要約しながら、彼の業績を評価したのである。

### P.F.v. シーボルトの日本民族資料蒐集

19世紀は、国家認識や植民地拡大を背景に、ヨーロッパの国々は権威ある博物館や建築で、国々のアイデンティティを誇示した時代であった。1813年オランダ政府がRoyal Cabinet of Raritiesという博物館を設立しP.F.v. シーボルト(1796-1866)は、貿易関係や神秘的な日本文化の魅力を展示するために、1815-1830年の間、日本文化と経済に関するコレクションを蒐集するよう命じられたのであ

る。コレクション蒐集が行われたのは長崎の出島であった。ブロムホフ（1779-1853）、オーバーメア・フィッシャー（1800-1848）、シーボルトらは出島に滞在し、オーバーメア・フィッシャーとブロムホフは、貿易関係の仕事で滞在していたが、シーボルトは、医者であり生物学の研究者であったため、科学的な資料も精力的に蒐集した。シーボルトは、オランダ政府に命じられ資料を収集し、対価としてのお金を契約どおりに受け取ったが、Royal Cabinet of Rarities にすぐに譲渡したわけではなく、しばらくは蒐集品を保持して研究を行い、有名な『日本』(Archiv zur Beschreibung von Japan) を執筆するようになった。長期にわたって研究を行っており、残念ながら、息子のアレクサンダーとハインリッヒが研究を受け継ぎ、彼らが出版を続けたのである。また、アシスタントとして手伝った、J. J. Hoffmann や Kuo Cheng Chang にも重要な役割があったといわれる。

第一回目の日本滞在 1823-29 のあいだに蒐集した民族資料の中には、点数は少ないが、本報告で明らかにしたように石斧・石鏃・勾玉等の考古の遺物も含まれている。コレクションの入手方法は、患者からたまたまプレゼントされたこともあったようだが、多くは 1826 年の江戸参府時に入手したと思われる。『日本』を読むと、執筆の上で非常に重要な役割を担っていたのが、軍医で植物学者であった桂川甫賢（1797-1844）であることが理解できる。シーボルトの日記によると、1826 年 4 月 10 日に江戸に到着、將軍の謁見は 5 月 1 日行われたので、しばらく暇の間様々学者に出会った。その一人に、オランダ人が「ウィルヘルムス・ボタニク (Wilhelmus Botanicus)」という名を付けた、幕府侍医の桂川甫賢がいた (Kouwenhoven & Forrer 2000, 33-34)。甫賢は、植物学者としてシーボルトとの関心が非常に近いと意気投合したと思われる。具体的にどのような関係性であったのかは不明ながら、例えば、石鏃の記述には、「桂川先生のお陰である」と明記されている。『日本』から引用した図と、シーボルトが直接収集した資料は 102 点で、彼が報告したのは、江戸時代後期のコレクターズアイテムとして最も番多い遺物は、石鏃であった。古代遺物に熱中していた江戸時代のコレクターは、石鏃を一番大事にしたようである。P. F. v. シーボルトは、1823 年から 1828 にかけての出島での滞在および江戸参府時に、蒐集した日本コレクションのすべてをノートに忠実に記録していた (写真 1)。そのノートは現在、P. F. v. シーボルトの子孫であるドイツ、ヘッセンのコンスタンティン伯爵ブランデンシュタイン・ゼッペリン氏が所有するブランデンシュタイン城に保管されている。ノートの 31 ページ、下から 4 行目には「アルベイトン・フォン・スタイン」(Arbeiten von Stein) (石材製作) とタイトルが付された「古代からの様々な石材から作られた道具 [ 図 1 ] いわゆる雷石 [ 図 2 ] 古代貨幣 [ 図 3 ] 鏃: 50(タエル)」と書かれた行には、細かく描かれた 3 つの石器のスケッチが含まれている。それは 1. 石斧、2. 勾玉、3. 槍先をイメージしたものだろう。「Donnersteine 雷石」は、ドイツで先史時代の磨製石斧を意味し、勾玉の図に「古代貨幣」と標記されているのは、当時の P. F. v. シーボルトが、勾玉のことを古代の貨幣として解釈していたからに他ならない。ブランデンシュタイン城で、同史料を調査されたマッテイ・フオラー氏 (Senior Researcher Japan Collections at the Museum for Ethnology in Leiden; lecturer Material Culture of pre-Modern Japan at the University of Leiden) は、我々の調査時 (2017 年 1 月 30 日) に、この情報とともに「ノートへの記載は 31 ページ目として、かなり新しく書き込まれている事から、これらの買収はおそらく 1828 年頃だった可能性が高い。さらに、50 タエルという値段は、100 フロリンあるいは小判 9 枚に相当することから非常に高価であったことが判流」との評価を頂いた。

「石材製作」として、ノートに記録したタイトルは、とてもシーボルトらしく自然科学的な教育背景から、蒐集したものをそのような科学的に方法で分類することを非常に大事にしていた。『日本』のなかでも、植物学の分類方法として、リンネウス式の方法を反映した可能性が高い (Vos 2001, 44-45)。興味深いのは、P. F. v. シーボルトは医者より、民族学研究者としてのプライドが非常に高く、その背

Arbeiten von Stein		Σ
5 <sup>o</sup> Tischsteine von Marborz. (von Schöckl)	— — —	9
1 Von Perunke Prunoseki	— — —	1 50
1 □ von Marborz.	— — —	1 50
4 Schleifstein	— — —	4 —
2 Tischstein von Sarentia	— — —	2 50
1 — — — — —	— — —	1 50
1 Papierstein (v. Hartw.)	— — —	1 50
1 Leuchtschiff von Sarentia	— — —	10 —
1 Schafel	— — —	10 —
2 Scheschele	— — —	3 —
2 Pfeilspitzen	— — —	} 14
3 Papierstein	— — —	
1 wasser gefäß bey Schreiber	— — —	
4 Geschmitten Kröbelle von China	— — —	30
12 Petschaft von Speckstein von China	— — —	16
2 Wappenstein von Htho. von Marmor.	— — —	15
1 Diverse Steine an den ältesten Zeiten zu verschiedenen Geräthen bearbeitet — sogenannte Donnersteine — alte Münzen — Pfeilspitzen	— — —	50
7 Grabmäler verschiedener Art nach dem Stande von der Religion	— — —	Σ: 159
		84

写真1 提供：マティー・フォラ博士  
(下から4行目)

1 “Diverse Steine aus den ältesten Zeiten zu Verschiedenen Geräten bearbeit [drawing 1] sogenannten Donnersteine [drawing 2] alte Münzen [drawing 3] Pfeilspitzen: 50 [thael]”  
「古代からの様々な石材から作られた道具 [図1] いわゆる雷石 [図2] 古代貨幣 [図3] 鎌: 50 (タエル)」

景には、彼より以前に日本で研究を行った17・18世紀のエンゲルベルト・ケンペル (1651-1716)、カール・ツンベルク (1743-1828)、イサーク・チチング (1745-1812) に強い憧れをもっていたのである。彼らは、多くの資料を収集し研究を行い、シーボルトに影響を与えたものと思われる (Effert 2008, 129-130)。P. F. v. シーボルトが強く憧れた研究者、例えば、A. v. フンボルト (1769-1859) のようにホルスティックな研究を目指した学者もいた。ヨーロッパにおける科学と哲学の啓蒙時代の影響をうけた理

想的なホリスティックな研究としては、彼は生物学と動物誌 (Fauna) を非常に重視していた。それ以外にも、人間の道徳や習慣についての研究も重要と考えられていたため、それらの分野についても研究し、民族学的な関心も高く、道徳、習慣、経済、歴史にも関心を寄せていたのである (Gulik 1989, 378; Vos 2001, 39; Effert 2008, 129-130)。

しかしながら、スパイ行為を恐れていた鎖国中の江戸幕府は、オランダ人が歴史的、政治的、地理的情報に関する研究を禁止にしたため、P.F.v. シーボルトは弟子の医学生に必須の医学知識と植物知識と引き換えに、シーボルトが興味を持っていた研究テーマに関する論文を書かせ、研究報告書と引き換えに卒業証書を与えたのである (Kouwenhoven & Forrer 2000, 26)。

#### P.F.v. シーボルトが蒐集した勾玉について

勾玉についての研究の論文としては、P.F.v. シーボルトが伊藤圭介 (1803-1901) に依頼し、1828年、木内石亭 (1724-1808) の「曲玉問答」(1783年)に基づいて、オランダ語で「勾玉即ち曲がった宝玉の記述 (Beschrijving van de Magatama of buigende juweel)」を書いた (斎藤 1977 他)。シーボルトが認めた勾玉は、5つある。これは『日本』の別のセクションで説明しているもので、墓からの出土品や壺から出てくる例などを説明するのだが、これもまた、他の好古家の説に基づいている。勾玉は、エリートや貴族、神主など社会的ステータスの高い人々が持つアイテムだと考えられていたと推定されていたが、彼の仮説では、当時もアイヌ民族と琉球民族は勾玉を有していた為、アイヌ民族のものと評価したのである。

P.F.v. シーボルトが収集した考古遺物の大半は石器であり、『日本』の民族と国に関する2巻の中で触れられている。興味深いのは、石器の解説が武器に関する節であった点である。武器の subject としては、古代の武器についての説明であった。勾玉は、第3巻において考古遺物として認識されていたことがわかる。また、『日本』の中で、最もよく認められるシーボルトの考えは、古代遺物の当時における社会的評価は、神の時代にあるというものであるからこそ、日本では神社や寺に考古遺物が多く保管されたものと考えている。

彼の考古資料に関する説明は、どういうものか、どこで出土したかということであったが、特に東北地方で出土した石器資料が多い。彼は縄文時代晩期の亀ヶ岡文化に近いものではないか、アイヌ民族のものだったのではないかという推測を巡らしている。日本の石鏃について世界の石鏃に類似性を見出し、共通した傾向があるという点を指摘した。また、アシスタントの知識を信頼し、日本における石鏃の研究を整理したのである。例えば、習慣や神話に関すること、あるいは、素材の違い (例えば黒曜石・フリント等)、形式・大きさ・形などを調べ、幅広く世界の石鏃と比較したのである。詳細な知識については、日本の研究者の成果に基づいて記している。例えば、鉱物学の素晴らしい本があると記述しているが、書名や研究者名を報告していない点は残念である。桂川先生のお陰で多くの石鏃が手に入った、ということは報告している。

もう一つのカテゴリーは、雷斧である。P.F.v. シーボルトが使ったドイツ語の“Donnerkeile”は、「雷斧」の直接翻訳だが Pfalz dorf の19世紀のドイツでも、雷斧について、「雷に対しての守り」などの伝説があったと報告している。また、シーボルトは日本の研究者の知識に基づいて、多方面から説明し、武器の機能だけではなく、道具の可能性や儀礼の意味もあるという点を指摘している。

彼は、日本ではどのような神話や習慣があるのか、石器の形、材料、出土地について様々な点から説明し、日本どの地域も社会的価値観が非常に似ているという点に興味を示している。日本人研究者にしたがって、シーボルトが石さじのような石器道具は、「天狗の飯食い」と呼んでいる。シーボルトの結論はおおよそ日本の学者の説に基づいている。それはシーボルトだけではないが、もとはアイヌ

の儀式だったのではないかという考えである。非常に興味深いのは、彼は江戸時代後期の社会構造をよく認識しており、今でも神社やお寺では、さまざまな古代の遺物を持っている自体、日本人が古代の遺物の価値を理解しているのだと彼は報告したのである。

#### 引用文献

- Siebold, Philip Franz von, 1897 (2nd edition). Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezu mit den Südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. Herausgegeben von seinen Söhnen. Würzburg & Leipzig: Verlag der K.U.K. Hofbuchhandlung von Leo Woerl.
  - Vol. I, Abteilung II: Volk und Staat, 3) Von den Waffen, Waffenübungen und der Kriegskunst: "Blick auf die Steinwaffen der Urbewohner der japanischen Inseln" (p. 350-60)
  - Vol. II, Abteilung III: Mythologie, Geschichte und Archäologie, 8) "Magatama, die Schätze der frühesten Bewohner der japanischen Inseln" (p. 63-70)
- 伊藤圭介 1828 Beschrijving van de Magatama of Buigende Juweel (original at Bochum University)
- 斎藤忠 Saito T 1977 「勾玉に関する記述」

#### Siebold's collection & methodology:

- Effert, Rudolf, 2008, Royal Cabinets and Auxiliary Branches: Origins of the National Museum of Ethnology 1816-1883. Research School CNWS Publications, Leiden
- Gulik, Willem van, 1989, 'Siebold and his Japanese Collection in Leiden' Leiden Oriental Connections 1850-1940 (editor W. Otterspeer), p. 378-391, Brill, Leiden
- Kouwenhoven, Arlette & Matthi Forrer, 2000, Siebold and Japan- His Life and Work, Hotei publishing, Leiden (『シーボルトと日本、その生涯と仕事』、アルレッテ・カウブエンホーフエン & マティ・フオラー、Hotei 出版、日本語訳フオラー・くに子)
- Vos, Ken, 2001, 'The composition of the Siebold Collection in the National Ethnology Museum in Leiden.' Senri Ethnological Studies 54, 39-48.

#### Antiquarianism in Europe in early 19th Century:

- Trigger, Bruce, 1989. A History of Archaeological Thought. Cambridge University Press.
- Franks, A.W. 1869, Notes on the Discovery of Stone Implements in Japan. International Congress of Prehistoric Archaeology: Transactions of the Third Session, 258-67.

#### Acknowledgements:

I owe a great many thanks to professor Matthi Forrer, Dr. Daan Kok, Dr. Rudolf Effert, Dr. Tokuda Masashi and Dr. Takashi Uchikawa for their advice and insights, and to Dr. Kikuko Hirafuji for her patient encouragement and editing of an earlier version of this draft. Also many thanks to Dr. Simon Kaner & Luke Edgington-Brown for kindly forwarding me a copy of Frank's review on Japanese prehistoric stone tools, and professor Miyazaki Katsunori (Seinen Gakuin, Fukuoka) for the copy of Ito Keisuke's treatise on magatama, that he took at Bochum University, Germany. And finally to the Archive of Schloss Brandenstein for permission to share the information on Siebold's notebook.

(パウシュ・イローナ)

## VI 国立ライデン民族博物館収蔵 P. F. v. シーボルト蒐集の石器・玉類

### 1 はじめに

平成 29 (2017) 年 1 月 28 日から 2 月 2 日にかけて國學院大學特別推進研究助成金 (国特推助第 89 号) にもとづいてライデン国立民族学博物館、シーボルトハウスで、H. v. シーボルトに多大なる影響を与えた父 P. F. v. シーボルトの蒐集品の内、『NIPPON』に掲載されている考古資料の調査を実施した。調査者は、内川隆志 (國學院大學研究開発推進機構教授)、深澤太郎 (國學院大學研究開発推進機構准教授)、イローナ・バウシュ (東京大学客員教授)、徳田誠志 (宮内庁書陵部陵墓調査官) であり、現地での研究支援は元ライデン民族学博物館のマティーフォラー博士並びに国立ライデン民族博物館の現役研究員であるダン・コック博士に全面的な協力を仰いだ。具体的な作業としては、P. F. v. シーボルトの大著『NIPPON』に掲載されている石器類や勾玉をはじめとした古墳時代の遺物と元禄の山陵取調に伴って作成された『古山陵之図』の写本について熟覧・撮影・実測図の製作等を実施した。石器の実測図は内川隆志を中心に、デジタルトレースは、伊藤大祐 (國學院大學研究開発推進機構 PD 研究員) を中心に高橋桃子 (國學院大學卒業生) が実施した。新石器時代の石器群については、大工原豊氏 (國學院大學共同研究員) に調査を依頼した。

(内川隆志)

### 2 P. F. v. シーボルトコレクションの石器について

#### 1. 石鏃

凹基無茎鏃 (1～16) 縄文時代に通時代的に存在する形態であり、時期を特定することはできない。1～5 は信州産と推定される黒曜石製であり、関東・甲信地域のものである可能性が高い。また、それ以外の石材は鉄石英 (6)、玉髓 (7・13～15)、珪質頁岩 (8・9・11・16) のものは新潟地域あるいは東北地方南部の可能性が高い。

平基無茎鏃 (17) 縄文時代に通時代的に存在する形態であり、時期を特定することはできない。この中で、唯一明確なチャート製であり、関東地方周辺の可能性が高い。

平基有茎鏃 (18～22) 後・晩期に存在する形態である。珪質頁岩製 (18・20) と玉髓製 (19・21・22) である。新潟地域あるいは東北地方南部の可能性が高い。

凸基有茎鏃 (23～27) 後・晩期に存在する形態である。珪質頁岩 (23・25・26)、玉髓 (27) などが存在する。23 は茎部にはアスファルトが付着している。新潟地域あるいは東北地方南部の可能性が高い。

凹基有茎鏃 (28) 晩期に多い形態である。鉄石英製である。

下布田型 (29～32) 側縁部に突起や屈曲のあるもので、従来「飛行機鏃」と呼ばれていたものである。最近、下布田型石鏃として型式設定されたもので、晩期中葉 (安行 3d 式=佐野 2 式期) の時期のものである (大工原 2017)。この形態の石材は黒曜石 (29)、玉髓 (30)、ガラス質安山岩もしくは下呂石 (31)、頁岩 (32) と多様である。下布田型の中心地は南西関東で大部分がチャート製であるが、この資料にはチャート製のものが含まれていないので、隣接地域 (おそらく甲信地域) のものと推定される。

尖基鏃 (36～38) 後・晩期に多い形態である。珪質頁岩製 (36・38) と玉髓製 (37) である。石錐の可能性もあるが、ここでは石鏃に分類した。新潟地域あるいは東北地方南部の可能性が高い。

アメリカ式 (35) この形態は弥生時代中期後半のもので、東北南部 (福島)～東関東 (茨城)・新潟 (下越) 地域のもものと推定される。

特殊形態 (33・34) 側縁部を大きく抉る特徴的な形態の凹基無茎鏃である。いずれもガラス質安山岩製である。形態的な類例は西北九州地方の石鋸と組み合わせて尖端部に装着される鋸歯尖頭器 (川

道 2013)がある。石鋸・鋸歯尖頭器は腰岳産黒曜石が多用されているが、安山岩も使用されている。この資料もこれに該当する可能性がある。

## 2. 石錐

摘み付(40・41)と摘み無(42)が存在する。時期を特定することは難しい。珪質頁岩製(40・42)と頁岩製(41)である。頁岩製のものは関東地方の可能性が高い。

## 3. 石匙

43～46は珪質頁岩製であり、東北地方及び周辺地域のものと推定される。東北地方では石匙は前期～晩期まで継続的に存在しているが、特徴的な形態については時期を特定することができる。43は縦形態の片面加工で、下端部が斜刃となっているもので、松原型石匙(秦 1991、加藤 2017)、あるいはその類似形態であり、前期前葉のものである。また、44は縦形で両面に精緻な押圧剥離を施したものである。前期後葉に米沢盆地で製作された押出型石匙(大工原 2003)である。東北地方南部から関東地方にかけて流通しているので、そのどこかの遺跡から出土したものである。47は横形態の両面加工のものである。おそらく前期中葉～後葉のものとして推定される。

## 4. 石槍

47は粗雑な石槍である。ガラス質安山岩製である。晩期前葉には関東・甲信地域では粗雑な石槍あるいは石槍模造品が大量に製作されるので、これに該当する可能性がある。

## 5. スクレイパー

48は押圧剥離により加工を施した両面加工の小形スクレイパーである。鉄石英製である。

## 6. 剥片

49は珪質頁岩製の幅広不定形剥片である。

## 7. 磨製石斧

50～54は断面楕円形のいわゆる乳棒状(遠州型)の磨製石斧である。50は縞状の模様が観察されるので堆積岩製(砂岩?)と推定される。51は全面に敲打痕が観察されるが、刃部は作出されていない未成品である。火成岩製と推定される。52も全面に敲打痕が観察される未成品である。53は全面がきれいに研磨された完形のものである。54・55は定角式の磨製石斧であり、後晩期の可能性が高い。55は蛇紋岩(最近では透閃石岩と鑑定される)であり、北陸地方で製作され、広く流通していたものである。57は弥生時代の柱状片刃磨製石斧と推定される。

## 8. 外国と推定される石器

日本国内では見慣れないあるいは稀有な形態の石器を一括した。57～59は石鏃である。平基有茎鏃に分類されるが、日本のものに比べて茎部が幅広である。形態が共通していることから同じ地域のものともみられる。フリント・鉄石英などが用いられている。

60はフリントあるいは玉髓製の両面加工のスクレイパーである。下端部に斜めに刃部が作出されている。日本のものの可能性もある。61はフリントあるいは珪質頁岩製の両面加工のスクレイパーである。62はフリントあるいは珪質頁岩製の石槍である。デンマークの新石器時代に類例があるので、ヨーロッパの可能性もある。63はフリント製の刃部磨製石斧である。断面蒲鉾形を呈する片刃石斧である。64は大形の扁平な磨製石斧である。

## 3 所見

この資料のうち、時期と場所がある程度分かるものとしては、石鏃・石匙・磨製石斧がある。石鏃では黒曜石製の凹基無茎鏃(1～5)は、透明で縞入りの黒曜石が認められるので信州産(和田峠産・諏訪産)のものとして推定される。これらの黒曜石は半径200km圏内に流通しているので、その範囲内で

出土したものであろう。また、有茎鏃 15 点、尖基鏃 3 点が存在しているが、これらは後・晩期のものと判断される。このうちアスファルトが付着しているもの (23) は東北地方～新潟地域のもものと推定される。また、下布田型石鏃 (29～32) 晩期中葉に時期を限定することができる。また、石鏃には珪質頁岩と玉髓製のものが多いが、この組み合わせで石鏃が製作される地域は新潟周辺地域であり、その地域で出土したものである可能性が高い。アメリカ式石鏃 (35) は弥生時代中期後半のものであり、東北南部～東関東 (茨城)・新潟地域のもものと推定される。

また、石匙には松原型 (43) と押出型 (44) が存在している。前者は前期前葉～中葉に東北地方に広く分布するものである。後者は前期後葉に山形県米沢盆地で製作されたもので、東北南部から関東地方に広く流通しているものである。やはり新潟地域あるいは東北南部地域で出土したものと推定される。

磨製石斧のうち蛇紋岩製の定角式 (55) は富山周辺地域で製作されていたものであり、関東・中部一円に流通している。前期から製作されているが、形態的にみて後・晩期のものである可能性が高い。

#### 引用文献

加藤 学 2017「縄文時代前期「松原型石匙」の再検討」『研究紀要』第 9 号 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 pp. 1-24

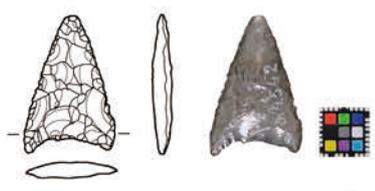
川道 寛 2013「石鋸と鋸歯尖頭器の二者」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 3 号  
長崎県埋蔵文化財センター pp. 1-10

大工原 豊 2003「模倣と模造」『縄文時代』14 縄文時代文化研究会 pp. 1-29

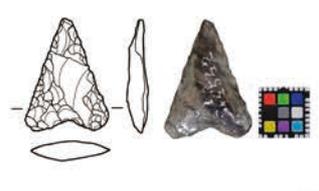
大工原 豊 2017「下布田型石鏃の研究」『石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備 基盤研究 (C) 25370894』明治大学黒耀石研究センター pp. 94-110

秦 昭繁 1991「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙」『考古学雑誌』76-4 pp. 1-29

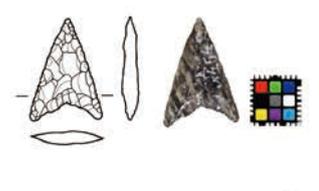
(大工原豊)



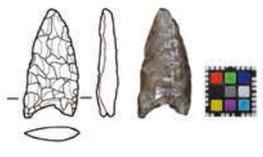
1



2



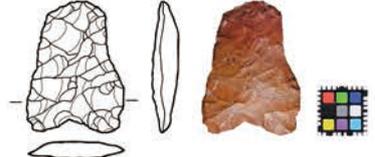
3



4



5



6



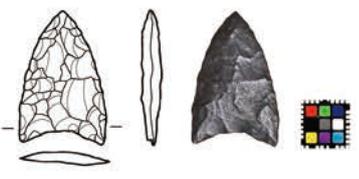
7



8



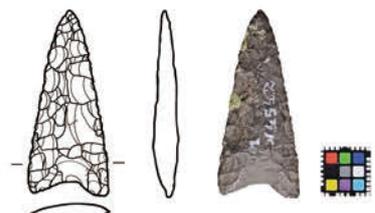
9



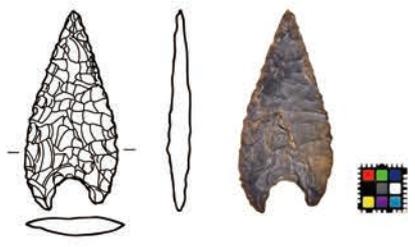
10



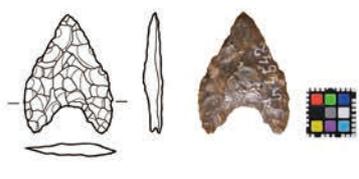
11



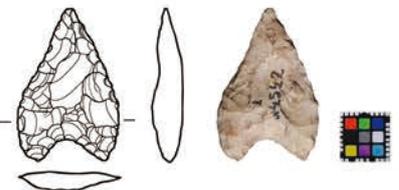
12



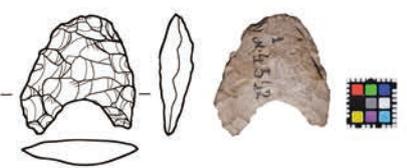
13



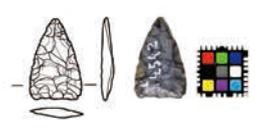
14



15

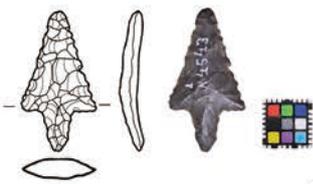


16

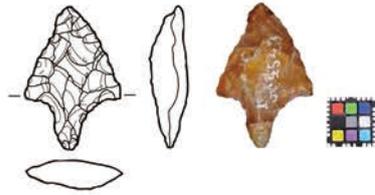


17

石鏃 (1) S=2/3 (※チャートは1cm四方を示す)



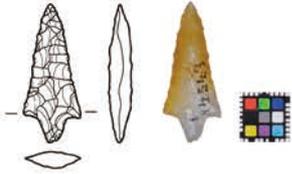
18



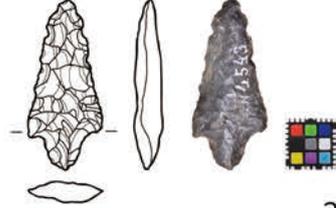
19



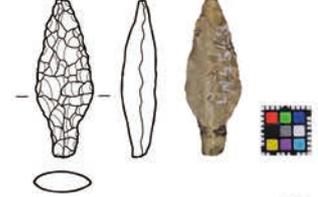
20



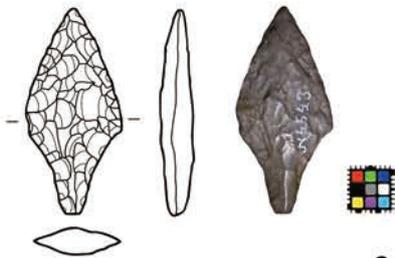
21



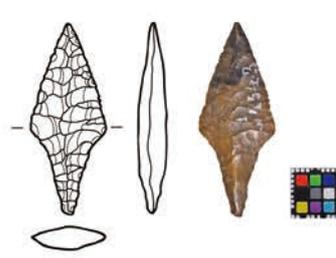
22



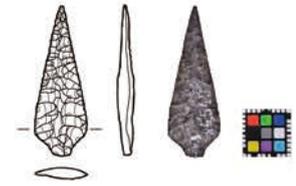
23



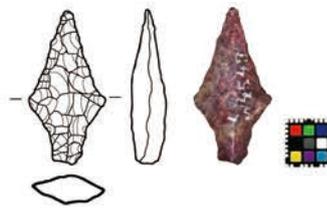
24



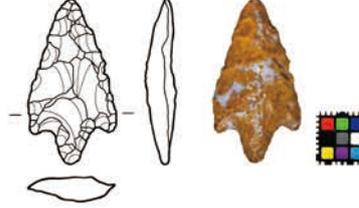
25



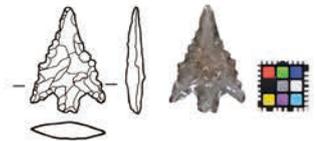
26



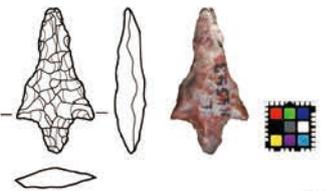
27



28



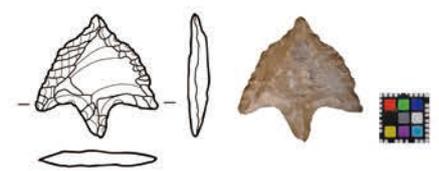
29



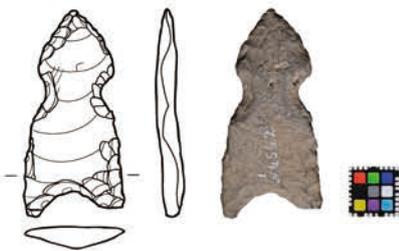
30



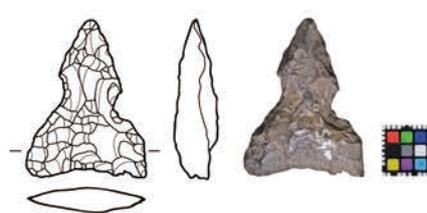
31



32



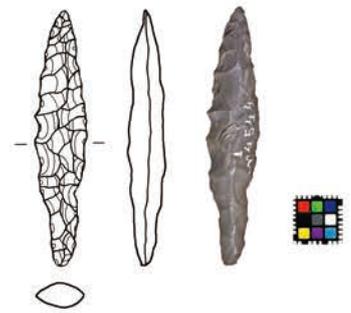
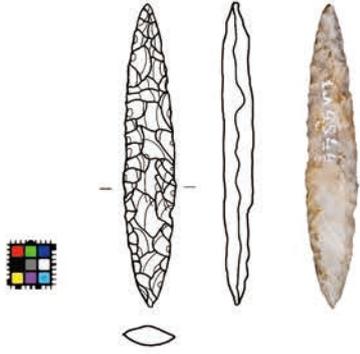
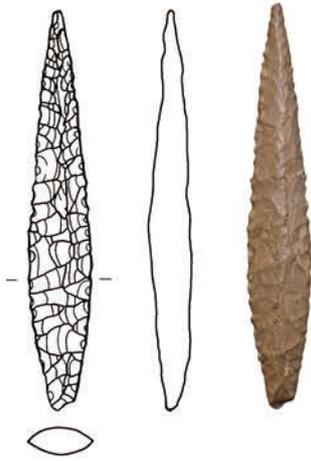
33



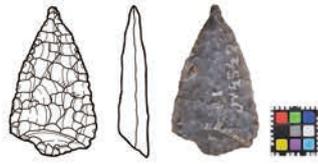
34



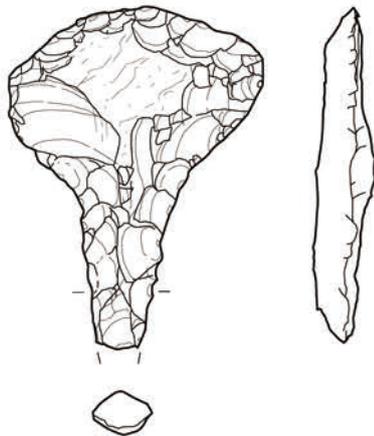
35



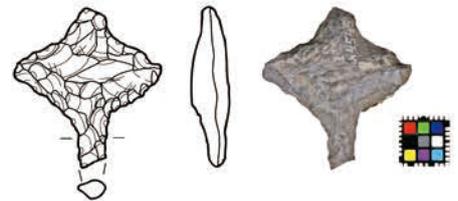
36



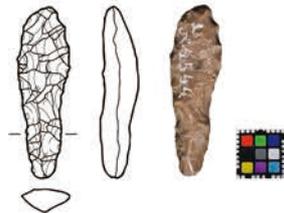
39



40

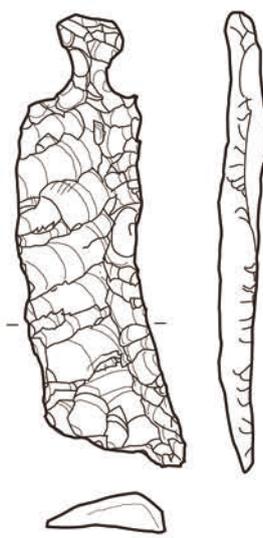


41

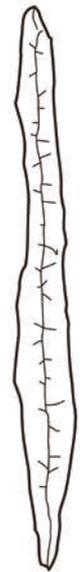
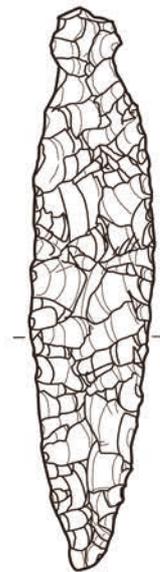


42

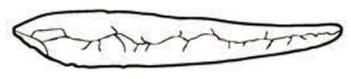
石鏃・石錐 S=2/3



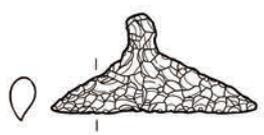
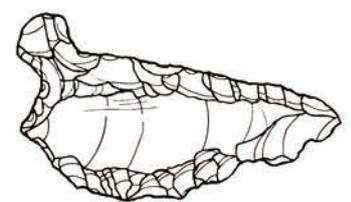
43



44

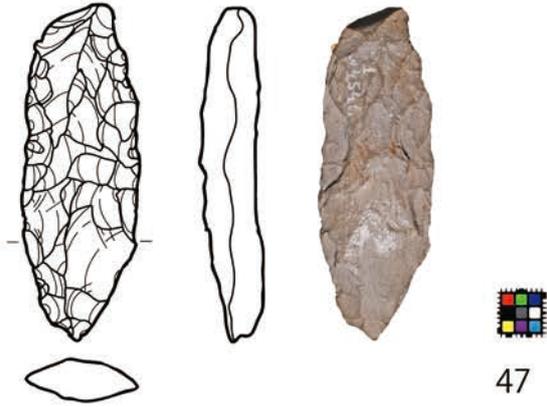


45

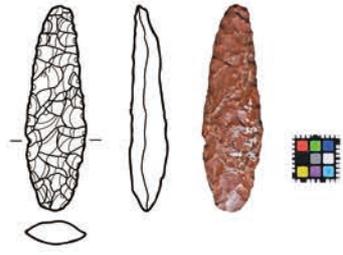


46

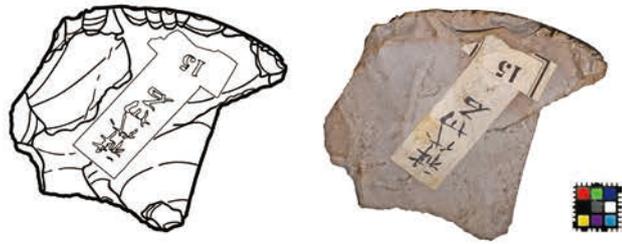
石匙 S=2/3



47

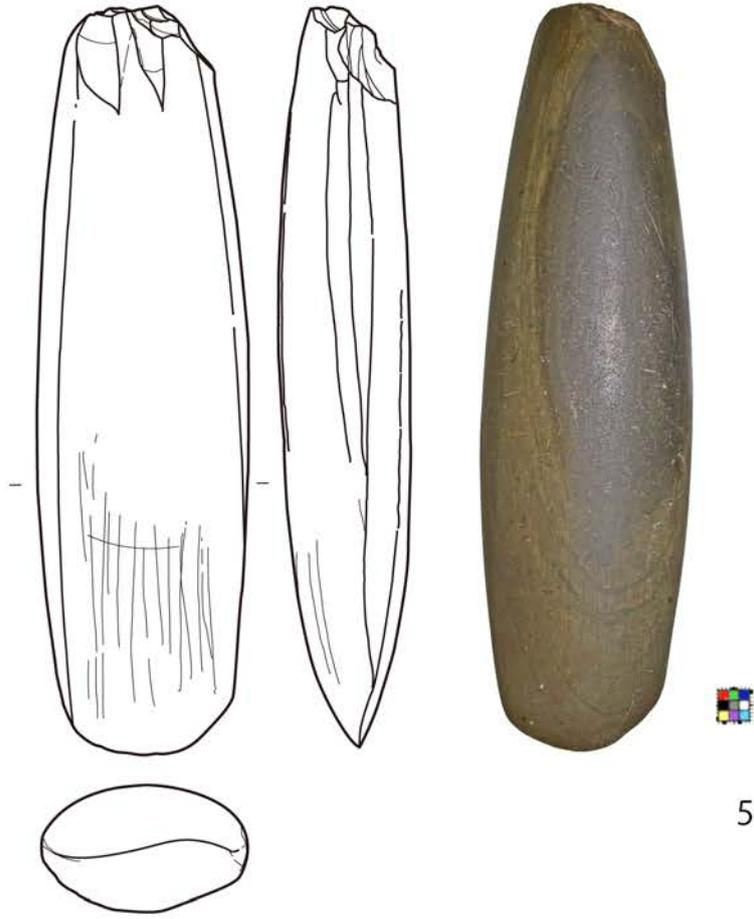


48



49

石槍・両面加工石器・剥片 S=2/3

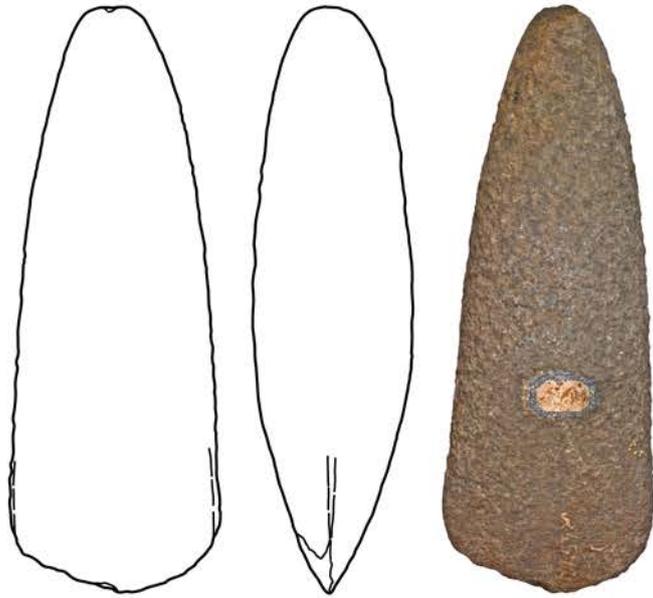


50

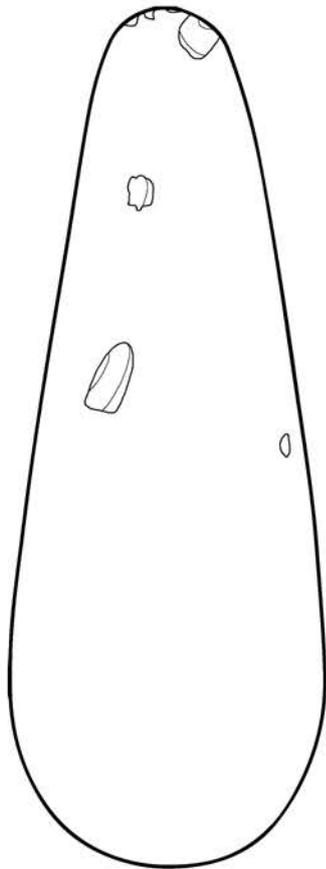
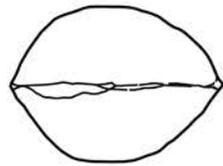


51

磨製石斧 S=1/2

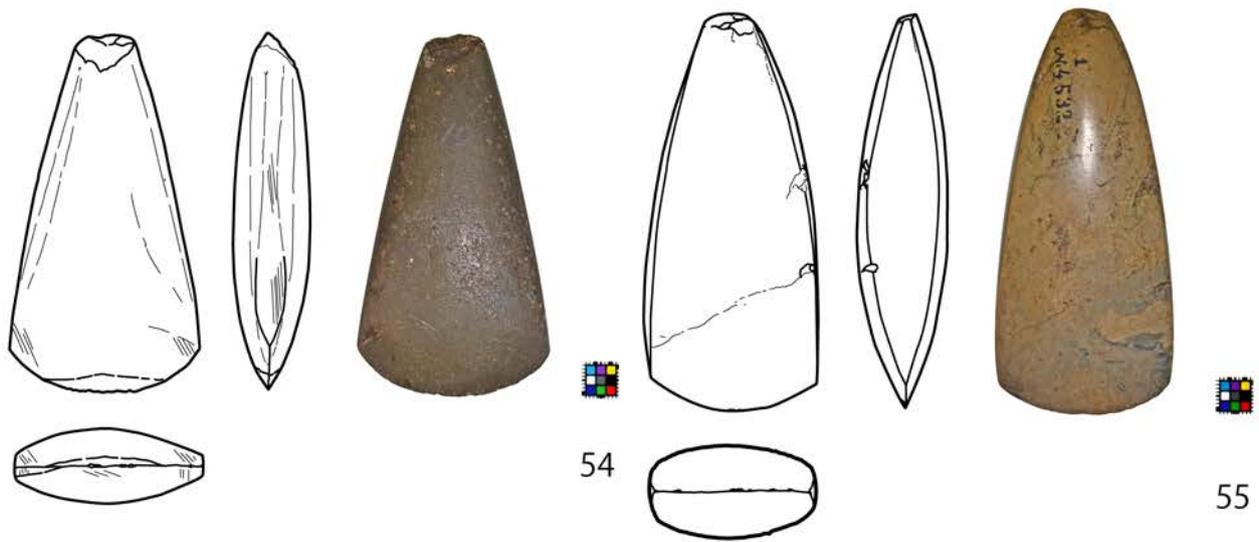


52



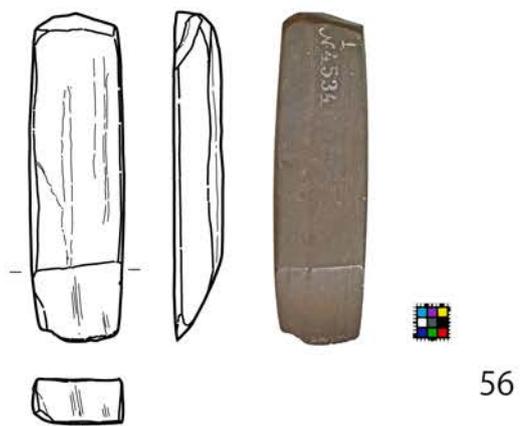
53

磨製石斧 (1) S=1/2



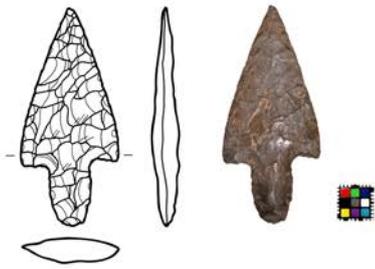
54

55

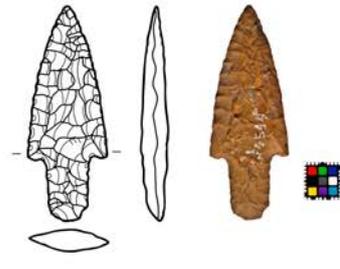


56

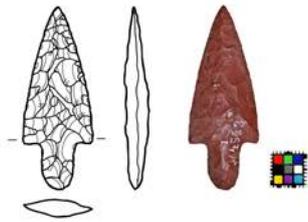
磨製石斧 (2) S=1/2



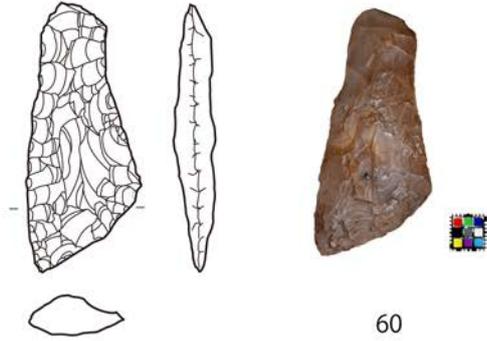
57



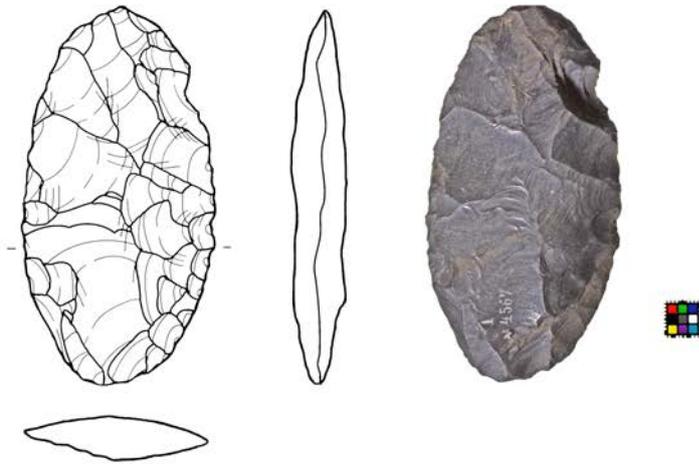
58



59

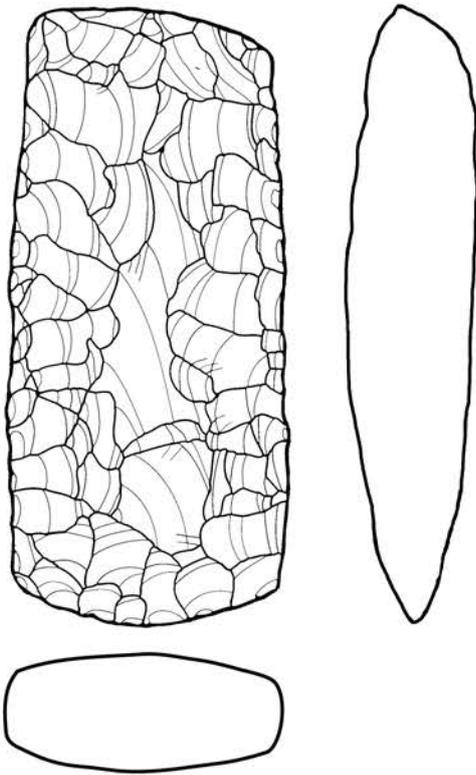


60

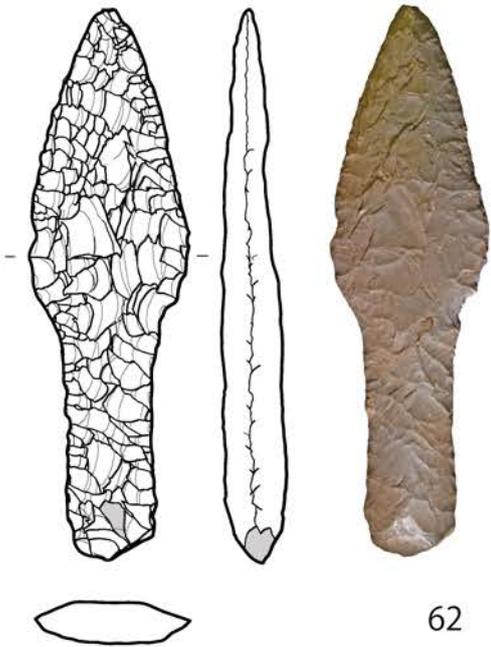


61

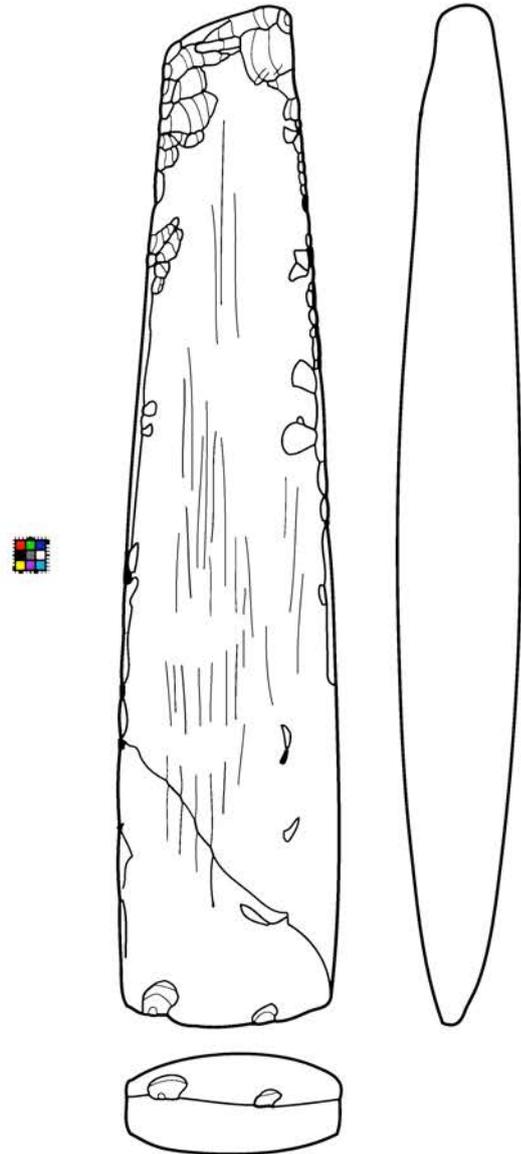
外国の石器（石鏃・スクレーパー）S=1/2



63



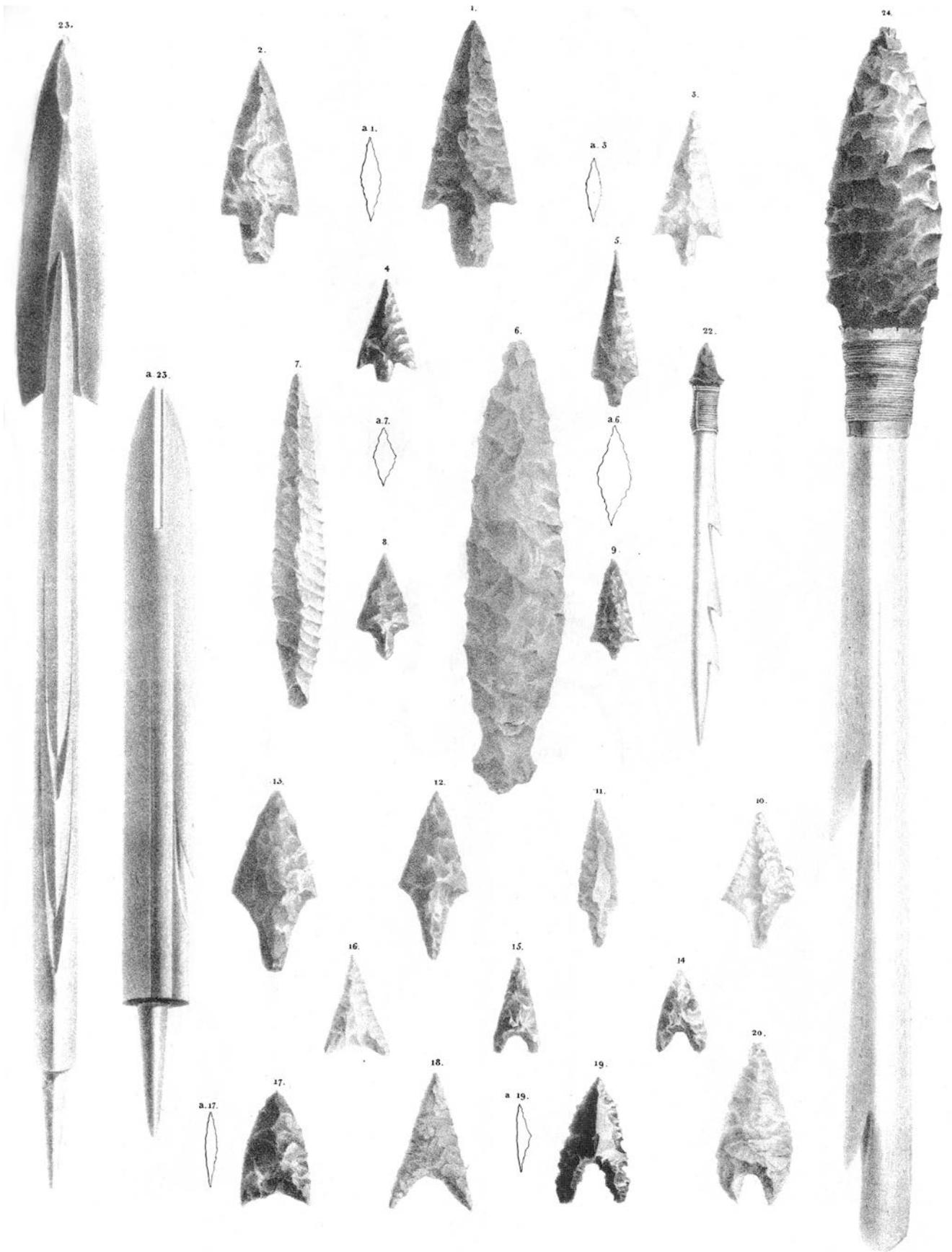
62



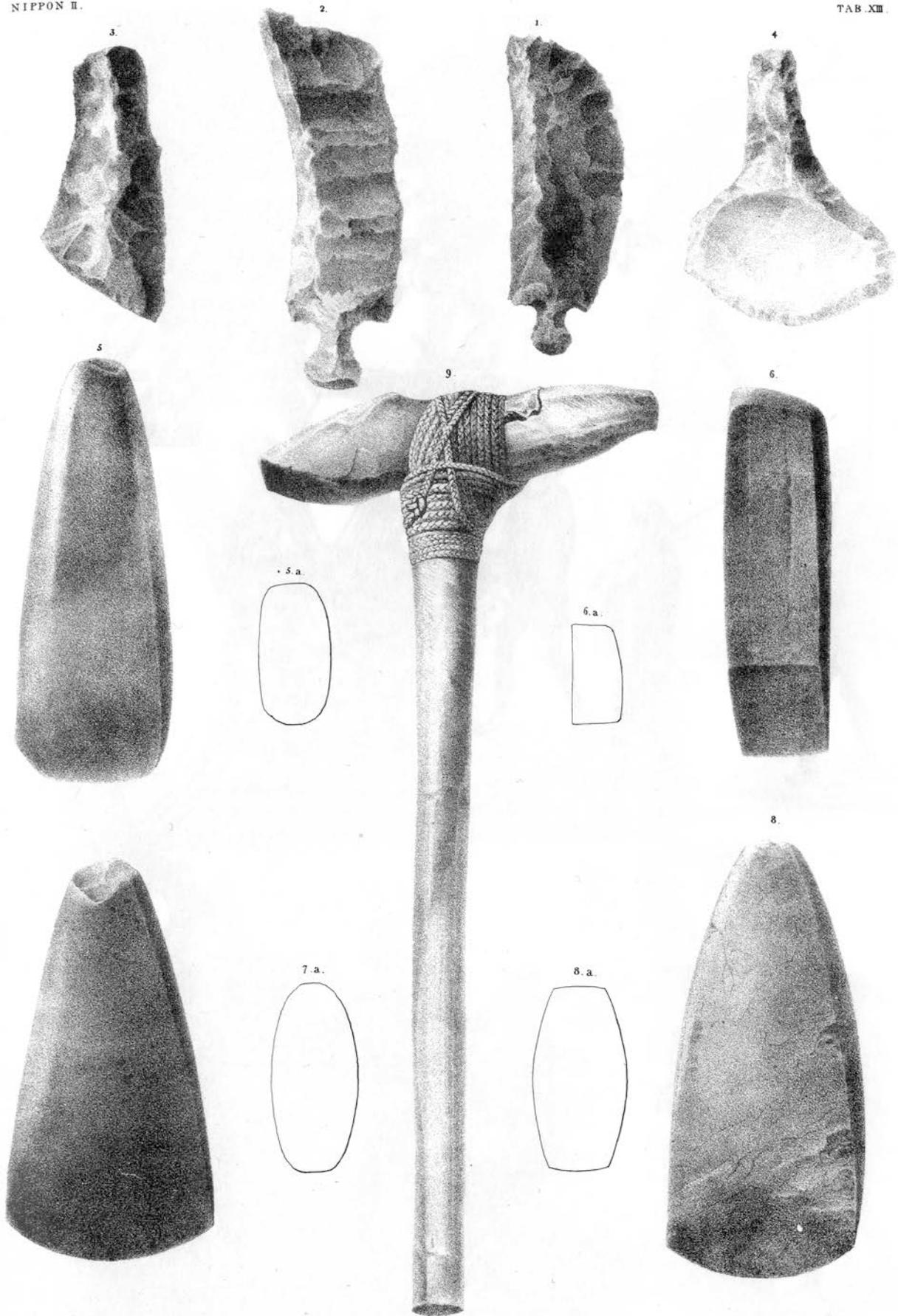
64

石器計測表

図版番号	資料番号	資料名	形態	オランダ語名	材質	量法(WHD,cm)	重量	備考	所蔵
1	4542-06	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	黒曜石	1.8x2.8x0.25	1.8g		ライデン国立民族学博物館
2	4542-07	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	黒曜石	1.6x2.5x0.25	1.1g		ライデン国立民族学博物館
3	4542-03	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	黒曜石	1.3x2.0x0.2	0.6g		ライデン国立民族学博物館
4	4542-04	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	黒曜石	0.95x2.1x0.3	0.8g		ライデン国立民族学博物館
5	4542-02	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	黒曜石	1.3x2.1x0.2	1.1g		ライデン国立民族学博物館
6	4542-18	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	鉄石英	2.0x2.6x0.5	3.1g	先端欠損	ライデン国立民族学博物館
7	4542-10	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	玉髄	1.1x2.0x0.3	0.6g		ライデン国立民族学博物館
8	4542-21	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.5x2.7x0.2	1.3g		ライデン国立民族学博物館 シーボルトハウスで展示中
9	4542-11	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.7x2.6x0.3	1.2g		ライデン国立民族学博物館
10	4542-22	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	?	1.55x2.45x0.15	1.9g	ローリングを受けている	ライデン国立民族学博物館 シーボルトハウスで展示中
11	4542-12	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.4x2.7x0.3	1.1g		ライデン国立民族学博物館
12	4542-15	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	ガラス質安山岩	1.6x3.6x0.3	2.7g		ライデン国立民族学博物館
13	4542-01	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	玉髄	1.8x4.0x0.25	2.4g		ライデン国立民族学博物館
14	4542-05	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	玉髄	1.6x2.4x0.3	1.2g		ライデン国立民族学博物館
15	4542-14	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	玉髄	1.9x3.0x0.6	3.2g		ライデン国立民族学博物館
16	4542-13	石鏃	凹基無莖	Pijlpunt	珪質頁岩	2.2x2.4x0.6	3.0g	先端欠損	ライデン国立民族学博物館
17	4542-09	石鏃	平基無莖	Pijlpunt	チャート	1.0x1.5x0.2	0.4g		ライデン国立民族学博物館
18	4543-09	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.5x2.8x0.3	1.8g		ライデン国立民族学博物館
19	4543-11	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	玉髄	1.8x2.8x0.7	2.9g		ライデン国立民族学博物館
20	4543-14	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.7x3.1x0.4	2.1g		ライデン国立民族学博物館
21	4543-12	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	玉髄	1.2x2.7x0.4	1.8g		ライデン国立民族学博物館
22	4543-10	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.4x3.3x0.5	2.1g		ライデン国立民族学博物館
23	4543-05	石鏃	平基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.1x3.2x0.6	1.9g	茎部にアスファルト付着	ライデン国立民族学博物館
24	4543-07	石鏃	凸基有莖	Pijlpunt	不明	1.9x4.2x0.6	4.6g	ローリングを受けている	ライデン国立民族学博物館
25	4543-01	石鏃	凸基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.4x3.9x0.5	2.4g		ライデン国立民族学博物館
26	4543-13	石鏃	凸基有莖	Pijlpunt	珪質頁岩	1.0x3.0x0.2	1.8g	茎部欠損	ライデン国立民族学博物館
27	4543-02	石鏃	凸基有莖	Pijlpunt	玉髄	1.1x3.1x0.6	2.3g	茎部欠損	ライデン国立民族学博物館
28	4543-06	石鏃	凹基有莖	Pijlpunt	鉄石英	1.5x3.0x0.5	1.9g		ライデン国立民族学博物館
29	4542-20	石鏃	下布田型	Pijlpunt	黒曜石	1.5x2.1x0.25	0.6g		ライデン国立民族学博物館
30	4543-04	石鏃	下布田型	Pijlpunt	玉髄	1.5x2.9x0.55	1.6g		ライデン国立民族学博物館
31	4543-03	石鏃	下布田型	Pijlpunt	ガラス質安山岩(下呂石?)	1.4x2.7x0.5	1.6g		ライデン国立民族学博物館
32	4543-08	石鏃	下布田型	Pijlpunt	頁岩	2.4x2.4x0.3	1.7g		ライデン国立民族学博物館
33	4542-16	石鏃	鋸歯尖頭器?	Pijlpunt	ガラス質安山岩	1.9x4.1x0.3	3.6g		ライデン国立民族学博物館
34	4542-17	石鏃	鋸歯尖頭器?	Pijlpunt	ガラス質安山岩	2.2x3.1x0.7	3.8g		ライデン国立民族学博物館
35	4542-19	石鏃	アメリカ式	Pijlpunt	珪質頁岩	1.2x2.0x0.2	2.5g		ライデン国立民族学博物館
36	4544-07	石鏃	尖基	Pijlpunt	珪質頁岩	1.0x7.8x0.9	6.7g		ライデン国立民族学博物館
37	4544-02	石鏃	尖基	Pijlpunt	玉髄	1.0x6.0x0.5	3.9g		ライデン国立民族学博物館
38	4544-03	石鏃	尖基	Pijlpunt	珪質頁岩	1.0x5.2x0.65	3.4g		ライデン国立民族学博物館
39	4542-08	石鏃	基部欠損後に再調整	Pijlpunt	玉髄	1.7x3.0x0.6	2.2g		ライデン国立民族学博物館
40	4535	石鏃(ドリル)	摘み有(鏃部欠損)	Sniijwerktuig	珪質頁岩	4.6x6.35x1.1	24.2g	鉛筆で「14」の注記有り	ライデン国立民族学博物館
41	4545-02	石鏃(ドリル)先端部	摘み有(鏃部欠損)	Pijlpunt	頁岩	2.8x3.0x0.6	4.1g	シール有り「24」	ライデン国立民族学博物館
42	4544-04	石鏃(ドリル)	摘み無	Pijlpunt	珪質頁岩	0.9x3.3x0.6	2.2g		ライデン国立民族学博物館
43	4539	石鏃	縦形(松原型)	Sniijwerktuig	珪質頁岩	2.3x9.0x0.7	17.6g		ライデン国立民族学博物館
44	4544-06	石鏃	縦形(押出型)	Pijlpunt	珪質頁岩	2.1x10.8x0.9	26.4g		ライデン国立民族学博物館
45	4538	石鏃	横形	Sniijwerktuig	珪質頁岩	2.7x6.5x1.1	18.9g		ライデン国立民族学博物館
46	4545-01	石鏃	横形	Pijlpunt	珪質頁岩	2.4x4.0x0.5	2.4g	シール有り「24」	ライデン国立民族学博物館
47	4546	石槍	石槍模造品?	Lanspunt	ガラス質安山岩	2.4x6.5x1.1	16.2g	金色のシール有り「矢根石」 シール有り「25」	ライデン国立民族学博物館
48	4544-05	スクレイパー		Pijlpunt	鉄石英	1.2x4.2x0.7	4.0g		ライデン国立民族学博物館
49	4536	剥片		Sniijwerktuig	珪質頁岩	5.8x—x0.9	17.3g	シール有り「15」「神代切石」	ライデン国立民族学博物館
50	4530	石斧	乳棒状	Vuistbijl		5.2x18.4x3.1	51.3g		ライデン国立民族学博物館
51	4533	石斧?(刃部なし)	断面楕円形	Vuistbijl		5.2x13.7x2.3	291.5g		ライデン国立民族学博物館
52	4571(4572)	石斧	乳棒状	Bijl		5.4x15.2x4.0	47.0g	資料には「4572」の注記有り ラベルあるも注記判読困難	ライデン国立民族学博物館
53	4583	石斧	乳棒状	Bijl		7.8x21.8x4.2	1181g		ライデン国立民族学博物館
54	4531	石斧	定角式	Vuistbijl		4.7x9.3x1.9	135.6g		ライデン国立民族学博物館
55	4532	石斧	定角式	Vuistbijl		4.3x10.5x2.1	176.3g		ライデン国立民族学博物館
56	4534	扁平片刃石器		Beitel	蛇紋岩 泥岩変性?	2.1x8.45x1.0	55.5g		ライデン国立民族学博物館
57	4543-15	石鏃	外国?	Pijlpunt	フリント?	2.4x5.6x0.5	7.3g		ライデン国立民族学博物館 シーボルトハウスで展示中
58	4544-01	石鏃	外国?	Pijlpunt		2.0x5.6x0.6	6.2g	『日本』掲載か? 日本のものではない。	ライデン国立民族学博物館
59	4543-16	石鏃	外国?	Pijlpunt		1.65x4.7x0.4	4.2g		ライデン国立民族学博物館 シーボルトハウスで展示中
60	4540	スクレイパー	外国?	Sniijwerktuig	鉄石英	2.6x6.2x1.1	14.6g	シール有り「19」	ライデン国立民族学博物館
61	4567	両面加工石器	外国?	Sniijwerktuig	フリント	5.0x9.9x1.0	58.9g		ライデン国立民族学博物館
62	4568	石槍	外国?	Speerpunt	フリント	3.9x14.4x1.1	62.3g	シーボルトの購入台帳記載のものか?	ライデン国立民族学博物館
63	4569	磨製石斧未成品か?	外国?	Wig	フリント	6.0x14.9x2.9	51.0g	東南アジアか?	ライデン国立民族学博物館
64	4570	磨製石斧	外国?	Wig		5.6x27.4x2.8	775g	蘭名記載ラベルになし 東南アジアか?	ライデン国立民族学博物館



『NIPPON』「古代の武器」石のやじり



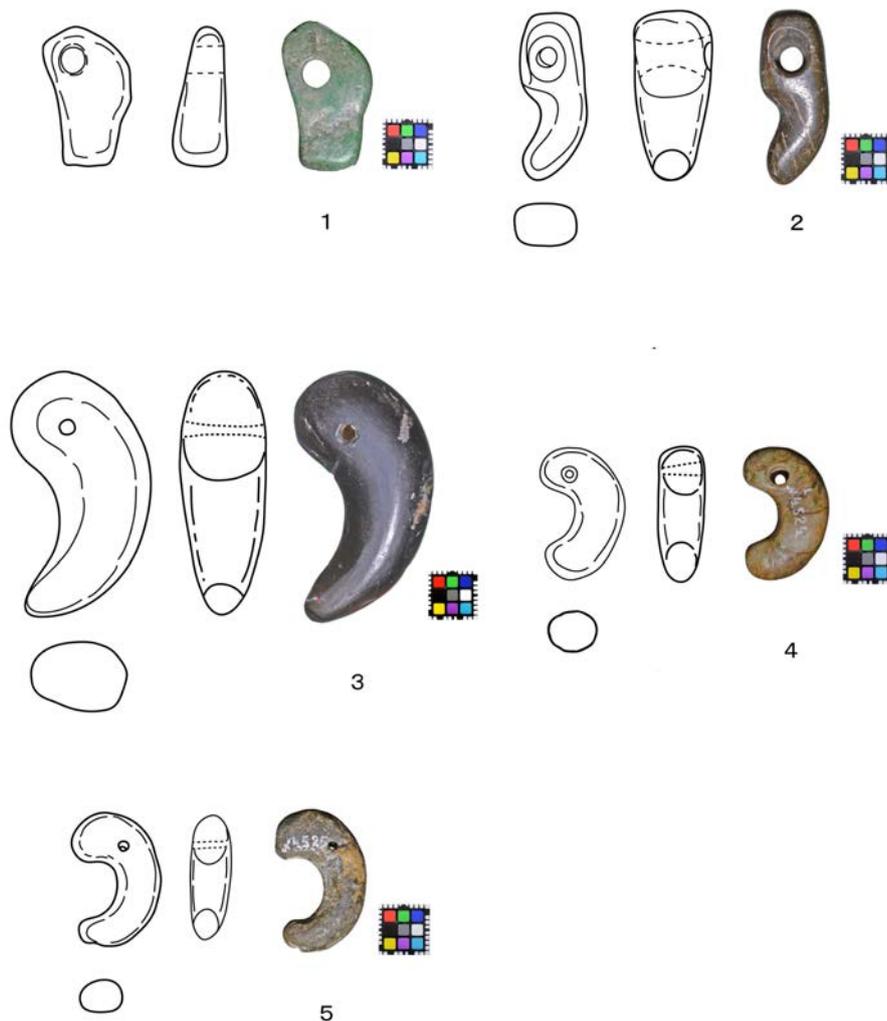
『NIPPON』「古代の武器」石斧

### 3 P.F.v. シーボルトコレクションの玉類について

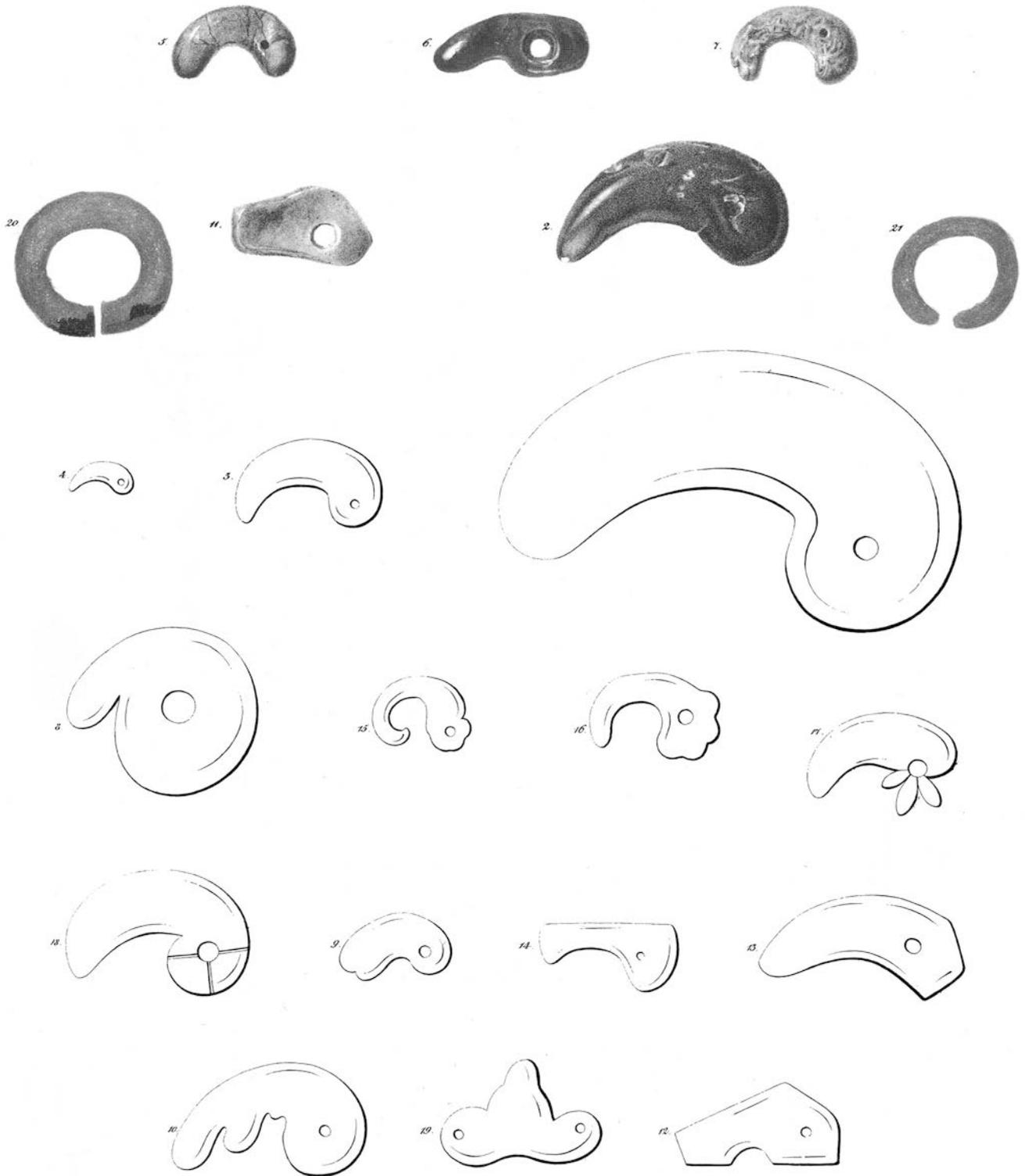
『NIPPON』曲玉・金環には、玉類 18 点、金環 2 点が掲載される。そのうちカラーで図示された 4 点の勾玉と 1 点の金環が遺存している。1 は、縄文時代後晩期に比定される硬玉製垂飾りで、不定形のコバルトブルーの硬玉転石を磨き中央やや上部に孔を穿っている。2 は、茶褐色の軟玉製の縄文勾玉で縄文時代晩期の初産と見做される。隅丸長方形を呈する頭部と抉りの浅い腹部が特徴的である。3 は、黒曜石を素材とした所謂ヒトダマ形を呈するもので、縄文時代以降の勾玉には認められない形状を呈している。素材、形状から勘案して近世の製作物と判断できる。4 は、全体に風化著しいが硬玉製勾玉であり、古墳時代前期頃の製作と考えられる。5 は、腹部の深い抉りが特徴的な滑石製勾玉で、古墳時代中期頃に比定される。

(バウシュ・イローナ)

図版番号	資料番号	資料名	オランダ語名	材質	法量(WHD,cm)	重量	所蔵
1	4524	垂飾	Sieraad	翡翠(硬玉)	?x2.61x0.94	6.8g	ライデン国立民族学博物館
2	4522	勾玉	Sieraad	滑石	1.48x3.31x1.26	8.3g	ライデン国立民族学博物館
3	4521	勾玉	Sieraad	黒曜石	2.04x4.98x1.74	24.4g	ライデン国立民族学博物館
4	4523	勾玉	Sieraad	翡翠	1.63x2.96x?	7.8g	ライデン国立民族学博物館
5	4525	勾玉	Sieraad	滑石	?x2.73x0.73	4.3g	ライデン国立民族学博物館



垂飾 (1) 勾玉 (2~5) S=2/3



『NIPPON』「勾玉、金環」

## VII P.F.v. シーボルトが持ち帰った『子持勾玉』について

### 1 はじめに

P.F.v. シーボルトが、様々な日本の文物をオランダに持ち帰っていることは広く知られている。その多くが現在ライデン民族博物館に納められているが、日常生活品・工芸品等ありとあらゆる分野にわたって収集されており、まさに19世紀前半における日本のタイムカプセルというべき様相を示している。そして彼は単に持ち帰っただけではなく、これらの資料を用いて大著『NIPPON』を刊行し、様々な分野の研究成果をまとめている。

このP.F.v. シーボルトが持ち帰った文物の中に、考古学的な資料が含まれている。この点は『NIPPON』の中にも紹介されており、これまでに日本でも展示されたことがある<sup>(註1)</sup>。今回の調査では、『NIPPON』に掲載されている考古資料の熟覧と写真撮影、さらには初めて実測図を作成することが出来た。本稿では子持勾玉を取り上げて、その詳細と若干の考察を記述していくこととしたい。

なお、現在収蔵されているライデン民族博物館の物品管理番号は「1-4526」であり、品目名は「knop/sable knop」となっている。

### 2 ライデン民族博物館所蔵『子持勾玉』の概要

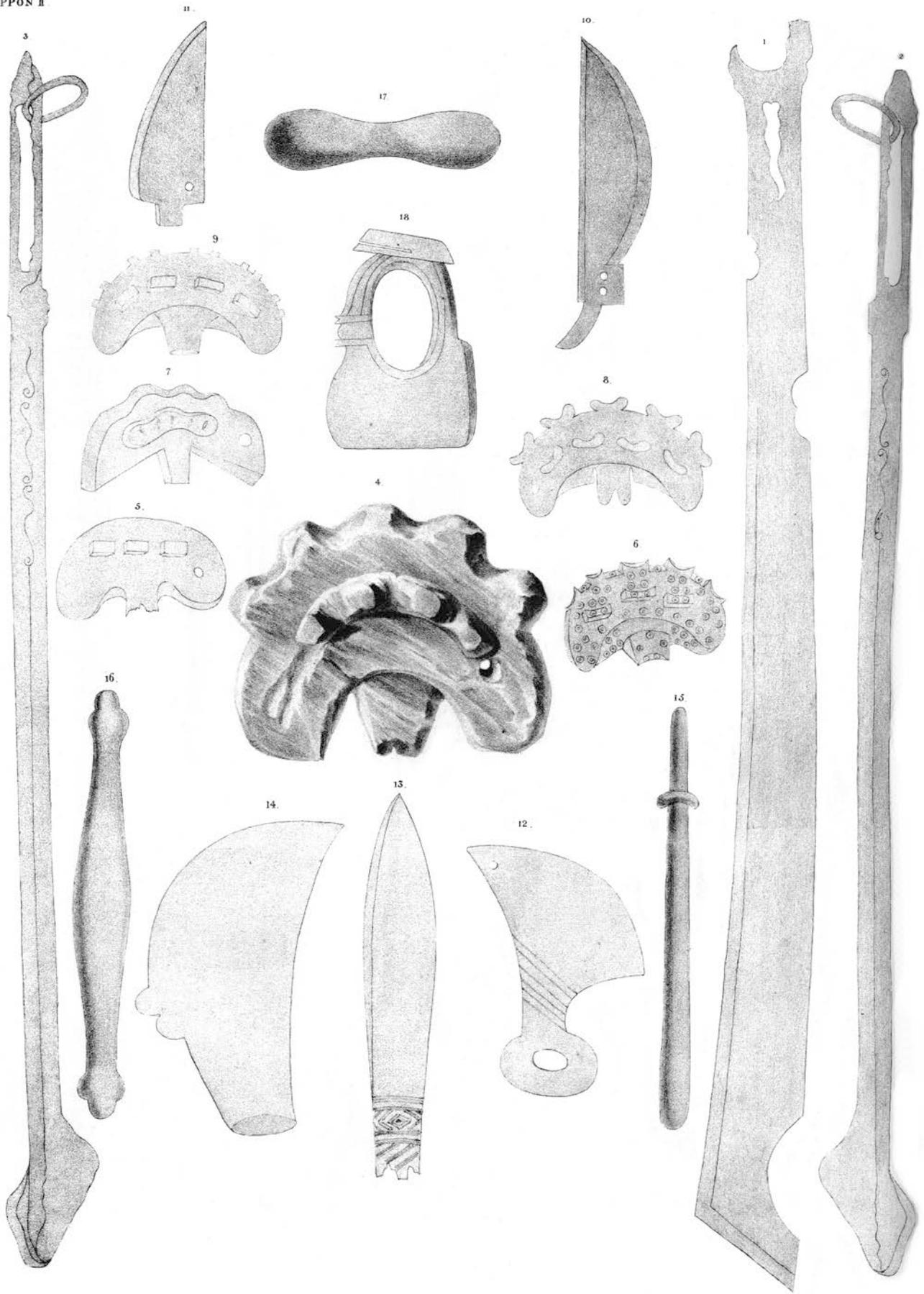
#### (1) 観察結果

子持勾玉は第1図の示したとおりであるが、全長8.25cmを測り、現状では145gを測る。全体の形状としては、まず腹側に1個、背側に5個の子勾玉が削り出されている。しかしながらどちらの子勾玉も、いわゆる勾玉の形状を呈していない。背側の子勾玉は5つの突起状に削り出されており、それぞれの突起は幅1.8cm、高さ0.8cmほどを測る。この子勾玉が連続して削り出されているか、それぞれ独立しているかが1つの型式分類の指標となるが、本個体ではやや削り込みの浅いところもあるものの、独立性を保っているものとしておきたい。また、体部から突出しているかという指標についても、突出することを意識して製作されているものと判断しておく。

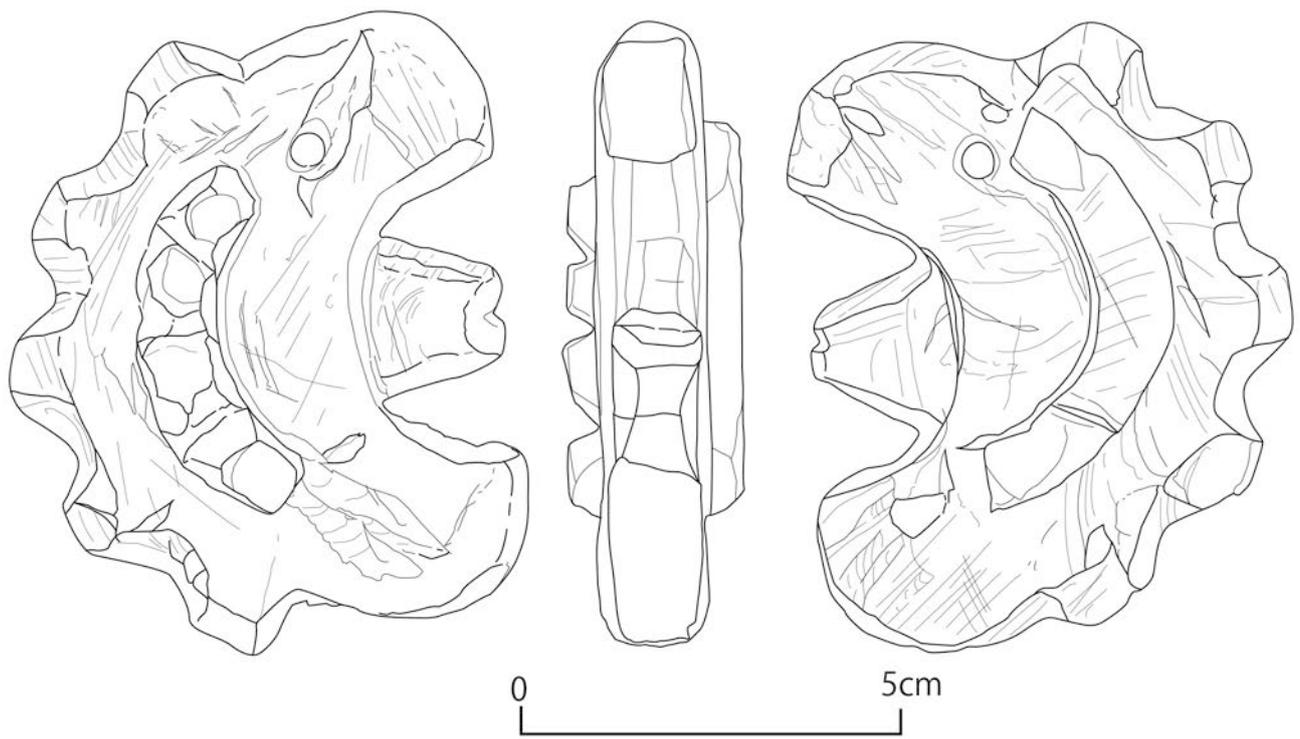
続いて腹側の子勾玉であるが、図に示しているように勾玉の形状ではなく、台形状を呈する。基部幅が2.2cm、高さも同じく2.0cm程度を測り、その先端は、頭部と尾部を結ぶ線上にほぼ重なる。そしてこの台形状の子勾玉の前面には、一条の沈線が刻まれている。

次に、体部側面に削り出されている子勾玉を見ていきたい。左側面（図面上の）の突出部は、体部のほぼ中央に長さ4.5cm、幅1.0cm程度を弧状に削り出し、その上に3条の沈線を刻むことによって、4個の突起を作り出している（写真1）。その一方、右側面に削り出した突出部は、左側の突出部よりやや長く5.5cmを測り、幅は約1.0cmと同様である。こちら側の突出部における最も大きな違いは、突起を削り出していないことである（写真2）。図からも明らかなおおりであるが、途中1箇所沈線らしい刻線をわずかに観察できるが、極めて浅いものであり、突起を作り出すような意図には見えない。本資料のように突起を削り出さない個体も皆無とは言えないが、左右の突出部が明らかに異なる事例は少ないと言えよう。このことをどのように理解するかについては成案を持ち合わせていないが、後述するようにこのことをもって、本個体を贗物とする必要はないと考えている。

さて、改めて全形を見ていくこととするが、頭部には直径0.45cmほどを測る孔が真っ直ぐに穿たれている。穿孔方法は両面から穿ったものか、片面から穿孔したかについては明瞭な痕跡は残していない。次に体部の断面形状については、一般に丸みのあるものが古相を呈し、新しくなるほど長方形を呈するようになるという型式変化が指摘されているが、本個体は、頭部と尾部にやや丸みを持つものの、全体には長方形を呈する傾向にあるといえよう。すなわち、先述した背側の突出部の形状と、この断面形状を勘案して型式学的新古を判断すると、中段階に位置づけておくことが無難であろうと考える<sup>(註2)</sup>



『NIPPON』「古代の武器」石器および青銅器



第1図 子持勾玉実測図 S=1/1



写真1 子持勾玉 (左側面)



写真2 子持勾玉 (右側面)

2)。実年代観は、共伴した遺物や出土地が不明のため、あくまでも型式から導かれる年代観であるが、6世紀の中に収まるものと考えておきたい。

続いて使用されている石材については、滑石と判断して誤りはなかろう。色調は全体に緑がかった灰色を呈している。全体に残りはよいものの、左側面の孔付近と右側面の頭部付近には、比較的古い欠損がわずかに認められる。そのほか左右側面の突出部には、新しいと判断できる擦痕がわずかに観察されるが、P.F.v. シーボルトが入手して以降に大きな傷は認められない。このことは『NIPPON』に掲載されている図と比較しても明らかであり、長崎からオランダへ持ち帰った後も丁寧に扱われ、保管されてきたことがわかる。

## (2) 真贋鑑定

前述した観察結果に基づき、本個体の真贋について記述しておきたい。これまでこの子持勾玉は国内で開催された展示会に出品されており、既知の資料である。しかしながら、その展示会に併せて刊行された図録にも個別の資料についての記述は認められず、また、P.F.v. シーボルト収集の考古資料について紹介された大沢眞澄氏も本資料については言及されていない<sup>(註3)</sup>。すなわちこれまで本資料についての真贋を検討したことはなく、今回の調査で詳細を確認することができたことから、あえて真贋について触れておきたい。

結論を先に記述すると、本資料は古墳時代に製作された「真物」と判断している。その理由を順に記述していきたい。まずは贋作の可能性についてであるが、先述したように左右側面に削り出された突出部の形状が異なることは、類例の少ないことではあるが、このことをもってのみ贋作と判断することはできないであろう。そのほか、本資料の製作方法、子勾玉の削り出し状況、頭部に穿たれた孔の穿孔方法、あるいは研磨仕上げの状態、使用されている石材等のどの要素からも贋作を主張できる結果は得られない。

それでは真物と判断する根拠を、観察結果から記述していきたい。形状や製作技法に違和感がないことは述べたとおりであるが、写真3に示したものは腹側の子勾玉が体部にとりつく部分である。この部分を観察すると、付着した土をこそげ落とそうとした痕跡を認めることができる。こそげ取った痕跡部分は、摩耗もしておらず、明らかに近年の擦痕であると判断できる。この「近年」がP.F.v. シーボルトの手元にあった時と考えるか、その後博物館に所蔵された時点であるかを判断することはできないが、いずれにせよ地上に出現した後、付着していた土を取り除こうとした時の痕跡であると判断できる。すなわち、本品には土が付着した状態にあり、このことから土中にあったものと判断できる。さらにその土を取り除こうとした痕跡があることは、贋作によく施される、故意に土を付着させるという行為とは相反するものであり、むしろこのような痕跡が明瞭であることは、本資料が真物であることを示していると判断した。

なぜこのように真贋にこだわりを持つかという点、P.F.v. シーボルトが来日する少し前、すなわち18世紀後半代には、神代石と称する今日という縄文時代の石器、あるいは古墳時代の石製品を収集することが盛んになり、弄石家とよばれる人々が大いに活躍した。具体的には木内石亭を筆頭として、子持勾玉を「石剣頭」と名付けた谷川士清もその一人である。彼らの収集熱が高まると同時に、「奇石商」と呼ばれる神代石を売買する人々も現れる。その実態は今ひとつ明らかなではないが、木内石亭の残した記録にはしばしば奇石商が石亭のもとを訪れ、彼のコレクション形成の少なくない資料がこのような購入資料であることがわかる。そしてこのような商行為が成立するということは、それだけ神代石の需要と供給があるということが予測でき、需要に供給が追いつかないという状況が生み出される中、「贋作」が作られ、商品として流通している背景が考えられる。

故に、江戸時代の収集品の中には少なからず贋作が紛れ込んでおり、今日まで伝来しているものも

少なくない。この江戸時代の贋作については、別稿を参照されたいが<sup>(註4)</sup>、江戸時代から伝世している石器、石製品については真贋を見極めることが、その資料を今日的な考古資料として考察の対象となし得るのかということに直結する。よって、このP.F.v. シーボルトが持ち帰った子持勾玉についても、真贋を判断することは重要であり、今回観察したP.F.v. シーボルト収集に係る勾玉の中には明らかな贋作も含まれている。今回の調査結果から、子持勾玉は真物であると判断し、故に今日の考古学的な観察、あるいは考察に有用な資料であることを明記しておきたい。



写真3 子持勾玉細部

### 3 『NIPPON』におけるP.F.v. シーボルトの観察結果とその記述

今回観察した子持勾玉は、P.F.v. シーボルトの名著『NIPPON』に図が掲載されていることは、周知のことである。そこで、まず本書におけるP.F.v. シーボルトの記述を見ていきたい<sup>(註5)</sup>。

子持勾玉は「日本列島の原住民の石の武具について」という項目に記載されている。これは江戸時代に子持勾玉は「石剣頭」と呼ばれて、石でできた剣の柄頭であると考えられてきた。それゆえ「石の武具」という項目に記載されることは、至極もつものことであり、換言すればP.F.v. シーボルトが当時の「神代石」研究、あるいは弄石家の著作をよく理解していると言えよう。現在、ライデン民族博物館の所蔵品名が「knop/sable knop (剣の握り)」となっていることは、P.F.v. シーボルトの研究結果をそのまま引用していることによるものと考えられる。

続いて、子持勾玉についてのP.F.v. シーボルトの記述を抜粋していこう。まずは、「石剣頭つまり石の剣の頭と呼ばれるものは、半月状に切って頭をつけたものである。」と記述した後、弄石家の研究成果を援用して「それらはまれではあるが、大和ではところどころ神社の古い土地から出土する。大和で出た標本は大和、伊勢、大坂のいろいろなコレクションに収められている。伊勢の古物蒐集家の谷川氏はこれらの品を神代の剣頭であると説明している。」と続ける。

すなわちP.F.v. シーボルトは、『勾玉 即ち曲った宝玉の記述』と題したオランダ語報告書を記述した伊藤圭介から正確な知識を得ていたものと判断できる。先述したように江戸時代に子持勾玉を「石剣頭」と呼称した人物は、現在の三重県に居住した谷川士清であり、彼の著作である『勾玉考』や、弄石家の第一人者木内石亭が著わした『雲根志』・『曲玉問答』の記述を正確に理解した上で、自らの著作を執筆していることがわかる。

もう1点興味深いことは、この子持勾玉の入手経路について「われわれが大坂で購入した鉱物標本の中にあつた。」と、記述していることである。

P.F.v. シーボルトが大坂へ行った機会は一度きりであり、文政9(1826)年に実施された商館長デ・スチュルレルに随行した「江戸参府」に間違いはない。そこで、彼の残した『江戸参府紀行』の記述を確認しておきたい<sup>(註6)</sup>。

P.F.v. シーボルトが赴いた江戸参府は、文政9年1月9日(西暦1826年2月15日 以下、同じ。)に長崎を出発し、同年6月3日(7月7日)に帰着した、約半年にわたる旅行である。大坂へは往路にあつては、3月13日(2月5日)に到着し、3月17日(2月9日)に京都へ向けて出立している。この往

路では、物品を購入した形跡は見えない。一方、復路では6月7日（5月2日）に到着し、6月14日（5月9日）に西宮へ移動している。往路よりもゆっくり滞在していることがわかるが、江戸滞在を終え、少しでも見聞を広めたいP.F.v. シーボルトにとっては、一日も長い旅程を望んだことであろう。

さて、紀行文を見ると6月9日（5月4日）に、「大坂滞在。研究用品の購入と注文。」という記述を見つけることができる。すなわち、大坂滞在中にあってP.F.v. シーボルトは、彼の助手として来日していたH. ビュルゲルらとともに、観劇や寺社の見物、さらには精銅所の訪問など精力的に動き回っている。H. ビュルゲルは日本国内の鉱物資源の調査も担っており、その目的のために標本として様々な資料を購入した中に、子持勾玉が紛れていたことになる。残念ながら、いくらで購入したかということについては明らかでない。しかしこの記述で確認できることは、この時期に「神代石」を含めて、鉱物資料のような「石」が売買の対象になる商品として流通していたことである。

P.F.v. シーボルトがいつ大坂で購入した鉱物資料の中に、子持勾玉があることを発見したかは不明であるが、長崎に帰った後に離日までには、購入品を調査する時間がそれなりにあり得たものと思われる。先に述べた伊藤圭介の著作は文政11（1828）年に執筆されており、大坂で購入した資料を研究している中で、P.F.v. シーボルトが今日で言う考古資料に興味を持ち、弟子の一人である伊藤圭介に弄石家の著作をオランダ語訳させ、論文として提出させた可能性も考えられる。

以上述べてきたように、現在ライデン民族博物館に収蔵されている子持勾玉は、文政9年6月9日（1826年5月4日）に大坂で購入したものであり、その後長崎にもたらされ、P.F.v. シーボルトの帰国とともに、あるいは一足先にオランダに送付された荷物の中に梱包され海を渡ったと考えられる。

#### 4 まとめ — P.F.v. シーボルトの持ち帰った『子持勾玉』の意義 —

今回詳細を観察することができたライデン民族博物館の子持勾玉について、その観察結果と真贋判定、さらにはP.F.v. シーボルトの『NIPPON』における記述、その入手経路の検討について記述してきた。

この子持勾玉は、文政年間に大坂で売買されていたものであり、約200年にわたって伝世してきたものであることが確認できた。さらには、古墳時代遺物であることも間違いないものと考えた。最後にこの子持勾玉の持つ意義に触れて、まとめとしたい。

江戸時代の弄石家が所有しており今日まで伝世した子持勾玉については、現在の滋賀県草津市に居住した西遊寺鳳嶺の所蔵品を紹介したことがある<sup>(註7)</sup>。詳細はこの拙稿を参照されたいが、江戸時代に出土した資料についても、今日的な考古学資料として扱えることを論じた。今回紹介したP.F.v. シーボルトが持ち帰った子持勾玉も、西遊寺鳳嶺の所蔵品と同様、江戸時代に活躍した弄石家の活動を考えていく際の資料になり得るものであり、この個体の存在意義といえよう。

この江戸時代の弄石家の活動は、木内石亭や木村兼葭堂らが相次いで逝去した19世紀初頭に下火となる。そして彼らの収集品も、そのほとんどが散逸してしまう。しかしながら明治の世となり、博物館という新たな組織が欧米の影響によって成立していくとき、弄石家の収集品が所蔵者を変えて引き継がれてきており、明治前半代に開催された展示会における考古資料の中核をなしていたことは紛れもない事実である。さらに「考古学」という学問の成立に当たっても、明治10年代の考古学的な著作は、弄石家の研究成果を大いに反映している。このことは、例えば明治17年に刊行された神田孝平の著作した『日本大古石器考』を見れば一目瞭然である<sup>(註8)</sup>。

このように江戸時代からの伝世品であっても、単に学史に埋もれた遺物とするのではなく、博物館学、考古学等の諸学問が成立していくときの礎にある資料として理解していく必要があると考える。P.F.v. シーボルトが持ち帰った様々な文物は、まさに19世紀前半期のタイムカプセルであり、その資料は当時の学問水準を測ることのできる実物資料である。

今回観察した子持勾玉も、博物館成立史の研究を進化させていく上で有用な資料であると位置付けておきたい。

#### 註

- 註1 長崎歴史文化博物館 2005年『長崎大万華鏡』近世日蘭交流の華長崎開館記念特別展
- 註2 佐々木幹雄 1985年「子持勾玉私考」『古代探叢Ⅱ—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部
- 註3 大沢眞澄 2003年「シーボルト収集の日本産鉱物・岩石および薬物類標本ならびに考古資料」『新・シーボルト研究Ⅰ自然科学・医学篇』八坂書房 大沢眞澄 2016年「シーボルトの日本の鉱物・岩石&考古学コレクション」『地理』8月号 古今書院
- 註4 徳田誠志 1996年「腕輪形石製品のにせもの—その存在と博物館における保管—」『関西大学博物館紀要』第2号 関西大学博物館
- 註5 中井晶夫・金本正之 1985年『シーボルト『日本』図録』第2巻 雄松堂書店
- 註6 石山禎一・宮崎克則 2014年『シーボルト年表』八坂書房  
斎藤 信 2008(初版1967)年『江戸参府紀行』東洋文庫87 平凡社
- 註7 徳田誠志 2005年「弄石家の残した「石」たち—考古学と博物館学の観点から—」『木内石亭関係資料調査報告』草津市教育委員会
- 註8 神田孝平 1884年『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, & C., OF JAPAN』(日本題『日本大古石器考』1886年刊行)

(徳田誠志)

## Ⅷ ライデン国立民族学博物館所蔵『古山陵之図』の検討

### 1 はじめに

P.F.v. シーボルトが、『山陵図』をオランダに持ち帰っていたという事実は、2015年12月に國學院大學で開催された国際シンポジウムにおいて、西南学院大学宮崎克則教授の発表により初めて知った事実である<sup>(註1)</sup>。宮崎教授の発表は「西南学院大学博物館とシーボルトの収集品」と題したものであり、教授がこれまでに調査したP.F.v. シーボルト収集品を順次スライドで紹介された。その際、1枚の絵図が映し出され「仁徳天皇」「百舌鳥耳原」等の文字を読むことができた。発表時の極めて短時間に映写されたものであったが、この図がこれまでに見聞してきた『山陵図』では見たことがない「仁徳天皇陵」の図であることに衝撃を受けた。

そこで発表後、宮崎教授をお伺いし、この『山陵図』の詳細と画像データの提供をお願いし、快くご了承いただいた。そして今回、國學院大學の研究助成金により渡蘭し、この「謎の絵図」を、ライデン民族博物館においてじっくりと観察する機会を得た<sup>(註2)</sup>。小稿では、これまでに明らかにできた『古山陵之図』について、現状を報告しておくこととしたい。

冒頭において、今回の調査において様々なご支援、ご協力を賜った機関、各位に心より感謝の意を表したい。

### 2 『古山陵之図』の概要

#### (1) 『山陵図』とはなにか

本章では、『古山陵之図』についての概要をまとめておく。その前に『山陵図』について簡単に定義づけを行っておきたい。大まかな表現であるが、『山陵図』とは、「幕（政）府による山陵探索の結果作成された天皇陵の絵図」とすることが可能である。古代天皇の墓、すなわち「山陵」は、律令時代以降にあっては時代が下るとともに祭祀は途切れ、その所在地も不明確となった。そこで江戸幕府は、世情が落ち着いてきた元禄時代になって、山陵の探索と整備を幕府の政策として実行した。この元禄の探索によって確定した山陵を描いた『山陵図』を皮切りに、「享保」「文化」「安政」「文久」の各時期に絵図が制作された。さらには明治10年代になって、最後の『山陵図』が制作されている。この各時期に作成された『山陵図』は、様々に書写され流布していくこととなった。その際注意することは、書写されたそれぞれの『山陵図』には、統一的な名称が付されておらず、系統を超えて同名の写本が残されていることがある。よって、名称だけでなく、実際に描かれている絵図そのものを比較することが大切であり、名称だけではいつの『山陵図』であるかを判断することは難しい。

さて、この『山陵図』に記述してある事項としては、「誰の陵か」「所在地（地名）」「誰の知行地か」、そして「大きさ（周囲・高さ等）」が基本情報である。むしろ、これらの情報を明確にしておくことが制作の目的であると言っても過言ではなかろう。それゆえ、絵図によっては、さらに様々な書き込みがあるが、それがオリジナルなものか、書写された際の補筆かを正確に判断する必要がある。

また今日では観察することができない、内部施設などについての情報が描かれており、ある程度考古学的な面から活用できることも事実である。しかしながら『山陵図』作成の目的としては、誰の陵がどこにあり、その土地の大きさはどれだけであって、そこは「除け地」になっているか否かなど、その当時の土地管理台帳の意味合いを持っていることも理解しておく必要がある。

いずれにせよ『山陵図』は、江戸時代に限っても数系統が存在し、それぞれの絵図が書写を重ねていくことから、今日数多くの『山陵図』が残されており、名称も様々に名付けられたものが存在している。今回調査をした『古山陵之図』もその1つであり、その内容を検討することは、『山陵図』研究だけでなく、当時P.F.v. シーボルトの周辺にいた人々における、陵墓への関心・興味などを理解する意味でも意義

のあることと考える。

## (2) 『古山陵之図』について

P. F. v. シーボルトが持ち帰った『山陵図』には、『古山陵之図』という名称が付されている。この名称が誰によって、いつ名付けられたかなどの経緯はわからない。しかしながら、同名の『山陵図』は残されておらず、名称、内容を含め全く同一のものは現在までに見つかっていない。

さて、この『古山陵之図』については、これまでに1度だけ国内で展示されたことがあるので紹介しておきたい。その展示会は、昭和63(1988)年に京都国立博物館他で開催された「日本・オランダ修好380年記念 シーボルトと日本」展である。この展示会は残念ながら見学していないので、同展に併せて発刊された図録の記述を見ておきたい。図録には「神武天皇陵」の絵図が掲載されており、以下の解説が記述されている<sup>(註3)</sup>。

「神武天皇以下のいわゆる天皇陵の形を描いたもの。絵はシーボルトでも川原慶賀でもなく、おそらく誰かに依頼して描かせたものであろう。専門画工とは思わず、いずれ好古の士の作ったものに違いない。高野長英の可能性が高い。(狩野博幸)」

この解説によれば、この絵図はP. F. v. シーボルトのお抱え絵師であった「川原慶賀」を代表とする専門絵師ではなく、素人が描いたものであるとし、その人物として「高野長英」をあげる。ただし、その理由は記していない。また、文中には「好古の士」とあるが、高野長英が好古家であったという記録はなく、好古の士=高野長英であるか否かを判断できない文章である。いずれにせよ、短い解説文であるのでやむを得ないものの、P. F. v. シーボルトが持ち帰ったものの1つという以上の解説は加えられていない。

また、この展示会図録に言及したものとしては、亥口勝彦氏が短文で紹介している。その中で先ほどの展示会図録に掲載されている「神武天皇陵」は、現在の「綏靖天皇陵」であることを指摘している<sup>(註4)</sup>。

以上がこれまでに『古山陵之図』についての研究史であり、この図が『山陵図』の系統において占める位置、あるいは内容についてはほとんど研究されていないというのが現状である。それはこの図がP. F. v. シーボルトの持ち帰った数万点に及ぶ資料の1点に過ぎず、これまで考古学、あるいは天皇陵研究者の目に触れる機会が少なかったことが一因であろう。この点からも、今回現物を精査することができ、内容を紹介することは大いに意義があるものと考ええる。

## (3) 制作者「高野長英」について

先述したように『古山陵之図』の制作者は、「高野長英」として紹介されている。本項では、その根拠と可能性に言及しておきたい。

この制作者を高野であるとした根拠は、『古山陵之図』の中に収められている「紙片」がすべてである(写真1)。この紙片に記されている、文字は次の通りである。

蘭語「Vermoedelijk vervaardigd door Chōei Takano C. C. Krieger」日本語「もしかしたら高野長英によって作られたかもしれない。カール・C・クリーガー」この紙片を根拠に、『古山陵之図』は高野長英が制作したと推測されているが、この推測は、サインを残したカーレル・C. クリーガー(1884～1970以下、C. クリーガーと表記する。)によるものである。C. クリーガーは若い頃には海軍に勤務するが、日本に興味を持ったことから日本語と日本文化を学び、海軍を退職した後、ライデン民族博物館において、日本・アジア・中国担当の学芸員として勤務する。その時期は1927年から1949年とされ、博物館が現在の場所において開館した時期と重なっている。その後はユトレヒト大学に移り、日蘭関係史や日本美術史を講義した<sup>(註5)</sup>。

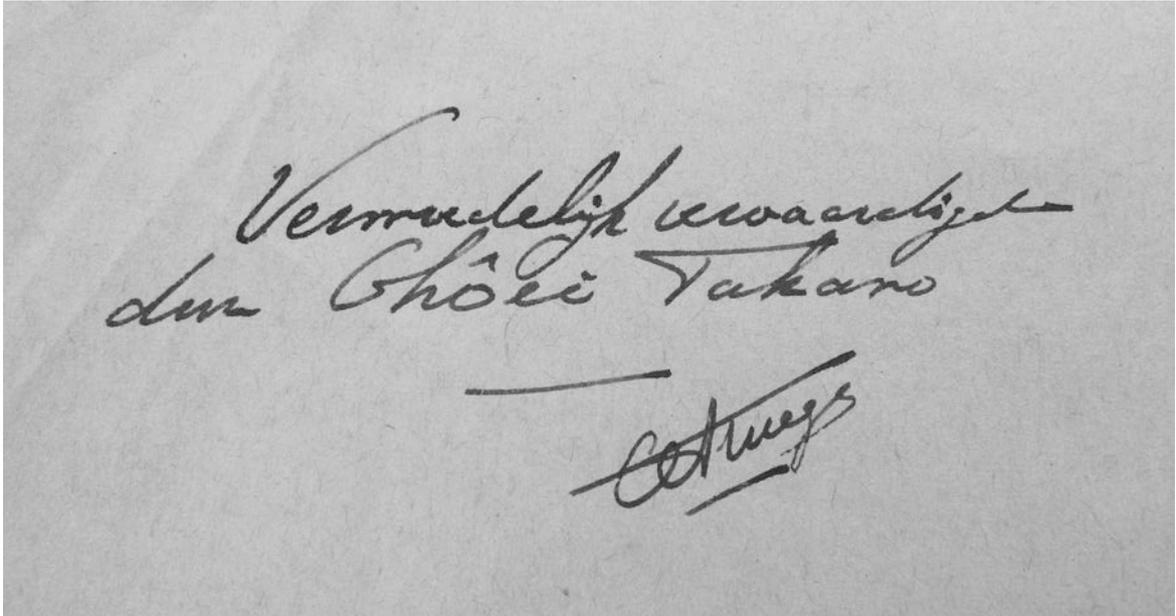


写真1 『古山陵之図』に収納されている「紙片」



写真2 鳴滝塾址とP. F. v. シーボルト胸像（背後はシーボルト記念館）

この紙片がその紙質から 20 世紀前半代のものであろうと考えられているが、この点からも C. クリーガーが残したものとしてみ違ひなからう。しかしながらなぜ高野が制作したと推測したのかという理由は不明である。ただし、彼がこの時期、最も優秀な日本コレクション担当学芸員であったことは間違いなく、この記述がまったくの荒唐無稽な推測とはいえないであろう。よって、ここからの記述は、『古山陵之図』の制作者が高野長英であることを前提に記述を進めていくこととしたい。よってまずは、高野長英の略歴を簡単にまとめておく。

高野長英は、文化元（1804）年陸奥国胆沢郡水沢に生まれ、実父を早くに亡くすが、母の実家で医学の勉強を修める。長じるにつれ向学の思いを抑え難く、故郷を離れ江戸へ行き、さらには 22 歳（1825 年）の時、長崎に赴き鳴滝塾への入塾を果たす（写真 2）。後年「蛮社の獄」により終身刑を受け、さらには脱獄を図り全国を転々とするという波瀾万丈な人生を送ることになるが、この時点ではまだ向学の医学生であった。そして優秀であったことは間違いなく、塾生にあつて蘭語の理解能力は一、二を競つたと伝えられる。この優秀さが P. F. v. シーボルトにも認められ、入塾の翌年に実施された江戸参府にも同行する。すなわち高野が P. F. v. シーボルトの近くにいたことは間違いのない事実であり、優秀であったが故に研究助手を務めていたこともよく知られている。よって、『古山陵之図』を書写する時間と立場にあつたことは十分に考えられる。もちろん P. F. v. シーボルトからの要望で『古山陵之図』を制作したものか、様々な文献資料を収集する中にたまたま『古山陵之図』が含まれたものかは明らかではない。ただ、P. F. v. シーボルトの関心からすれば、ことさら「山陵」に興味を持った形跡はなく、日本の歴史、あるいは天皇を知るために収集した資料の中に何かしらの『山陵図』があり、それを高野が書写し『古山陵之図』と題して P. F. v. シーボルトに提出したと考えておきたい。

さて、小稿では高野の生涯について詳細を記述するものではないので、問題とすべきは彼が『古山陵之図』を書写する画力の持ち主であつたか否かという点だけを確認しておきたい。

高野が描いた図で最も有名なものとしては「サカマタ鯨の図」がある（写真 3）。この絵図は高野が P. F. v. シーボルトより「鯨及び捕鯨に関する研究」という研究テーマを与えられ、おそらく江戸参府直前までこの調査にかかわっていた頃に描かれたと思われる。それなりの写実性を持った絵であり、高野の画力が十分に『古山陵之図』を書写できるものであることを窺わせる。さらに現在、高野の地元にある記念館には、1 幅の「墨竹図」が残されている（写真 4）。この図は享保 10（1725）年頃に長崎に来船した画家「李用雲」の竹図を集めた粉本『李用雲竹譜』を範としているという。この絵図を見ても、高野が江戸時代の教養人として、『古山陵之図』を書写しうる十分な画力を持っていたと判断できる<sup>(註 6)</sup>。

以上、高野の画力について記述を進めてきたが、彼が P. F. v. シーボルトの近くにあつて、『古山陵之図』を制作する機会があつたことは間違いなく、そしてそれができる画力の持ち主であつたことを確認しておきたい。

それでは、いつ頃制作に当たったかといえ入塾後、江戸参府を終え、再び鳴滝塾で研究助手を務めていた頃が最も可能性としては高いものと考えている。P. F. v. シーボルトがいわゆる「シーボルト事件」で国外退去させられる際には、高野は長崎を離れており、事件には巻き込まれなかったという。一説には P. F. v. シーボルトに追手が迫る気配を察して、早々と逃走したと伝えられる。換言すれば高野は P. F. v. シーボルトの身近にいたからこそ、事件への危機感を感じ取ったともいえる。『古山陵之図』が現在オランダに存在している事実は、事件前にすでにこの絵図が梱包を終了しており、送り出していた可能性もあろう。



写真3 高野長英画 『サカマタ鯨図』(高野長英記念館所蔵)

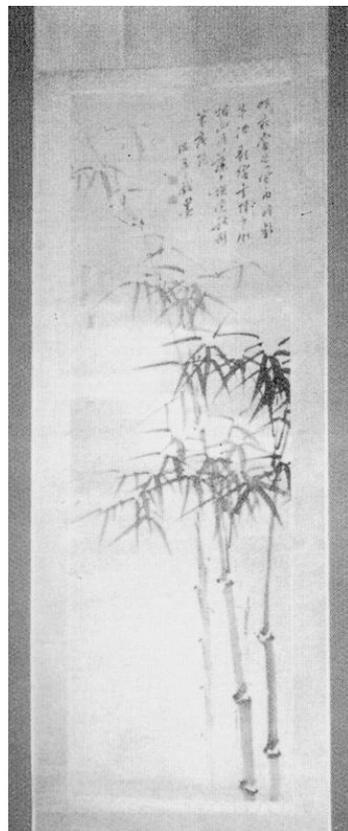


写真4 高野長英画 『墨竹図』  
(高野長英記念館所蔵)

### 3 『古山陵之図』の観察結果

#### (1) 形状

本章では、今回詳細まで観察できた『古山陵之図』について、その内容を見ていきたい。

まず外形（帙）であるが、閉じた状況で縦約 28.0cm、横約 20.5cm を測り、左側に紐が付けてあり、結べるようになっている（写真 5）。開くと最大横幅 53.5cm、最大縦長 38.0cm となり、左側と上下を折り込むように作られている（写真 6）。表紙には「古山陵之図」と筆書きされた題簽が貼り付けられており、その横に「52 古山陵之図 Ms」と記された紙片も貼り付けられている。この紙片は『シーボルト蒐集和書目録』にある原文影印と一致し、収集した状態を保っていると考えてよい<sup>(註7)</sup>。他に「Seriell No. 4299 KOSANRYO NO ZU 古山陵之図」と上下 2 段書きのシールが添付されている。先の題簽とは天地を逆に添付されているが、本来の右下部分には同大のシールが剥がされた痕跡が残されており、このシールは貼り直された可能性が高い。他には現在のライデン民族博物館における管理用タグが附属しており、現在はバーコードで物品管理されていることがわかる。ちなみに現在の登録番号は、「1-4299」となっている。

この帙に使われている材料、さらには中の和紙もであるが、それほど高価なものではなく、江戸時代に市中に流通していたものと考えられる。そして、この形状のまま長い船旅を経てオランダにもたらされ、P. F. v. シーボルトの帰国とともに整理がなされ、今日までおおよそ 190 年間にわたって収蔵先は転々としながらも、伝えられてきたと判断できる状態である。

#### (2) 各絵図の内容

続いて、中に収められている 24 枚の絵図を見ていきたい。各絵図に使用されている和紙の大きさは、縦約 26.0cm、横同じく 38.0cm を計ることができる。どの絵図も端部が若干折れ曲がっているため正確な計測は困難であるが、ほぼ同大の用紙を使用していると考えてよい。この大きさは半紙よりは大きく、美濃紙（美濃判）の大きさ（27.3 × 39.4cm）に近い。先述したように、この用紙はそれほど高価な紙料とは思えないものである。この 24 枚の絵図が、半折して先ほどの帙の中に収められている。

以下、各図に記載されている文章を和訳しつつ（以下、ゴチック表記が和訳文である。なお、漢字に付された振り仮名は省略した。）、順に記述していくこととしたい<sup>(註8)</sup>。

「1 神武天皇の墓は大和国の畝傍の山の上にある。お墓の境界は a から b まだが 360 フィート（長さの単位である「Voeten」をフィートとして和訳する。以下、同じ。）、c から d まだが 72 フィートである。」

この記述とともに、右下には「VERZAMELING VON SIEBOLD（訳：フォン シーボルトコレクション）」との印面を持つ直径 2.7cm のスタンプが捺印されている（写真 7）。すなわち、P. F. v. シーボルトが帰国後、『古山陵之図』が「シーボルト・コレクション」として整理した過程を示している。なお、このスタンプはこの 1 枚にのみ確認できる。

さて、上部に記載されている記述であるが、大きさについては明らかに不正確な情報であることがわかる。すなわち絵図には八角形が描かれその 4 辺に a ~ d が記されているが、明らかに対面の長さは同じに描かれているにもかかわらず、5 倍の差を示す数値が表記されている。すなわち、図と数値の整合性がとれていないものと判断できる。

「2 綏靖天皇の墓は大和国の桃花鳥田の山の上にある。お墓の周囲は 1080 フィートである。」

この記述を見ると綏靖天皇の陵名「桃花鳥田丘上陵」を正しく理解した上で、オランダ語に訳していることがわかる。また、「ツキダ」という振り仮名も正しく振られており、陵名への理解が正しいことがわかる。それにもかかわらず、この陵名を所在地としてオランダ語に翻訳していることは違和感

を抱かざるを得ない。

「3 安寧天皇の墓は大和国の御陰井にある。お墓の境界はaからbまでが1080、cからdまでが720フィートである。」

説明文にある「山の上」という記述は、棒線で「見え消し」となっており、安寧天皇陵の陵名である「畝傍山西南御陰井上陵」の中に「山」がないことを理解した上で、訂正したものと考えられる。また、この絵図には、溝のようなものが周囲に描かれているが、2カ所において「断面図」が描かれている。このような断面図が描かれている絵図は、本図のみである。

「4 懿徳天皇の墓は大和国の織沙谷の上にある。お墓の周囲は360フィートである。」

この図から「天皇」の表記が省略され「リ」で表記してある。この意味するところは正確には不明であるが、繰り返される「天皇」の文字を時間短縮のために省略したものであろう。

「5 孝昭天皇の墓は大和国の博多の山の上にある。お墓の周囲は、2160フィートである。」

図には、山頂にある社殿2棟が朱書きで描かれている。この社殿を取り囲むように黒色で竹垣のように描かれているものが、元禄の修陵時に設置されたと考えられる。しかし山の中腹には朱色の鳥居が描かれており、修陵以前からこの地が神社として祀られていた状況を示している。

「6 孝安天皇の墓は大和国の玉手の山の上にある。お墓の境界はaからbまで2160フィートである。」

墳頂部には、長方形の石のように見えるものが立体的に描かれている。これが何を描いているかについては不明であるが、内部施設にかかわる石室の天井石、若しくは石棺であろう。

「7 孝霊天皇の墓は大和国の馬坂にある。お墓の周囲は東から西が1800フィートであり、反対側も同じである。」

大きな石を取り囲むように、竹垣を巡らしていることがわかる。山頂も陵の範囲を示す部分と同様に黄色く着色されているが、その理由は不明である。他の図と比較するとこの部分は「畑」と注記しており、同じく黄色に着色されている。すなわち文字は書写していないが、図の色調は正しく写していることがわかる。

「8 孝元天皇の墓は大和国の劔池嶋にある。お墓の境界はaからbまでが720フィートcからdまでが360フィートである。」

この図の番号は最初に「9」と表記した後、やや強引に「8」に訂正したが、改めて「8」という数字に書き直してある。また、この図の大きさを示す記述には「c～d」と表現されているが、図にはc、dは記述されていない。

「9 開化天皇の墓は大和国の春日率川の上にある。お墓の境界は東から西が40フィート、北から南も同じフィートである。」

この図の番号も当初「10」と表記した後消して、「9」としている。この図では大きさが「40フィート」と記述されているが、この数値は『古山陵之図』において、最も小さな数値である。他の図と比べても「40」という数値は余りにも小さいものであり、信憑性に欠けると判断せざるを得ない。

「10 崇神天皇の墓は大和国の山邊にある。お墓の境界はaからbまでが720フィート、cからdも同じフィートである。」

この図は当初より「10」と表記されており、この時点でそれまでの数字順の誤記に気づいたものと思われる。後述するが、元禄期の山陵探索時には崇神天皇の陵は特定にいたっておらず、本来描かれるべきでない「崇神天皇陵」とされたことが、この図以降の天皇名とその山陵図との齟齬を生むきっかけである。この点は、次章で考えていきたい。

「11 垂仁天皇の墓は大和国の菅原伏見にある。お墓の幅は、4つの側とも720フィートである。」

この図の表記は、本来天皇名を記す部分に「菅原伏見」と記述してしまったために、「大和」まで書



写真5 『古山陵之圖』表紙

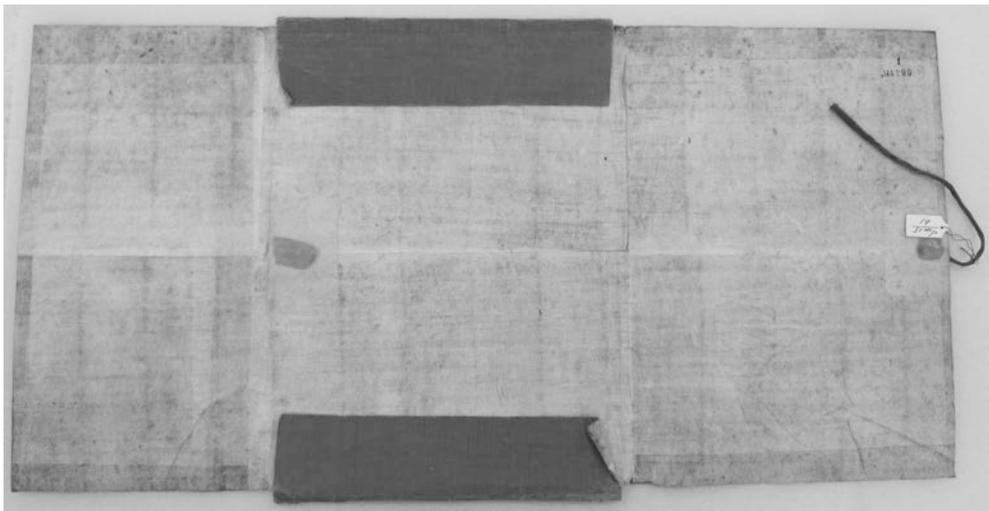


写真6 『古山陵之圖』帙（開封状況）



写真7 「シーボルト・コレクション」スタンプ

いた時点で誤りに気づき、見え消しの状態となっている。見たとおりであるが、丁寧な修正とはいえない。また、大きさの表現で「幅」を用いているのは本図のみである。

「12 景行天皇の墓は大和国の山邊にある。お墓の境界は a から b までが 720 フィート、反対側も同じフィートである。」

この絵図には、表裏に「12 景行天皇の墓は大和国の山邊にある。」との記述が認められる。なぜこのようなことが生じたかを考えると、先にこの記述を記したため、絵図の左側部分（後円部に当たる場所）が文字に邪魔されて描けなくなってしまったので、用紙を裏返して絵図から先に記述し、その右側の余白に同じ文言を記述したと想定できる。用紙が貴重であることは予想できるが、修正方法としては丁寧ではない印象を受ける。

「13 成務天皇の墓は大和国の狭城盾列の後にある。お墓の境界は a から b までが 720 フィート、d から c も 720 フィートである。」

説明文にある「後ろにある」という記述であるが、これも本来の陵名「狭城盾列池後陵」が基となったと考えられるが、それにしても「池」の文字が認められない。単純に見落としたものかを判断することはできない。

「14 b 神功皇后の墓は大和国の狭城盾列にある。お墓の境界は a から b までが 720 フィート、d から c も 720 フィートである。」

この図には、多くの修正箇所があるので、順に見ていこう。まず、番号であるが「13」を見え消して、弱い筆記で「14 b」と訂正してある。この訂正理由であるが、枚数的には 14 枚目になるのだが、神功皇后は次の「14」に描かれている仲哀天皇の皇后陵であるので 14 の「b」という表記にしたのではなかろうか。すなわちこの「b」の意味するところは、「枝番」であると考えられる。この想定が正しければ、制作者は図に記した「番号」の意味を、「枚数順」ではなく、「歴代順」として理解していたことが考えられる。歴代順と考えて番号を付したことが、この『古山陵之図』において大きな間違いを生じさせる結果となるのであるが、この点は後述したい。

次の修正箇所は左上にある「成務天皇の墓は大和国の狭城盾列池の後にある。」という記述であるが、これは神功皇后の説明ではないと思ひ直し、見え消しのように修正したものであろう。ただ不思議な点は先述した成務天皇陵の陵名にある「池」の文字が入っていることであり、成務天皇の陵名を正しく理解していた可能性もある。

次に右側の大きさを記した部分の修正であるが、これは「a から b まで」という表記を抜かして記してしまったために、改めて下書き直したものであろう。しかしながらこの記述内容は 1 枚前の成務天皇陵の記述と全く同じであり、この記述の信憑性に疑いを持たざるを得ない根拠となる。

いずれにせよこの図には多くの訂正がなされているが、このことは本図の作成に当たっては、いささか落ち着きをなくした状態で、もっといけば少し動揺した状況で書写している様子が窺える。

「14 仲哀天皇の墓は河内国の恵我長野にある。お墓の境界は a から b までが 720 フィート、c から d も 720 フィートである。」

この記述において、それまで省略していた「天皇」が記述される。これはその前が「皇后」であったために改めて「天皇」の 2 文字を記述したものであろう。仲哀天皇陵は、記紀の記述においても初めて「河内」に築かれた天皇陵であり、その点では正確な情報となっている。

「15 応神天皇の墓は河内国の恵我長野にある。お墓の境界は東から、西、そして南から北が約 1800 フィートである。」

この絵図では、「大和」と記したものを塗りつぶした後に「河内」に訂正してある。そして大きさの記述には「東・西・南・北」の表記があるが、絵図には全く方位は記していない。また、現在の応神天

皇陵はいうまでもなくわが国2番目の大きさを誇る前方後円墳であり、この大きさの表記（1800 フィート）が、孝昭天皇陵・孝安天皇陵の規模（2160 フィート）よりも小さな数値であることは、江戸時代の測量技術を勘案したとしても真実とは言い難い。

「16 仁徳天皇の墓は和泉国の百舌鳥耳原にある。お墓の境界は東から、西、そして南から北が約 2880 フィートである。」

この絵図が、冒頭に記した宮崎教授の発表時に映写されたものである。記述にある「2880」は、『古山陵之図』にある絵図の中では最大の数値であり、仁徳天皇陵の大きさを物語るようにも思われるが、応神天皇陵と同様、この数字の根拠は不明である。応神天皇陵の記述と比較すると、数字だけを変えているにすぎないことがわかる。

「17 履中天皇の墓は和泉国の百舌鳥耳原にある。お墓の境界は南から北が約 1800 フィートである。」

絵図には明らかに横穴式石室と、そこに納められた石棺を描いている。これは当時、崇峻天皇陵と考えられていた現在の奈良県桜井市に所在する「赤坂天王山古墳」を描いたものであることが知られている。すなわち、大きさの記述は応神天皇陵とほぼ同じ内容になっており、絵図が全く違うにもかかわらず同じ数字が記されていることを見ても数字の信憑性が低いことを物語っているように考えられる。

「18 反正天皇の墓は和泉国の百舌鳥耳原にある。お墓の境界は東から西が 1080 フィート、南から北が 640 フィートである。」

この図から再び「天皇」の文字が省略され「*ll*」で表記される。また、この図では初めて図の上に「東 (=oost)」「西 (=west)」という方位が記されている。これまでの図には文章中には方位が示されているものの、図に東西南北は表記されている図は認められなかった。もう1点この図における特徴としては、大きさの数値で初めて「640」という数字が出現していることである。大きさを示すものから当然、図ごとによって異なってしかるべきだが、これまでではすべて「360」の倍数が記されており、この原則から外れる数値を記すものは、極端に小さな数字が記されている開化天皇陵図と本図に限られる。

「19 允恭天皇の墓は河内国の恵我長野の北にある。お墓の境界は a から b が 1080 フィート、c から d が 720 フィートである。」

所在地については、允恭天皇陵の陵名「恵我長野北陵」を理解した上で、「noord = 北」という表記が認められる。図は見たとおり、横穴式石室内に蓋の開けられた石棺を描いている。この状況から、この古墳は、現在橿原市に所在する小谷古墳と考えられる。なお、この図の4方向に a ~ d が付されているが、図を見る限り、この数字が正確とは思えない。

「20 安康天皇 大和国 菅原伏見（日本語のみ）」

この図から最後の4枚までは、オランダ語が全く記されていない。すなわち天皇名と所在する国名、そして陵名の一部のみが記される。当然、大きさの表記も全く認められないし、アルファベットや方位も記述されていない。ただし、絵図自体はこれまでの図とそれほど粗雑になったという印象は受けない。図には明らかに、横口式石槨のように見える内部施設を描いている。

「21 雄略天皇 大和国 丹比高鷲（日本語のみ）」

「20」図と同様、天皇名、国名、陵名の一部を記すのみであり、オランダ語表記は一切認められない。しかしながら、「丹比」は河内国の地名であり、「大和国」とあるのは間違いである。描かれている山陵は、墳頂には1本の松を描いており、他の『山陵図』の知見からすると、この古墳は明日香村に所在する、高松塚古墳であると考えられる。

「22 清寧天皇 河内国 坂門原（日本語のみ）」

記述されている語句は、「20」図以下と同じである。「22」という番号表記の前に、何かを消したように見えるがよくわからない。また、絵図の左下には長方形の四角を描いたものの、3本の短い斜線

で消してあるように見える。他の『山陵図』では、この部分に「矢内原村」という地名が隅丸長方形の囲みの中に記されてるものが多く、このことから四角の中に地名を記入しようとしたものの、何らかの理由で地名の表記を取りやめたと考えられる。

### 「23 顕宗天皇 大和国 磐杯（日本語のみ）」

記述は、「20」図以下と同じである。ただし番号は「22」を、やや強引に「23」に訂正している。また、「大和国」の前にある1字を消しているが、裏から見ると「天」のようにみえる。おそらく「大」と書くべきところを「天」としてしまったために、訂正したものであろう。これまでも見てきたが、それほど丁寧な修正のように思えない。また、この図は右下部分に少し破れているところがある。おそらく最終頁であり、1番外側になるために損傷したものと考えられる。裏面に「1 No4299」のスタンプが押されている。この数字は現在の管理番号と一致し、スタンプの状態からこの番号で長らく管理されてきたことがわかる。すなわち、かなり古い段階で整理した時点からこの枚数であり、おそらく当初より24枚で完結していたものと考えられる。

### (3)『古山陵之図』の特徴

以上、23図24枚(14図と14b図が存在するため)について、各図の特徴を記述してきた。本章のまとめとして、『古山陵之図』全体の特徴を記述しておく。

先章において『山陵図』の定義を行ったが、まず、本来記されるべき情報である「だれの陵が」「どこにあり」「その大きさは」という3点に注意して見ていきたい。

まず、「誰の」ということに関しては、「○○天皇の墓は・・・」という記述から始まるとおり明確である。しかしながら「どこに」という記述は、各図の説明でも述べたようにすべて「陵名」を所在地としてオランダ語に翻訳しているに過ぎない。例えば神武天皇の陵名は「畝傍山東北陵」であるが、所在地の記述としては「畝傍山の上にある」と訳している。そして「東北」という方位を示す言葉はあえて外しているように思われる。それは「3」の安寧天皇陵において、陵名は「畝傍山西南御陰井上陵」であるが、「西南」はオランダ語でも表現されていない。「4」の懿徳天皇においても陵名「畝傍山南織沙上陵」の「南」は表現されていない。このことは「畝傍山」に伴う方位だけではなく、仲哀天皇・履中天皇・反正天皇等の河内国にある陵墓の図でも陵名にある「方位」を外して記述している。但し、允恭天皇陵だけは陵名にある「恵我長野北陵」にしたがって、オランダ語訳の「noord = 北にある」という記述があるので、全く方位を示さないとはいえない。しかし全体的に見ると、方位を記述していないものの方が多いように思われる。これは絵図そのものにも示されており、「18」の反正天皇陵の図のみに方位（「東(=oost)」「西(=west)」)が記されているが、ほかの図の多くは「a・b・c・d」の記号に置き換えられている。

このことから考えられることは、陵名に使用されている地名という、江戸時代においても明確でない地名を仮借して所在地としていることは、あえてその所在地(地名)をはっきりさせないような意図が感じられる。さらにいえば、次章で触れるように他の同系統の『山陵図』には必ず記してある、この時期の村名、あるいは村から陵へ至る道筋を示す線とその距離などが、『古山陵之図』には全く見られないことが大きな特徴として見えてくる。

このことは『山陵図』を作成する意味である「陵の所在地を明確にする」という意識とかけ離れたものであり、『古山陵之図』はあえて正確な所在地を明確にしないという意図のもと書写されているとしか考えようがない。このことは「22」の清寧天皇陵の図において、本来地名を記すべき四角表示をあえて消していることから裏付けられる。

次に大きさの情報が、どこまで正確であるかを見ていきたい。陵の大きさを正確に記述することは、その陵を正確に描くという目的だけではなく、その土地が誰の知行地であり、その土地への課税状況

はどうなっているかを示す上でも重要な情報である。

しかるに『古山陵之図』ではいかがであろうか。すでに各図の解説でも記したよう、大きさを示す数字は、反正天皇陵と開化天皇陵の図を除き、いずれも「360」の倍数で表記しているにすぎない。具体的には「720」「1080」「2160」が比較的多用されている数字である。仁徳天皇陵はわが国第1位の規模を誇る前方後円墳であるが、『古山陵之図』では「2880 フィート」という最大の数字が記されている。この数値は、他の山陵よりも大きいことは確かだが、「360」の8倍であることがわかる。すなわち仁徳天皇陵が大きいことは理解しているものの、あくまでも「360」を1単位として記述しているのみであって、本来の図にあった規模を正確に換算して記した数値とは到底思えないものである。オランダ語の「Voeten」が、この当時何mを示したのか、現在の「Feet=0.3048 m」と同じなのかについて調べがつかない。しかしながら、図に描かれている数値は、同じ数字が使用されていることが多く、図に記入されている数字は、正確な大きさを示しているとは考えられないものであると結論づけておきたい。

そして「20」図以降は、オランダ語表記が全く見られなくなることは先述の通りであるが、大きさの表記なども後半に至るにつれて同じ文章の繰り返しになっているように見受けられる。全体的に見てもそれほど丁寧に書写したという感じを受けないというのが、修正部分等を実際に確認したときの感想でもある。さらには「誰の知行地か」という点については全く記述がなく、土地台帳としての図としては意味をなさないものであることも付記しておきたい。

このように丁寧に書写されたものではないということが『古山陵之図』の特徴ともいえるが、何故このようなことになったかについては、最後にもう一度考察することとしたい

#### 4 同系統の写本との比較検討

##### (1) 「奈良県図書情報館本」「橿原考古学研究所本」との比較

本章では『古山陵之図』を他の『山陵図』と比較することによって、どの系統の図であるか、特徴はどこにあるかを整理していくこととしたい。

冒頭にも述べたように『山陵図』は、江戸時代にも「元禄」「享保」「文化」「安政」「文久」において山陵調査、あるいは修陵がなされた際に作成されている。よって、そのすべての系統を、網羅的に位置づけることは至難であるが、『山陵図』の先行研究として増田一裕氏の成果を援用して記述を進めていきたい<sup>(註9)</sup>。

さて、『古山陵之図』がどの系統の図であるかを考えていくにあたって、当然この図が制作された時期以降であることはあり得ない。『古山陵之図』は高野長英が制作したものとすれば、彼が鳴滝塾に入塾した年からP.F.v.シーボルトが離日するまでの間に製作時期は絞られる。すなわち文政8(1825)年から文政12(1829)年の5年ほどに限定できる。よって、この時期以降に制作された「安政」「文久」の図との比較はとりあえず不要としておきたい。さらに「享保」の陵墓探査に伴っては新たな図が制作された可能性は低いことが指摘されており、「元禄」の図に追記された可能性が高いとされる。よって、先の5年間に高野が書写できた原本としては、「元禄」か「文化」に制作された図のどちらかということになる。さらにこの時期には「文化」の『山陵図』が一般的であったというよりは、「元禄」の山陵図が様々に書写されながら世間に流布していたことが増田氏によって明らかにされている。よって『古山陵之図』は、江戸幕府によって元禄年間になされた陵墓探査に伴って制作された『山陵図』がおおもとの原本であると考えられる。さらには『古山陵之図』が、この元禄の『山陵図』を基図として、寛政2(1790)年に京都賀茂神社の神官である賀茂季鷹が書写した系統に属する点を、描かれた各図の特徴と一致していることから指摘しておく。よって『古山陵之図』は、寛政2(1790)年以降に制作された「賀

茂季鷹系」の『山陵図』を原本として書写された可能性を考えておきたい。

この「賀茂季鷹系」に属する『山陵図』のうち、奈良県図書情報館が所蔵する『諸陵考 全』と奈良県立橿原考古学研究所が所蔵する『神谷永平・山陵図』を閲覧できたので、『古山陵之図』と比較していきたい<sup>(註10)</sup>。

まず『諸陵考』の概要を、増田氏の解説を引用して記述しておこう。

「和紙折本で天地 27.1cm、左右 19.0cm。1帖。表紙に直接『諸陵考 全』と墨書されている。表紙裏より神武陵が描かれ、未考御陵の字中尾山までの34陵を載せる。つづいて陵図脱漏之分として河内国・和泉国・山城国所在の天皇陵名を列記し、「右依関東台命享保中訂正之」と記し、ひきつづき摂津国・大和国・淡路国・山城国所在天皇名を記録する。そして、「後桃園院 安永八年十一月九日崩御」で終わっている。奥書はない。」

以上の解説文であるが、この図が享保年間の山陵探索の成果を加えて書写されたものであることがわかる。このことは「神武天皇陵図」に朱書きで「享保陵考福塚」とあり、この意味するところは「享保年間の調査では、本陵のことを福塚と呼称した」ことを記述している。この点からも、この図が享保年間の山陵調査の成果を加えたものであること裏付ける。そして、文末には第118代（現在の歴代数）後桃園天皇が崩御した安永8（1779）年を記述している（写真8）。この記述により、この図が安永8（1779）年以降、そして文化10（1813）年に崩御した第117代（現在の歴代数）後櫻町天皇（歴代では先代となるが後桃園天皇の方が先に崩御している。）の生存中に制作されたと考えられる。すなわち『諸陵考』は、『古山陵之図』が制作された文政8（1825）～文政12（1829）年間に近いときに制作された『山陵図』であることがわかる。

また、増田氏の指摘通り『諸陵考』には34枚の図が描かれているが、そのうち崇峻天皇陵については、石室と石棺が描かれている図（現在の赤坂天王山古墳）と、「天皇屋敷」として「金福寺」が描かれた図の2枚がある。よって、描かれている陵の数としては、未考定陵4陵を含めて、33陵ということになる。この時点では崇峻天皇陵はこのどちらとも判断できず、明治年間に「天皇屋敷」として描かれている場所が、崇峻天皇陵に治定され、今日に至っている。

さらに、この『諸陵考』の特徴としては「崇峻天皇陵」と「天武天皇陵」に紙が添付してあり、その紙をめくると内部の石室が見えるという工夫がしてある。このような工夫をすることも、「賀茂季鷹系」の特徴であることを増田氏が指摘している。

この『諸陵考』は、『山陵図』に記されるべき情報、すなわち「誰の陵」が「どこにあり」、その「大きさはどれだけ」で、そして誰の知行地であるかという文字情報が最も豊富であることがわかる。そして絵図そのものもきっちり描かれているという印象を持つ。この『諸陵考』も安永8年以降に制作されているので、元禄もしくは享保の山陵調査時に制作された原本であるとはいえないが、その原本を忠実に書写したものと判断しておきたい。

続いて奈良県立橿原考古学研究所が所蔵する『神谷永平・山陵図』について、先と同様に増田氏の記述によって概要を見ていきたい。

「卷子本で幅 29.7cm、1巻。桐箱入で蓋に墨書で『山陵御陵之図大和国部』とある。題箋には『山陵図 全』神谷永平識とあり、末字は図書シールが伏せてある。シールには 288/225 の図書番号を記入。内面は橿原文庫の蔵書印と「昭和 16 年一月一四日 橿原文庫番号九八〇」の印が押されている。本文は淡彩画で描かれている。」

増田氏の記述通りの概要であるが、内容としては『諸陵考』と同じく 33 陵を描いており「天皇屋敷」の図を含めて 34 枚が描かれている、但し、紙を貼り付けるという工夫は認められない。また、未考定陵の 4 図には「皇極天皇御陵」「陽成天皇」「宇多帝御陵」という記述があるが、この注記は神谷自身

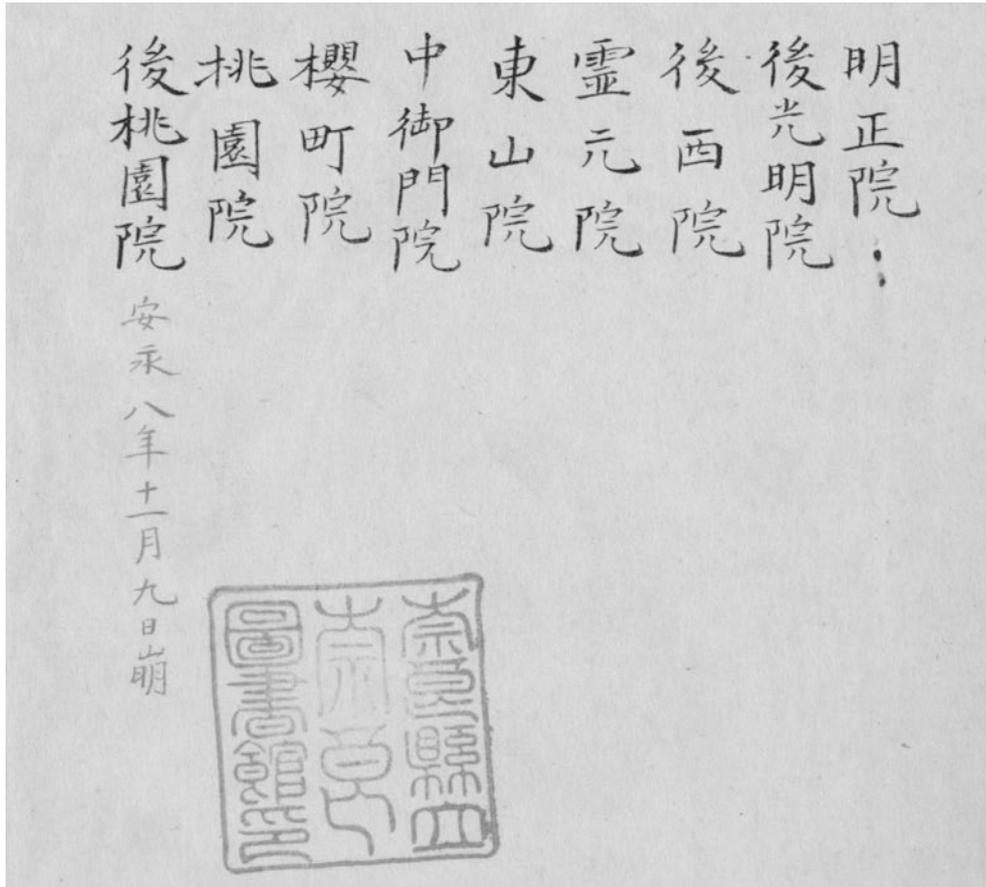


写真8 『諸陵考』卷末（後桃園天皇崩御 安永8（1779）年11月9日）  
 （奈良県立図書情報館所蔵）

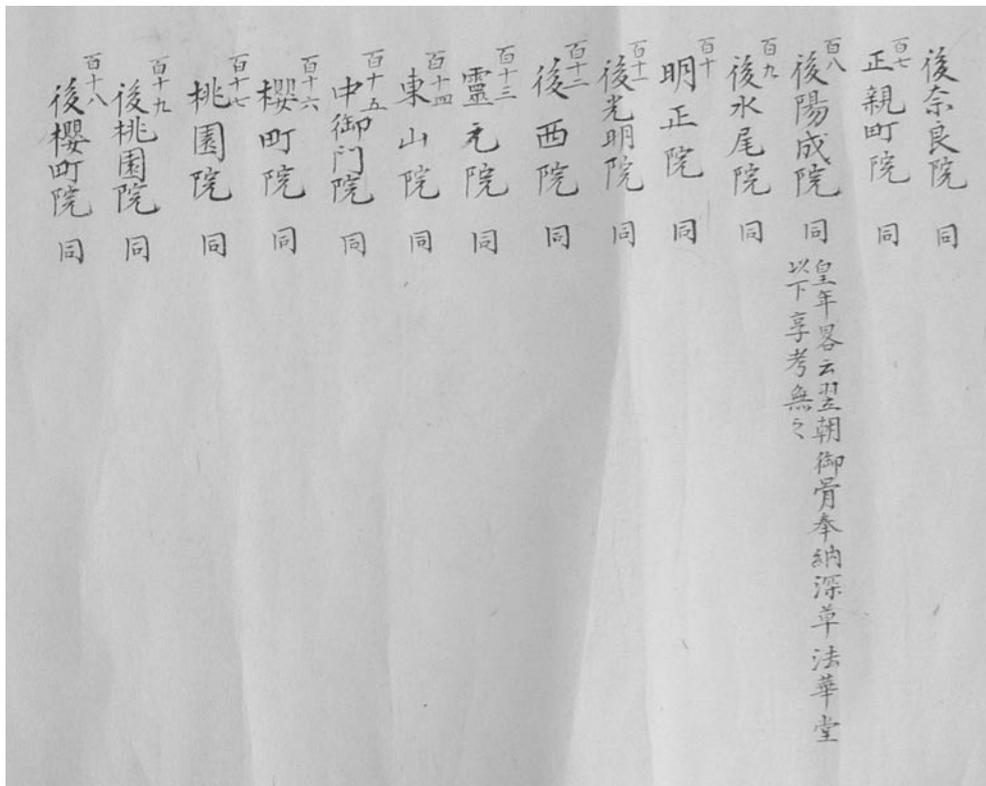


写真9 『神谷永平 山陵図』卷末（後櫻町天皇崩御 文化10（1813）閏年11月2日）  
 （奈良県立橿原考古学研究所所蔵）

が考証した結果を書き入れたものであろう。

さてこの『山陵図』において重要な点は、「陵図脱漏之分」として巻末に列記される天皇陵であるが、その最後が「百十八後櫻町院」（現在の歴代数では117代）が追記されている点である（写真9）。すなわち後櫻町天皇は文化10（1813）年に崩御しており、この図は1813年以降、第119代光格天皇（現歴代数）が崩御する天保11（1840）年までに制作されていると判断できる。まさに高野長英が書写したと考えられる1825～9年間とほぼ同時期に写されたものであると判断できる。神谷永平が国学に関係した人物であることは確かであり、それなりに自分の考証結果を絵図にも反映しているが、幕府の山陵考証にかかわる人物ではなく、ことさら「山陵家」というほど著名な人物であるとはいえない。すなわち、神谷永平の描いた『山陵図』の存在は、このような立場の人物においても書写することができる『山陵図』が市中で流布していたことを証明することになる。この点から判断すると『古山陵之図』が、ことさら稀覯本を手に入れて書写したというよりは、この時期それなりの数が市中に流布していた『山陵図』の一つをたまたま入手し、高野長英がその内容を書写し、『古山陵之図』と題してP.F.v. シーボルトに提出した可能性が高いことが改めて確認できる。

さて『諸陵考』と『神谷永平・山陵図』の2種類の『山陵図』を示したが、『古山陵之図』と比較する時に最も留意すべきことは、そもそも元禄の山陵探査の結果として『山陵図』が制作された地域は大和国内のみであるということである。よって正確にこの元禄時に制作された『山陵図』に名称を付すならば、『大和国山陵図』と呼称すべきであろう。

もう一点重要なことは、この『大和国山陵図』に描かれている山陵は、当然大和国内にある天皇陵（神功皇后陵は歴代に含められていたので描かれている）に限られており、元禄から享保にかけて所在地が明らかな29陵と、未考定陵として描かれる4陵の合計33陵が描かれているものである。すなわち大和国にあっても、この時点で所在地が明らかでない「崇神天皇」と「欽明天皇」の山陵は、描かれていないものである。

この2点の事実を踏まえて、改めて『古山陵之図』を見ると、この図が本来の『大和国山陵図』と大きく異なっていることがはっきりとしてくる。このことを次に考えていきたい。

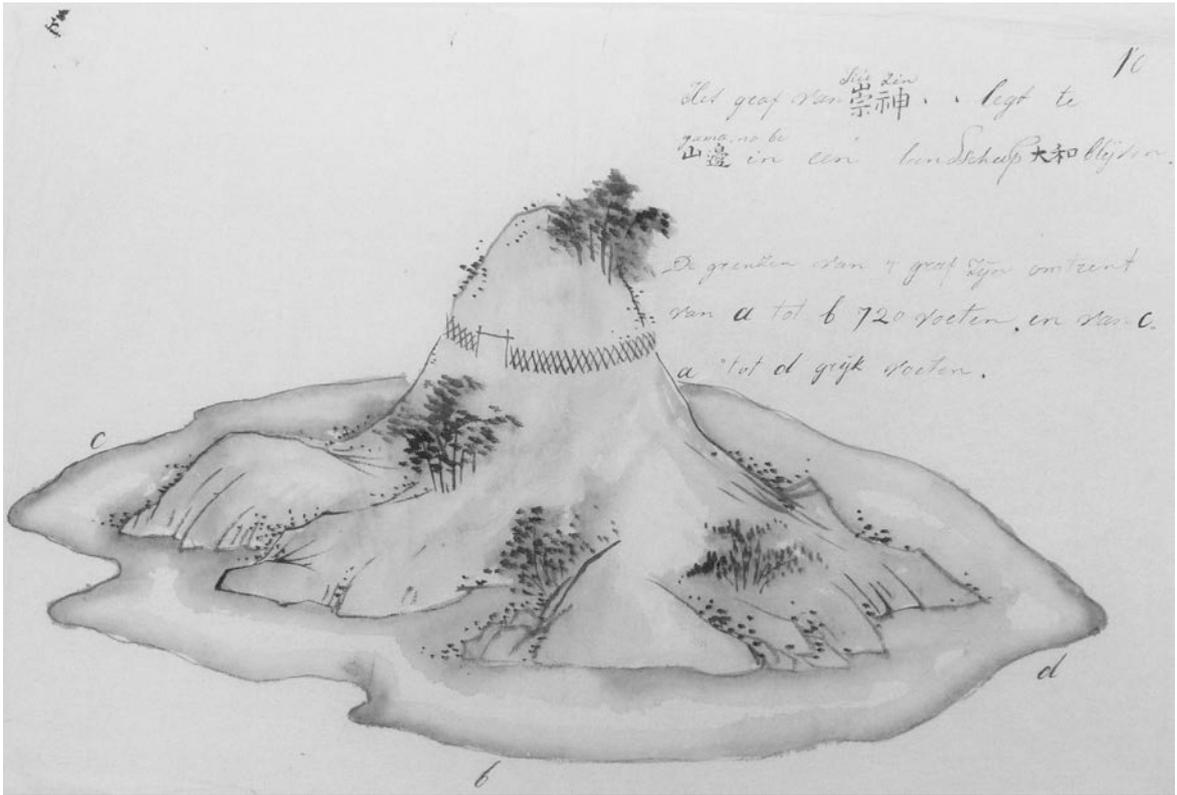


写真 10 『古山陵之図』 No. 10 崇神天皇陵図 (現歴代数 第 10 代)

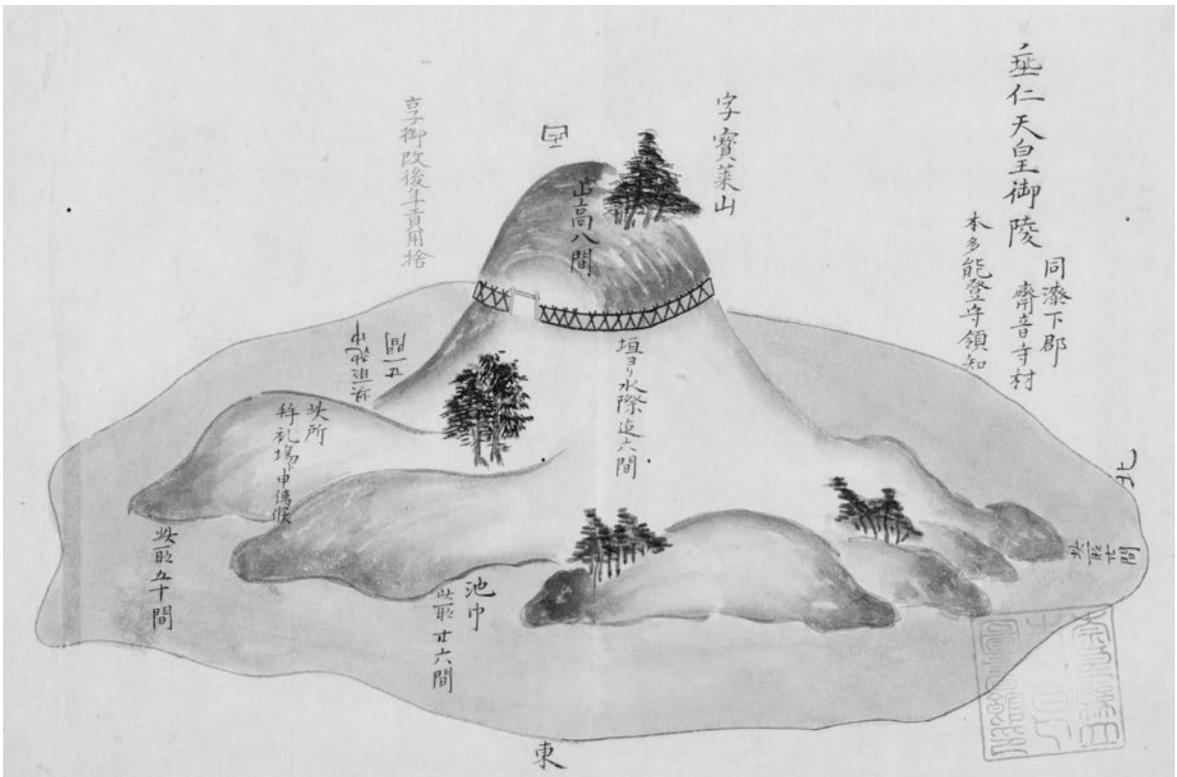


写真 11 『諸陵考』 (奈良県立図書情報館所蔵) 垂仁天皇陵図 (現歴代数 第 11 代)



写真 12 『古山陵之図』 No. 14 仲哀天皇陵図 (現歴代数 第 14 代)

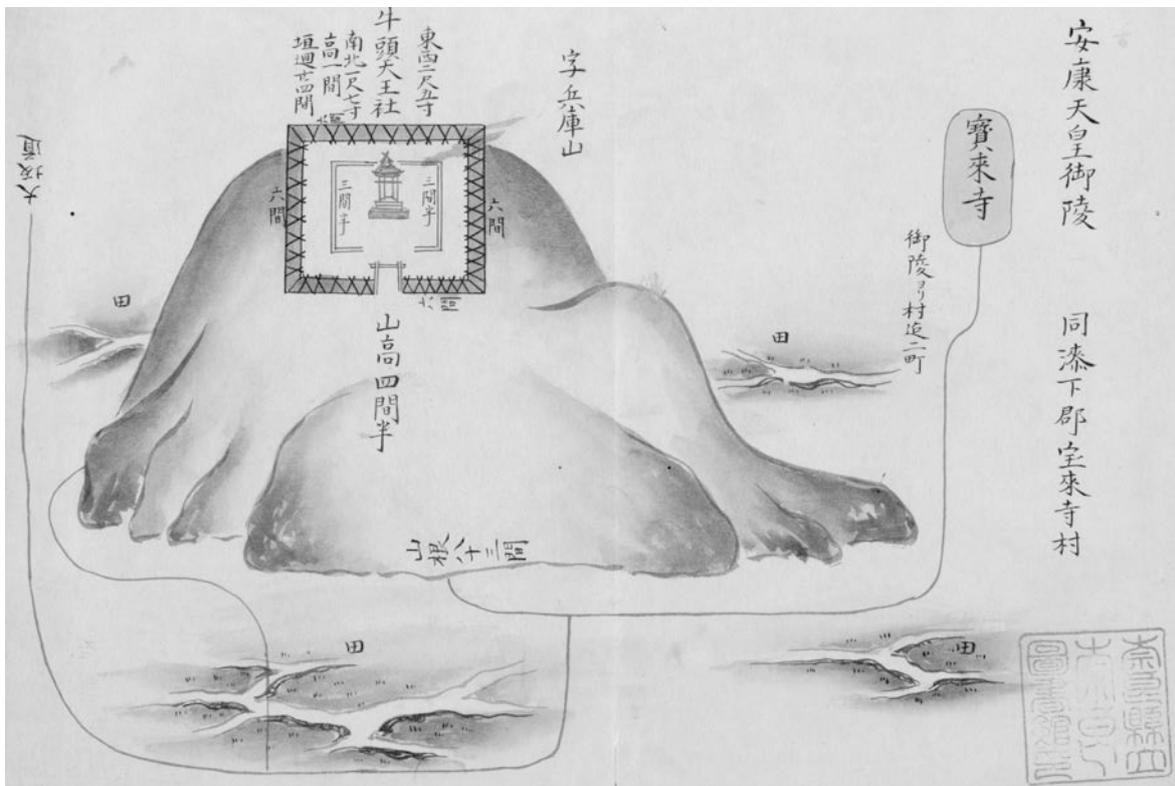


写真 13 『諸陵考』 (奈良県立図書館蔵) 安康天皇陵図 (現歴代数 第 20 代)

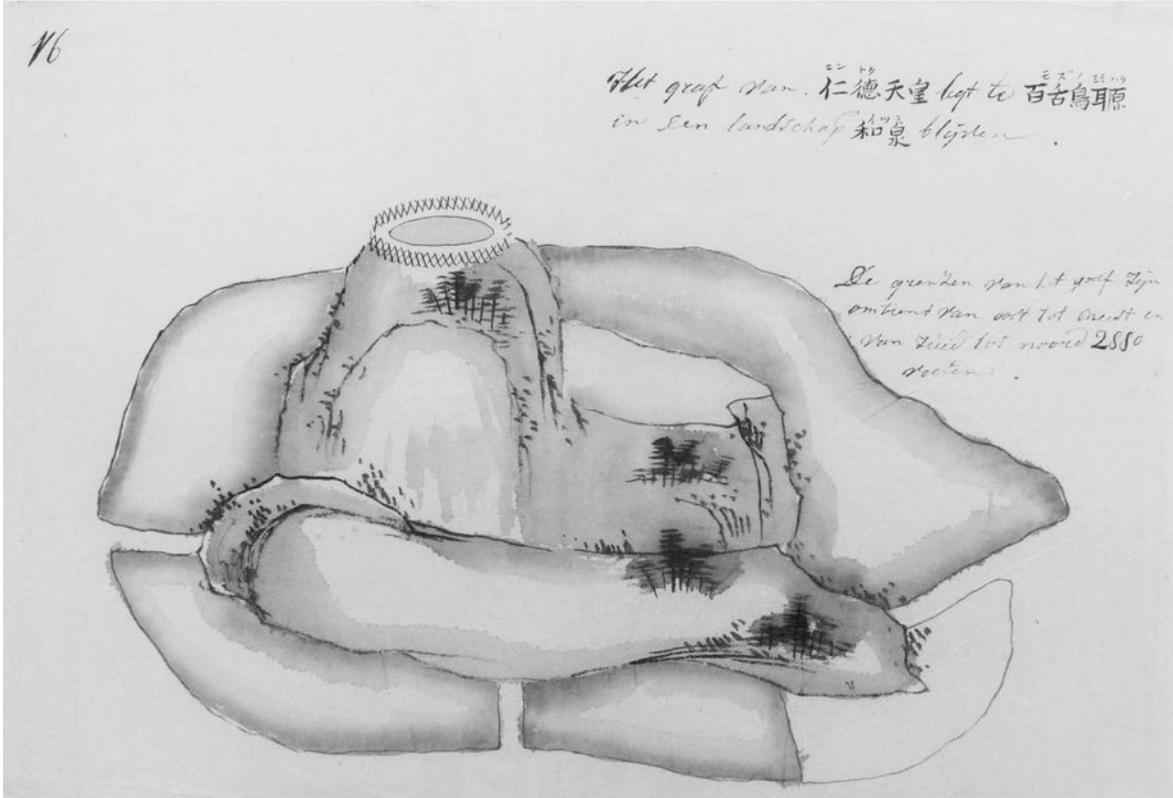


写真 14 『古山陵之図』 No. 16 仁徳天皇陵図 (現歴代数 第 16 代)

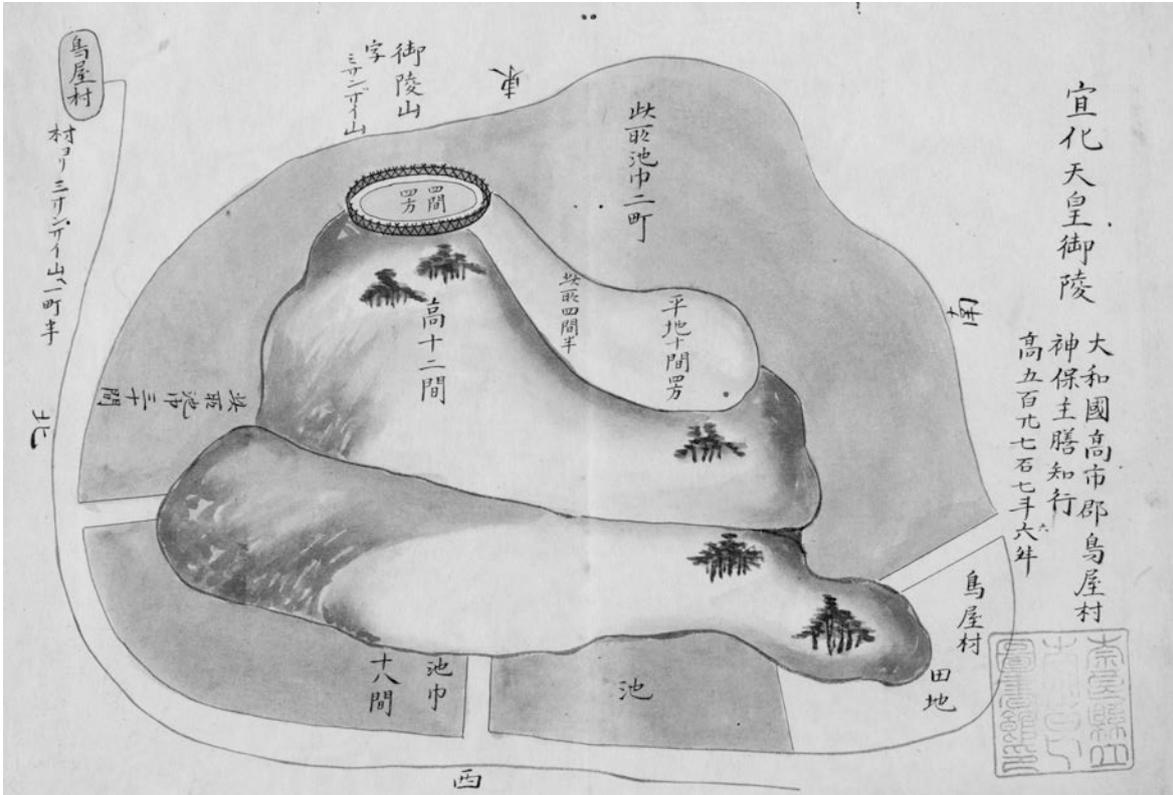


写真 15 『諸陵考』 (奈良県立図書情報館所蔵) 宣化天皇陵図 (現歴代数 第 28 代)

## (2) 『古山陵之図』における3つの「誤認」

前節において『古山陵之図』が元禄期の探索を契機として描かれた『山陵図』を原本とし、その後享保年間に実施した山陵調査時の所見を加え、さらに寛政2（1790）年に成立した「賀茂季鷹系」の絵図を模写したものと位置づけた。その代表例として『諸陵考』と『神谷永平・山陵図』を示したが、『古山陵之図』とは途中からその記述が大きく食い違っていく。本節においてはこの相違点を3点に絞って指摘していきたい。

1点目の誤認としては、『古山陵之図』には第10代崇神天皇陵の図が描かれていることである。これは、写真10（『古山陵之図』）と写真11（『諸陵考』）を見れば一目瞭然だが、『古山陵之図』「10」にある崇神天皇陵は、正しくは第11代垂仁天皇陵を描いているものである。なぜこのような間違いを犯したかであるが、元禄期にも、さらには『古山陵之図』が制作された1820年代においても、崇神天皇陵は治定はなされていないにもかかわらず、『古山陵之図』10枚目の絵図をそのまま第10代崇神天皇陵として記述したことが原因である。ちなみに、崇神天皇陵が現在地に決定した時期は文久の修陵時である。要するに決定していない崇神天皇陵をなぜ含まれているのかといえ、枚数順と歴代順を誤解してしまったことが原因と考える。

この枚数順を歴代順として記述してしまった結果、14枚目の神功皇后陵は歴代順にすべきかということ悩んだ結果、「14 b」という枝番を振ることによって、次の第14代仲哀天皇の皇后であることを示していると考えられる。さらに神功皇后陵以降も、枚数順を歴代順としたために、第14代仲哀天皇陵は河内に所在するにもかかわらず、本来大和にある山陵を描いたはずの『古山陵之図』の「14」に表示されてしまっている。写真12と13で比較するように、この図は第20代安康天皇陵の図であるべきものである。この結果写真14と15に示したように『古山陵之図』で仁徳天皇陵とする図は、本来は大和国にある宣化天皇陵の図であると判断できる。すなわち宮崎教授が示した仁徳天皇陵の図はまさにこの図であって、本来は宣化天皇陵の図とすることが正しいものであり、それゆえこれまで見聞したことのない「仁徳天皇陵図」が出現したという原因となった。これは枚数順を歴代順として、それぞれの絵図に天皇名をあてはめていったことから生じた間違いが、「謎の絵図」の種明かしとなる。これを、第2の誤認としておく。

第3としては、誤認とは言い難いが『古山陵之図』は神功皇后陵の図を含めて24陵が描かれている。本来、この系統にある『山陵図』には33陵が描かれるべきものであり、『諸陵考』・『神谷永平・山陵図』とも29の考定陵（崇峻天皇陵は「天皇屋敷」の図と2枚）と未考定陵4基で完結している。一方、『古山陵之図』では「23」の顕宗天皇陵（本来は元正天皇陵）で終わっている。すなわち未考定の4陵を含めて9陵分の図面が残っていない。書写した時点では存在したものの、その後失われた可能性もなくはないが、帙の厚みと収納具合、さらには最後の絵図（最終頁）に破れが目立つことは、この図が1番外側に長くあったと考えられることから、この24枚ですべてであった可能性が高いと考えている。さらに最後の4枚は日本語表記のみでオランダ語訳が記述されていないことから、ここまで書写して時間切れになったような印象を持つ。この9陵分の図面がないことを、『古山陵之図』と『諸陵考』等を比較した時の、第3の相違点として位置づけておきたい。

## 5 『古山陵之図』は「高野長英」の制作か

本章では小稿のまとめとして、これまで見てきた『古山陵之図』の諸特徴を整理して、この図が制作された背景を考えていきたい。特に、高野長英が制作した可能性に言及しておきたい。

端的に言って『古山陵之図』の最大の特徴は、『山陵図』において最も重要な「どこにあるか」という点をあえて明確にしない細工をしているということに尽きる。具体的にいえば、本来の原図にあっ

たであろう、その時代に使用されていた村名、村から陵までの距離、陵へ至る道筋などの情報が一切欠落している。しかしながら「どこにあるか」という情報を記さないわけにはいかないことから、「陵名」を用いて「〇〇国のどこどこにある。」という表記をしている。さらにはその陵名に東西南北の方位がある場合には、あえてその方位を使用せず、アルファベットに置き換えている。

この「陵名」を利用して天皇陵の位置を示すという細工は、それなりに高度な知識を必要とする。なぜなら『諸陵考』を見ても明らかなように、この時期に「陵名」というものはそれほど一般的でないと考えられ、それゆえ賀茂季鷹系『山陵図』を見ても陵名を記したものはない。陵名とは『延喜式』の諸陵式に掲載されているものであって、当然その意味を理解していなければ、この陵名を持って地名表記としようという発想は生まれてこない。それではなぜ『古山陵之図』の制作者がこのような細工ができたかといえば、参考にした図書が身近にあったと考えるのが妥当であろう。そしてその候補となりうる図書を、『シーボルト蒐集和書目録』の中に見つけることができる。この目録には『古山陵之図』の一つ前に「51. 山陵志 蒲生秀實 全一冊」とあり、1822年刊行との解説文が付されている<sup>(註11)</sup>。この書物については刊行年については諸説あるが、山陵家としてこの時期において第一人者である「蒲生君平」の著作であり、当然この中には各天皇の陵名や、その所在地の考証が詳述されている。この書物を理解していれば、陵名を所在地としてオランダ語訳し、本来の図にある江戸時代の村名を省くこと、あるいは方位を省略しながら描くことは可能であったと考えられる。

それでは、『山陵志』を理解している人物が、枚数順を歴代順と誤解するような単純なミスを犯すであろうか。この点もミスではなく、あえて手本とした『山陵図』を忠実に模写しなかったと理解した方が蓋然性が高い。なぜなら『山陵図』は旧国別に作成するのが通常であり、それはそもそも陵の探索は京都所司代から各地の奉行所に命じたものであるから、その報告は当然国別に上申されてまとめられたはずである。よって、その調査結果を示す『山陵図』も、国別に制作されてしかるべきである。このことは陵墓探索の基本であり、『諸陵考』の巻末にある「陵脱漏之分」にあっても、国別に各天皇の位置が表記がしてある。

すなわち歴代順に各天皇陵を描いた『山陵図』は賀茂季鷹系には存在しておらず、この点から考えると、むしろ『古山陵之図』は不自然である。このことから『古山陵之図』では、各絵図と実際の天皇陵名が一致しないことを承知のうえで制作しているものとする。その結果、この時治定されていない崇神天皇陵を表記し、さらに14枚目の神功皇后陵に至って歴代順として数えるべきか否かを逡巡した。そのために「14b」という枝番を付すことで、無理やりつじつまを合わせたように思われる。この「ためらい」の結果は、「14b」との筆圧がいたって弱々しく見えることと、誤記が多いことから傍証できるのではなかろうか。

すなわち『古山陵之図』は、あえて陵名を使用することによって位置情報を不明確にすること、そして歴代順とすることによって正確な『山陵図』としないことを意図して制作していると位置づけたい。

なぜ、このような二重の細工をするかといえば、それはP.F.v. シーボルトへ地図に類するものを提出したくないという一念と考える。先にこの『古山陵之図』の制作時期としては、1826年7月に江戸参府から出島に帰還し、1829年のP.F.v. シーボルトが国外退去を命じられるまでと考えた。この国外退去を命じられた理由が、一般に「シーボルト事件」と呼称される日本地図の不正持ち出しであり、このことを身近に感じていればこそ、P.F.v. シーボルトに地図と考えられるようなものを提出することをためらったものとする。それは地図を渡したという罪が、その図を筆写した人物にも及ぶことが当然予測されたために、先述した二重の細工によって、『山陵図』にある地図的な要素をできる限り排除して筆写したと考えれば、『古山陵之図』の特徴とした一つ目と二つ目の理由は納得がいく。

そして3番目の特徴とした時間切れについても、この時期に書写されたと考えれば納得がいく。す

なわち「シーボルト事件」は、1828年3月にP.F.v. シーボルトから幕府天文方高橋景保に送った手紙(日付は2月25日)によって内偵が始まったとされる。P.F.v. シーボルトと高橋は江戸参府の際に知りあっており、学問上の交際を深めていく。しかし結果的にこのことがP.F.v. シーボルトへ禁制品である日本地図を手渡す結果となり、高橋は同年10月に獄につながれる。このような動きは当然長崎にいたP.F.v. シーボルトの知るところになったであろうし、実際12月にはP.F.v. シーボルトの尋問、そして家宅捜索がなされている。当然、鳴滝塾に学んでいた塾生は落ち着かない日々を過ごしたはずである。

それゆえ研究助手としてP.F.v. シーボルトの近くで、様々な収集品の整理や書写をしていた人物にとっては、高橋の捕縛やP.F.v. シーボルトへの尋問等、長崎奉行所の監視がきつくなることは一刻を争う緊急事態として感じられたはずである。すなわちこのことが、24陵の図を描いたところで時間切れとなり、最後の4枚はオランダ語の訳も記さないという中途半端なままの『古山陵之図』ができあがった原因であると考えられる。このように考えれば、第3の相違点も納得できる。

それでは、この2つの細工ができる能力を有し、「シーボルト事件」を身近に感じていた人物は誰であろうかと考えたとき、高野長英こそまず頭に浮かぶ人物である。彼は江戸参府に同行し、P.F.v. シーボルトの同行者として、江戸で親しく交際した人物を見聞したはずである。当然その中に、高橋景保も存在したであろう。江戸参府を終え出島へ帰還し、研究助手として引き続きP.F.v. シーボルトの蔵品の整理を手伝っていた彼は、最も早く、そして正確な「シーボルト事件」の動きを察知できたであろう。

だからこそ彼は地図として疑われるような『山陵図』を残さないように2重の細工を施した『古山陵之図』を制作した。そして彼は、それができるだけだけの知識を有していたことは疑いようがない。それはP.F.v. シーボルトの収集した書物の中に『山陵志』があり、この書物に目を通すことができる立場にいたことがその理由である。さらには仁徳天皇陵の図が仁徳天皇陵ではないことを承知の上で、しかしながらこの仁徳天皇陵が最も大きな陵であることを知っているからこそ、「2880 フィート」という架空ではあるが、『古山陵之図』において最も大きな数字をこの図に書き込んでいる。

いかに高野が用心深くこの図を制作したかということが、陵名の使用、歴代順への変換、さらに仁徳天皇陵の大きさへの配慮という、二重、三重の細工から垣間見えてくる。そして、彼が急いでいたことは、書写するに当たった修正の仕方が荒っぽいことと、何といたって途中で終わってしまっていることに示されている。

高野長英は「シーボルト事件」に連座することなく、1828年のうちに鳴滝塾を密かに去ったとされている。なぜそのような行動をとったかといえば、研究助手としてP.F.v. シーボルトの身近にいたからこそ、自分にも高橋景保と同様の運命が待ち受けていることを察知したためであろう。このような背景を考えると、『古山陵之図』の制作者は、C・クリーガーが想定したように「高野長英」の可能性が高いと考えられる。

## 6 おわりに

以上、ライデン民族博物館において『古山陵之図』を詳細に観察した結果をまとめてきた。

2015年12月にはじめてこの『古山陵之図』の存在を知り、映写された「仁徳天皇陵」の図に衝撃を受けて以来、「謎の絵図」の存在が気になっていた。この点については今回の調査によって、とりあえず自分の中では納得する回答を得られたように思う。しかしながらすべては『古山陵之図』の制作者が「高野長英」であることを前提とした推論であることは間違いない。よって、小稿の精度を上げるためには、『古山陵之図』に添付された紙片以外の根拠によって制作者が高野であることを立証する必要がある。

いまのところ調査中としかいえないが、1つの可能性としては各絵図に残された文字と高野による他

の著作物に記された文字を比較し、その筆跡鑑定をすることによって『古山陵之図』に記された文字が、高野の手によるものであることを立証できないかと考えている。いまだにこの試みは成功していないが、この筆跡鑑定を今後の課題として、ひとまず擱筆しておきたい。

## 註

(1) このシンポジウムは『國學院大學 国際シンポジウム・ワークショップ 2015 博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究』と題されて平成 27 (2015) 年 12 月 12 日・13 日に、國學院大學を会場に開催された。また、翌年 2 月には、國學院大學博物館 2016 『報告書 博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究』が刊行されている。

(2) 本調査は、「近代初期における好古家ネットワークの形成と国際交流」と題した研究の一部であり、実施に当たっては國學院大學特別推進助成金の援助を受けた。

調査は、平成 29 年 1 月 28 日日本出発、2 月 2 日帰国のスケジュールで実施した。調査メンバーは下記のとおりである。

また、ライデン民族博物館における調査では、同館日本・韓国コレクション担当学芸員ダン・コック (Daan Kok) 氏にご高配賜った。ここにお名前を記し、感謝の意を表したい。

内川隆志 (國學院大學研究開発推進機構教授)・深澤太郎 (同准教授)・イローナ・パウシュ (東京大学大学院客員准教授)・徳田誠志 (宮内庁書陵部 陵墓調査官)

(3) この展示会は、昭和 63 年 3 月 29 日から京都国立博物館を皮切りに、5 月 14 日から名古屋市博物館、6 月 21 日から東京国立博物館を会場として開催された。この展示会に併せて刊行された図録は、下記のとおりである。

朝日新聞社 1988 『日本・オランダ修好 380 年記念 シーボルトと日本』

(4) 註 3 に示した図録を参照して、玄口勝彦氏が下記の論考を発表している。

玄口勝彦 2015 「シーボルトの神武天皇陵図」『青陵』第 145 号 奈良県立橿原考古学研究所

註 5 このサインを残した人物である C・クリーガー (Carel Coenraad Krieger) については、イローナ・パウシュを通じマティ・フォラー氏 (ライデン民族博物館) より、ご教示を受けた。マティ氏には、現地での調査時においても種々ご教示を賜った。ここにお名前を記し、感謝の意を表したい。

また、日本国内では C・クリーガーについては、下記の論考に言及がある。

森由美 1994 「15 オランダにおける日本研究」『日本研究』第 10 集 国際日本文化研究センター

(6) 高野長英が描いたとされる「墨竹図」については関西大学文学部教授長谷洋一氏よりご教示賜った。また、高野長英の画力や執筆論文等については「高野長英記念館」館長及川文男氏よりご教示賜った。ここにお名前を記し、感謝の意を表したい。

(7) P.F.v. シーボルトはオランダに帰国後、日本で収集した図書の目録を『日本書籍及び写本目録』として 1845 年に刊行している。この中に示された石刷版目録の中に『古山陵之図』の表紙に添付されたものと全く同じ「52. 古山陵之圖 Ms」という記述がある。この目録から「Ms」は「手稿」を意味するものであることがわかる。また、内容の解説は P.F.v. シーボルトの友人であり、助手を務めたヨハン・ホフマン (J. Hoffmann) が執筆している。『古山陵之図』の解説文は次の通りである。

蘭語 「52. Ko san-rjono dsu-e, antiquorum, quibus Mikadones inlati sunt, tumolorumimagines, manu pictae」

和訳 「52. 古山陵之図。天皇が埋葬されている古代墳墓図。写本。」

中野三敏 (監修) 宮崎 克則 (編集) 2015 『シーボルト蒐集和書目録』八木書店

(8) 絵図に記された蘭語の翻訳については、一緒に調査を実施したイローナ・パウシュ氏より多々ご教示賜った。ここにお名前を記し、感謝の意を表したい。

なお、記述において内容を十分に表現できていない部分があるとすれば、筆者の責任である。

(9) 『山陵図』の比較検討には多くの先行研究があるが、そのうち今回は下記に示した増田一裕氏の研究に依拠したところが多い。

増田一裕 1996 「山陵図の基礎的考察—大和国山陵図を中心として—」『考古学雑誌』第 81 巻第 2 号

(10) 奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料の閲覧については、「考研特別利用第 17 号 平成 28 年 5 月 6 日付」にて許可を受け、同年 5 月 13 日に実施した。実施に当たっては同研究所所長菅谷文則氏はじめ、所員の方々にご高配賜った。ここにお名前を記し、感謝の意を表したい。

(11) 註 (7) に示した『シーボルト蒐集和書目録』において、『山陵志』については、次のように記してある。

蘭語 「51. San rjo si, memoriale tumulorum, quibus Mikadones inlati sunt. Auct. Kamo-u Fidesane Jedo 1822, 2 kiuen in 1 vol. in 8

和訳 「51. 山陵志。天皇が埋葬されている墓の記念物。著者は蒲生秀実。江戸 1822 年、2 巻 1 冊、8 折判。」

この目録によれば、P. F. v. シーボルトが持ち帰った『山陵志』は、1822 年に刊行されたものであることが明確である。よって、刊行からそれほど年月を経っていないときに、入手したと考えられる。

なお、蒲生秀実（君平）は 1813 年に没しているので、P. F. v. シーボルトとは直接の面識はあり得ない。

#### 補記

本文脱稿後、『古山陵之図』に触れた下記出版物の存在を知ったので、言及しておく。

秦 新二 1992 『文政十一年のスパイ合戦-検証・謎のシーボルト事件-』 文藝春秋社  
本書において、秦氏は次のように記す。

1. 「『古山陵之図』も、戦略調査の一環に当たるものではないかと思われる」
2. 「彼（筆者註：高野長英）はシーボルトに同行して裏の江戸参府を行い、下関でシーボルトに天皇家御陵調査を命じられ、単独で関西に向かった」
3. 「かなりのものは長英自らが天皇陵を訪れて写生したものだ」
4. 「天皇陵を調査したことで長英は攘夷派と疑われ、のちの「シーボルト事件」の際に逃亡生活を送らなければならなかった」

この 4 点について、検証していきたい。まず 1 番目の「戦略調査」であるが、P. F. v. シーボルトの江戸参府が、それまでの江戸参府に比べ時間がかかり、気候や港の形状・深さを調べていることは事実である。さらに、P. F. v. シーボルトが日本の歴史に興味を持っていたことも事実である。しかしながらこの時期各種の『山陵図』が流布していたことは事実であり、天皇陵の図や場所が秘匿されるべき情報であるとは考えられない。

また、2 と 3 の見解であるが、『古山陵之図』に描かれた図はいずれも原本と考えられる図が残されており、高野長英のオリジナルと考えられる図は存在していない。さらに実際に各天皇陵を訪れたと考えるには、本文で記したように位置情報が極めて曖昧である。この点から考えて、高野が江戸参府のときに密かに別行動をして天皇陵へ赴き、実際に自分の目で陵墓を見て描いたとは考えられない。さらには、原図はあくまでも元禄の修陵直後の姿を写生したものであり、19 世紀前半の姿ではあり得ないと考えられる。

4 の逃亡生活であるが、高野が鳴滝塾を密かに立ち去ったことは、むしろシーボルト事件に巻き込まれないように自らの意志で姿を消したものであり、「攘夷派」であるがゆえに姿を消したとは考えられない。後年「蛮社の獄」に連座し獄につながれ、その後逃亡するが、その際の経緯と鳴滝塾から姿を消した経緯は全く異なるものとして理解されるべきであろう。秦氏のご著書は多岐にわたる考察が記されており、その是非を検討することは筆者には不可能である。しかしながらこの『古山陵之図』については、内容の検討と他の山陵図の検討等からも秦氏の指摘をそのまま受け入れることはできないと考える。

(徳田誠志)

平成29年度 科学研究費助成事業 基盤研究B 研究課題番号17H02025

「好古家ネットワークの形成と  
近代博物館創設に関する学際的研究」 I

平成 30 年 2 月 28 日発行

編 集 内 川 隆 志

連絡先 〒 150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學学術資料センター研究室

WEB サイト <http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/>

印 刷 有限会社 平電子印刷所